



# キルヒホッフ の 法 則

黒川 文



# 目次

1. IC チップ	
1. IC チップ .....	3
(1)	
(1) .....	7
(2)	
(2) .....	17
(3)	
(3) .....	25
(4)	
(4) .....	31
2. マテリアル	
2. マテリアル .....	39
(1)	
(1) .....	43
(2)	
(2) .....	53
(3)	
(3) .....	59
3. 夏休み	
3. 夏休み .....	69
(1)	
(1) .....	73
(2)	
(2) .....	81
(3)	

(3) .....	89
(4)	
(4) .....	95
4. 情報部	
<b>4. 情報部</b> .....	103
(1)	
(1) .....	107
5. ファイル	
<b>5. ファイル</b> .....	115
(1)	
(1) .....	119
(2)	
(2) .....	125
(3)	
(3) .....	131
(4)	
(4) .....	139
6. クルーズ	
<b>6. クルーズ</b> .....	145
(1)	
(1) .....	149
(2)	
(2) .....	159
(3)	
(3) .....	165
(4)	
(4) .....	175
(5)	
(5) .....	181
7. 研究室	
<b>7. 研究室</b> .....	189

(1)  
**(1)** ..... 193

(2)  
**(2)** ..... 201

(3)  
**(3)** ..... 209

8. 罾《わな》  
**8. 罾《わな》** ..... 217

(1)  
**(1)** ..... 221

(2)  
**(2)** ..... 227

(3)  
**(3)** ..... 233

(4)  
**(4)** ..... 243

9. ネゴシエーション  
**9. ネゴシエーション** ..... 249

(1)  
**(1)** ..... 253

(2)  
**(2)** ..... 259

10. その後  
**10. その後** ..... 267

(1)  
**(1)** ..... 271



## 1. IC チップ





## 1. ICチップ



(1)



(1)

その男は突然、芽衣の前にやってきた。

アルバイトで山本教授の研究室事務員をしているので、取り次ぐ訪問客は毎日うんざりするほどあり、そのほとんどは同じ顔に見えてしまうほど似たり寄ったりだったのだが、この日の来訪者だけはいつもと違っていた。

「すみません。こちらの計算機物理学教室山本先生にご用件があって参りました」

「は、はあ、どちら様ですか？」

口ぶりだけはやけに丁寧な二人連れで、黒っぽい背広の三十代の男は名刺入れから「警視庁刑事部、小林朝男」という名刺を出し、もう一人は「警視庁捜査一課、警部補、長岡孝行」とあり芽衣はびっくりして椅子から立ち上がり、教授にとり継いだ。

「あの、先生、刑事さんがお見えです」

「驚かなくていいよ、捜査じゃないんだろう？」

山本教授が鷹揚に構えていると、彼らは許可もなく部屋の中に入ってきた。

「いえ、捜査ですよ。外国為替管理法違反の疑いで、ちゃんと捜査令状も取っています」と、小林と名乗る刑事が答えた。

「どういうこと？ 説明したまえ」

「まあ、落ち着いて。状況をお知らせします。腰掛けていいですか？」

「ええ、失礼しました」

相手の穏やかな態度に山本教授も穏便な態度になっていた。芽衣はドリップのコーヒーを三人分入れて、客人の前にコーヒーカップを置いていった。

「こちらの研究室と、大日本エレクトロニクスとの間で共同研究なるものがなされていますね」

彼は単刀直入に切り出した。

「何が起こったのかは知りませんが、彼らは事業としてICチップの開発を行い、こちらは研究として側面からサポートする。そういう間柄であり、彼らが何かをしたからと言ってこちらに苦情を持ち込まれても困りますよ」

「ええ、ですが、禁制品の不正輸出の疑いがもたれているんですよ」

「不正輸出？ それは別件捜査ではないですか？」

山本教授が気色ばんで尋ねた。

「具体的に言いましょう。大日本エレクトロニクスが製造している、弾道ミサイル防衛システムであるPAC4のフェイズドアレイレーダーのガリウム・ヒ素半導体、そして、制御用コンピュータシステムのCPUボードが、密かに日本国外に持ち出された形跡がありました。担当技師も先月から行方不明になり、警視庁が極秘で捜査に当たっています」  
「極秘とは？」

「極秘であるのは、通常の失踪者の扱いと異なるからです。PAC4のことがなければただの、失踪人として処理するところですが、今回は誘拐に準ずる扱いで捜査しています」  
「それで、仮に大日本エレクトロニクスから、ICチップを旧共産圏に輸出したとして我々に、何の疑いがあるのです？」

山本教授はため息をつきながら、湯気が上がらなくなった冷めたコーヒーに砂糖を入れ、スプーンでかき混ぜた。小林は、ブラックで口にしたが、長岡は手をつけなかった。「正直に言ってしまうと、この事件の解決にご協力願いたいのですよ。でも、もし協力しないというのであれば不正輸出、正確には外国為替管理法違反の共犯者として摘発します。元々アメリカの技術であったものをあなた方が国内で開発して第三国への不正輸出を手助けした。そう解釈することは可能です」

小林は訥々と話を始めた。芽衣は横で、トレイを胸に抱えたまま、じっと横で動けずにいた。刑事と言うだけで蛇ににらまれた蛙のようになってしまっていた。相手はめちゃくちゃなことを言ってきている。しかし、芽衣では口答え一つ出来ないだろうと、山本教授の強気を尊敬の目で見ている。

「ほう、ご存じの通り、大日本エレクトロニクスはアメリカからのライセンス生産のためのノウハウを得られなかったので、我々が手伝って開発したのです。基本的にPAC4システムそのものを売り出すのでなければ、問題はないと思いますがねえ」

「問題はCPUボードそのものにあります。たとえ旧式のレーダーと接続しても、三万メートル上空の目標を百二十八基同時に打ち落とす能力があるのと、こちらの防空性能を知られてしまうこと。……そして、それが、一人の技師と一緒に行方不明になった。これの意味するところはおわかりでしょう」

「相手は弾道ミサイルを保有する国家の情報機関とでも、言いたげですな」

「はい、それは可能性の一つです。単なる行方不明なら問題はないのですが、万が一にも現実のものとなった場合、日米同盟に亀裂が生じます。内閣官房の後藤審議官からも、山本先生にはご協力下さるようお口添えもしていただく予定ですよ」

後藤審議官は山本教授の同級生でもあり、首相の私的諮問機関の委員をつとめている外交・防衛会議の世話役もしている。小林が硬軟あわせて攻めてきていると感じた。

「彼がそういうなら問題はないよ。出来るだけの協力はしよう。でも、君はいったい何者だい？ 警視庁にしては階級もないし」

「警察庁からの出向ですので、今回、階級を名乗っていません。じゃまになる場合もありますので」

「そう。……では、ICチップの件に関しては、こちらは何も知らないが、行方不明になった技術者の方には気の毒なので捜査に協力する。これがこちらの立場です」

「わかりました。ご協力いただけるなら形式は問いません。外為法の方はしばらく保留にしておきます。でも、最後の最後にはここでのガリウム・ヒ素半導体の研究資料一式を

押収しますからね」

「では、お引き取り願います」

芽衣はドアの外まで見送った。——どうも、お構いもしませんすみません。と、場違いな挨拶をした。

「あなたは、学生さん？」

と、小林が帰り際に芽衣に聞いた。

「はい、事務のアルバイトをしています」

そういうと、つま先からてっぺんまでじろりと観察された。

小林は夏場だというのに、濃紺のスーツに赤いネクタイという、アメリカ大統領のような格好で、身長は百八十センチくらいと大柄で、顔の作りも立体的で少し日本人離れしていた。

「君の専攻は？」

「理学部ですが、まだ教養課程です」

と芽衣は馬鹿正直に答えた。

「キルヒホッフの法則は知ってるね」

「ええ、回路の中の一点に注目したとき、入ってくる電流と出て行く電流の合計はゼロである。でしたっけ？」

「よくできました。では、応用だ」

——意味がわからない。

「行方不明になった人と、外から入ってきた人の合計が釣り合うとき、それはどういう状態だと思う？」

「はぁ？」

それこそ、訳のわからない質問だった。

「応用が利かないと駄目だよ。知識だけでは何の役にも立ちもしない。誰かが行方不明になっても、社会全体としては影響がない場合、誰かが入ってきていると考えた方がいい。入ってくるのが目的の場合もあるし、結果の場合もある。だが、目的なら犯罪なんだ。じゃあ、また来るよ」

彼はそう言い残して、先に廊下を進みかけていた、もう一人の刑事に追いついて歩いて去った。

——何なんだよ？ 芽衣は訳のわからない不愉快さに包まれた。

コーヒーカップを片付けなきゃ、と思って教授の部屋に戻ると、山本教授は難しそうな顔をしていた。いつもは優しいおじさまなのだが、さっきから眉間にしわを寄せている。芽衣は気を遣いながら部屋の流しで、コーヒーカップを洗った。でも、じゃぶじゃぶと音が鳴り響いた。

「芽衣ちゃん。ちょっといいかな？」と、山本教授が呼んだ。

「はい」

芽衣は手を拭いて、教授の目の前に立った。

「さっきの彼らの正体なんだが、何者だと思う？」

「警察庁の官僚で、警視庁に出向中と伺いましたが」

「そうじゃなくて、その裏の顔だよ。官僚がIC技術者が消えたくらいのことで動いたりしない。日米同盟がどうのと言っていたが、多分、そっちが本命なんだろう」

「あの、先生。PAC4って何なのですか？」

「ああ、敵国から飛んでくる弾道ミサイルを打ち落とすミサイルシステムのことだ。高性能レーダーで飛んでくるミサイルを探知して地上からミサイルを打ち上げて落とすんだ。その制御システムを握っている技術者のことで躍起になっているようだが、……」

「じゃあ、大問題じゃないですか？」

「いやいや、このシステムの開発には膨大な人間が掛かっている。一人や二人消えたところでわからないだろう」

「では、この名刺は出鱈目だとおっしゃるんですか？」

「それがわからない。そんなことは電話一本で調べがつくし、もし、本当なら警視庁なんかの出る幕じゃない。アメリカ大使館の息が掛かっているかも知れないな」

芽衣は瞳をきょろきょろさせた。

何だか、急に国際的な話題に周りを取り囲まれつつあることに違和感を感じつつあった。しかし、今までは単に芽衣が、そんな問題に無関心であっただけであり、世界は芽衣の存在にかかわらず動き続けるし、思惑にも影響されることはないのかも知れない。

「先生、あたしに何か出来ることはないでしょうか？」

「そうだな。黒澤君と協力して調査を手伝ってくれ」

「お兄ちゃんど？　いえ、失礼しました」

「それから、この名刺の番号に電話して本物かどうか確認してくれ」

「え？」

そう言われ、芽衣はどきどきしながら受話器をあげて名刺のナンバーを押した。ピ、ポ、パと押すと芽衣の願いとは裏腹にすぐにつながった。代表番号ではないのでつないでもらう必要のない番号だった。

——はい、捜査一課一係。

「あ、あの、……」

芽衣が、長岡氏を呼び出すと、彼は外出中で用件を承ると、代わりに出た刑事が答えた。もう一人の小林氏は、刑事部に掛けたところ、ちゃんと出てきた。

「はい、小林はわたしです」

「えっと、もう一人小林様はいらっしゃいませんか？」

「小林は三人います。誰ですか？」

「小林、……朝男様です」



「アサオ？ ああ、彼か、用件を承りましょう」

「あの、いらっしゃらないのですか？」

「ええ、席にはいないので」

「そうですか、失礼しました」

芽衣はほっとして受話器を置いた。小林がすごく怪しげに思えてきた。

「山本先生。この番号ですが、本物のようです」

「いなかったかい？」

「外出中でした」

山本教授が上品な腕時計を見た。彼らが出てから五分もたっていない。本郷にある東都大学から、桜田門の警視庁庁舎まで歩きが十分、地下鉄が五分としても、また、あるいは自動車で十分としても、まだ帰っていないはずだったから本物なのだろう。

「それじゃ、大日本エレクトロニクスの話はまんざら嘘でもなさそうだ。田端君を呼んできてくれ」

「はい」

完全に芽衣はつかいっぱいになっていた。意味のわからないままに動き回っている。田端助教授の研究室は同じフロアの少し離れたところにあり、彼が大日本エレクトロニクスとの共同研究の窓口となっていることくらいは知っていた。研究のほとんどはもちろん、大学院生と学生がやっている。

とんとん、とノックしてから芽衣は田端助教授の研究室を覗いた。彼は書き物に没頭していた。

兄の情報によると、田端助教授は三年前に外務省を辞めたところを、山本教授がスカウトしてきた元官僚らしく、現在も物理学のことはそっちのけで、国際政治の研究をしている。教授自身も、研究など学生にやらせておけばいいと、兄にも公言しているようで、「非常に幅広い」人材を集めようとしているそうだった。

現に、大手半導体メーカーである大日本エレクトロニクスとの共同開発の案件も、ふつうなら工学部電子工学科の分野なのだが、こうした人脈の効果があり、実施することになったと兄は言っていた。

「教授がお呼びかい？」

「はい、……大日本エレクトロニクスのことだそうです」

「そう」

芽衣は敢えて刑事が来たとは言わなかった。

「何かご都合が？」

「いやいや、教授のお呼びならすぐに行きますよ」

と言ってにやりと笑った。芽衣は彼の笑顔が嫌いだった。何となく不気味で、ぶすつとした顔の方がかわいい気がする、そんな雰囲気だった。

——あの。と芽衣は歩きながら前から気にしていたことを聞いてみた。

「何だい」

「田端先生は外務省出身だと聞いたのですが」

「そうだよ」

「どうしてお辞めになったのですか？」

「ずばりと言うねえ。君に話すいわれはないよ」

「すみませんでした」

「外交官試験って知ってるかい？」

「何となく」

「合格者は外務省の国家公務員の中でも、扱いが雲泥の差なんだ。僕は根っからの官僚だからああいうのが嫌いだったんだ」

——合格できなかったんだ、きっと、と思った。

芽衣は急に親近感が湧いてきた。

実際には平成十三年を持って外交官試験（外務職員Ⅰ種試験）は国家公務員Ⅰ種に統合されてしまい、もはや、彼の野望は適わなくなったらしかった。

山本教授の部屋に戻ると、彼は田端助教授にソファを勧めて、自分も座った。芽衣の想像とは逆に、刑事の話は出なかった。

「研究の進捗具合だが、田端君、どうなっているんだい」

「ええ、順調ですよ。先日、先方の武田部長がいらして、半導体の試験ウェハー四百種類を持ち込んで、工学部の中山教授のところで加工して評価用ボードを作ってもらい、ベンチマークテストを実施しました」

「ほう、そこまで進んだの？」

「はい、結論から言うと、試験チップの一つに、従来のシリコン型ICより百倍の速度で作動するものが見つかりました。ガリウム、ヒ素に、イットリウム、アンチモンを微量くわえたものです」

「百倍か、実際にはそれよりも落ちるだろうねえ、でも、次世代防空システムの心臓部には使えそうだ」

「ええ、今、学生に高周波特性を、計算機センターのスパコンを用いてシミュレーションさせています。この結果で回路図を書き上げて先方に渡せば一応、完了です」

「PAC・NEOシステムだったね」

「ええ、アメリカがハードウェアを供与し、日本側がシステムを自前で用意する。これが、今回の趣旨ですが、アメリカよりいいものを作って逆輸出することが、信頼を損なってしまった日米同盟を回復する第一歩です」

「PAC4システムとは大きく変わったんだねえ」

「あのときは極東防衛という共通の利害関係があったので、システムを供与してもらいましたが、……ああ、一部がブラックボックスで日本側が開発していますね。しかし、今回のPAC・NEOシステムは、高度五万メートルの五百十二個の目標を同時に攻撃できるもので、見た目は大して変わりませんが、処理能力は大幅に向上しているんですよ」

芽衣は、田端助教授の横に立ち、少し膝をかがめてコーヒーを出した。

——ありがとう。と田端は受け取った。

「それで、……先方のスタッフだが、変わったことはなかったの？」

「いや、別に、ありませんよ。先方の窓口は習志野工場の武田部長さんでずっと前から一緒です。ただ、その下に誰がついているかはこちらは知りません」

「うん、そこまではうちが関知する必要はないからねえ」

山本教授はさっきと同じようにコーヒーにシュガーを入れてかき回した。こう、来客が多いとコーヒーの飲み過ぎになるな、と、芽衣は素朴な問題を気にした。

「それで、先方のスタッフに何か落ち度でもあったのですか？」

「大したことじゃないんだが、警察を名乗る男が、大日本エレクトロニクスがPAC4システムのICチップを不正輸出したと言いがかりを付けてきたのでその確認だけ」

「ああ、そういうことでしたか。小さなものですから持ち出しは簡単でしょう、財布の中に入れてたりとかしてですね、ですが、それだけなら意味がありません。ノウハウがないとまるっきり暗号同然です。だから、全体像を知る技術者とペアで輸出しないと無意味でしょう」

「それがね、一人行方不明になったと言ってきているんだ」

「そっちの方が問題ですね」

「うん、相手は警察ではないと思う。黒澤君と協力して調査してくれ。問題によっては内閣官房の後藤君にわたしから警告しておかなければならないからな」

「わかりました」

と、田端助教授は芽衣の方を見た。芽衣はお盆を抱えたまま、どきり、とした。

「彼女は学生だから」

山本教授はそう言って、にやりと笑みをこぼした。

「あ、あの、……」

「何だい」

「い、意味がわからないんですけど」

「わからなくていい、忘れてくれ」

教授はそう言い、忘れたかのように元の書き物に向かった。田端助教授は、コーヒーを飲み干すと自分で流し台に置き、そのまま部屋の外に出て行った。芽衣はまたカップをじゃぶじゃぶと洗って元に戻した。

ナプキンでテーブルに付いたコーヒーカップと砂糖の後を拭き取り、きれいに片付けて、また、脇の席に戻り、事務仕事を再開した。研究室の備品の購入伝票などにぼん、ぼ

んとスタンプを押して封筒に入れたりしていると、教務課から帰ってきた卒業研究履修届のコピーがあった。

芽衣は四年生になったらこういうことをやるんだと、興味深げに眺めた。

——ガリウム・ヒ素半導体内部における自由電子の計算機シミュレーションの研究。

と言うのがあった。さっき、田端助教授が言っていたことだ。

(2)



## (2)

昼休みになり、兄の健一が芽衣を昼食に誘いに来た。——珍しいな、と思ったが、多分午前中に田端助教授から依頼された調査のことだろうと察しは付いた。

「おい、昼飯をおごってやる。食堂に行こうか」

「え、いいの？」

「一番美味しいものを食べていいぞ」

「うそ！」

喜んだのはつかの間で、兄の買った食券はカレーライスだった。芽衣は少し肩を落として、兄の後ろについて行った。カレーライスはうどん・そばについて二番目に安いメニューだった。別にカレーライスを批判するつもりは更々なかったが、人にもものを頼むのに、それはないだろうという思いが強かった。

兄貴が得意げに、カレーライスをのせたトレイを二つ持ってきてくれた。ちゃんと、福新漬けも付いていた。

「今日の午前中に、山本先生の所に誰か来たのか？」

「え、あ、うん」

「田端先生からの依頼で、今やっている I C チップの件で、共同研究先を調べることになったんだ」

「どうしてお兄ちゃんがするのよ？」

「助手だからな、それに、I C チップ内の自由電子の動きのモデルを計算機センターのスパコンを使って行っている学生の指導教官が俺なんだ。その責任もあるそうだ」

「どうやるの？」

「相手への訪問、聞き取り、それで駄目なら非合法だが、ハッキングなど、方法は色々だ。やり方を教えてやるからお前にも手伝って欲しいんだ」

健一はそう言って、スプーンでカレーを少しライスの上に掛けて口に運んだ。スパイスの香りが鼻をくすぐると、冷房が掛かっているとはいえ、七月の暑い空気が少し和らいだ感じになる。食欲は偉大であった。

「え、どうして、あたしなのよ」

妹に非合法と言いながらハッキングなどを頼もうという気が知れない。

「お前には人には言えない秘密が、もとい、人にはない才能がある。この分野では大きく生かせるのだ。ほれ」

健一がポケットから計算用紙を取り出して前に広げた。裏はコンピュータの出力用紙だったが、意味のない記号の羅列で埋められていた。意味がないからこそ、その裏紙が計算用紙になっているのだ。意味があったら、本来はシュレッターに掛けなければならなかったはずだ。

しかし、芽衣は、さっと視線を走らせその記号を正確にスキャンしていき、A4用紙一杯の記号を瞬時に読み取ってしまった。短時間、……五分か十分だけ記憶して一定の法則性を読み解いてしまう能力があった。

「これ、何だかわかるか？」

「プリンターの故障で、本来、文字を印刷するはずがそのコードを直に印刷してしまったもの、原文は和文で、……である。……と考えられる。の二文が多用されていることから学术论文の下書き？」

「多分な、……正解は俺も知らない。でも、ハッキングの原点はそういった地道な情報分析にあるんだ。今回、相手がしらばっくれる、あるいは、何も知らない、その時点でお前の出番だ」

「うん」

「何だ、不安か？」

「不安じゃなくて、不満。だってさ、本来あたってこんなことせずにさ、ハンバーガーショップでアルバイトして夏休み後半にどこかに遊びに行ってもいいわけだよな？」

「ふん、いっばしのことを言うようになったな、お前も」

「いけない？」

「後半に遊びに行くとして、どこに行くんだ、遊園地か？」

「まあ」

「それで、絶叫マシンとかに乗るんだろう。どうせ」

「そおねえ」

「お化け屋敷もあるしな」

「あ、それ好きかも」

「そうした、人間の恐怖好きは、日常生活からの離脱感を堪能したいという欲求から来ているんだ。こっちでこの仕事に携われば、絶叫マシンやお化け屋敷の百倍のスリルが楽しめることは保証しよう」

健一はよくしゃべる男だ。しゃべりながらも、芽衣より早く大盛りカレーライスを平らげて、スプーンに残ったルーをぺろりとなめた。芽衣はそれを見てあわててスプーンを動かした。

「それで、やる気になったか？」

兄に返答を督促されて、芽衣は水を一杯ぐりと飲んだ。

「まあ、いい、けど。でも、それで、お兄ちゃんにはどんな見返りがあるの？」

「寂しいことを言うな。すでにかわいい妹が事件に巻き込まれたんで、助け船を出してや



るだけだ」

「巻き込まれた？」

「まだ、気がついていないのか？ 奴らの話を目の前で聞いていたんだらう。今更、知らない顔は通らないぞ。それに奴らの正体も実は定かでない、違うか？」

「聞いただけで、どうして巻き込まれたことになるのよ」

芽衣はぶすっとした顔になった。

「相手がただの刑事さんなら、知りません、ああそうですか、で、終わりだ。でも、そうじゃないんだらう。怪しげなやつなら、逆に、あなた方のことは全部お見通しですと言わないと命取りになる。現段階では奴らはお前のことを知っているし、お前は奴らのことを何も知らない」

「脅かさないでよ」

「脅しじゃないさ、すでに、一人消えているんだらう。そうなると、次は？ と考えないと長生き出来ないぜ」

健一の嫌がらせのような演説を聴いて、さすがに芽衣も食欲がなくなり、カレーが四分の一ほど残っていたが、トレイを返してしまった。今、芽衣が思い返すと、教授の所に来る前に、あの小林朝男は全員の素性を調べてから来ていたのに違いない。だから、芽衣の専攻科目も知っていたのだ。ふつう、女の子に声を掛けるのにキルヒホッフの法則なんて使わない。あらゆる意味で不自然きわまりない男だと思った。

「でも、……お兄ちゃん、こういうことになるのと知っててどうして、そのかわいい妹を巻き込むようなことをしたのよ？」

「そんなこと知らない」

「え、でも」

「勘違いするな、俺が紹介したのは、研究室の事務員のアルバイトだ。ここでの研究に怪しげなものもなくはないが、取り立てて命をねらわれるようなものはない。事件を起こしたのは共同研究先の奴らで、もしかしたら、彼らも誰かに巻き込まれたのかも知れない。まあ、何にせよ、どうにかしてみせるさ」

そういう健一の顔は自信たっぷりだった。芽衣は少しだけ、ほっとした。

芽衣は健一に小銭をもらって紙パックのジュースを二個買ってきた。

「サンキュー、つりはやるよ」

「ありがとう」

健一はついてこいと言って、芽衣の先に立ち自分の研究室に向かった。芽衣は早足で歩く健一に遅れるまいと歩調を早めた。

健一の研究室は、教授たちとは別のフロアである。一階の学生大部屋と計算機センターの向かいにあった。がちゃりと鍵を開けて中に入り、パソコンを起動させた。

「さてと、わかっている情報から詰めていこう。今日会った刑事の所属はどこだ？」

「え、えーと」

「覚えていないのか？ 教授の来客名簿に入れていないのか？」

「突然だったから。ああ、そうだ。警視庁刑事局の小林さんて人で、名前が朝男さん。もう一人が捜査一課の長岡孝行さん。親孝行の孝行ね」

「刑事局？ どうしてそんなやつが動いているんだ？」

「わかんないわよ」

「まあいい」

健一はそういいながら、パソコン上のメモソフトにどんどん書き込んでいった。とりあえず、何でも整理する人だった。

「……さてよ。これ名刺か何かもらったのか？」

「うん、そうだよ。どうして？」

「親孝行はいいとして、朝男？ 何か不自然な名前だな」

「そう？ いないこともないと思うよ」

芽衣はそう答えて、あ、と、思い出した。山本教授に言われて問い合わせの電話を入れたときに、先方に小林さんが三人いて、アサオと言う名前に向こうも違和感のあるような反応を示したのだ。でも、何故かはわからないし、芽衣も疑問にも思わなかった。

「名前というのはたいていの場合、その両親がそれなりに考えて付けているものだ。変に呼びにくい名前や、字画の悪いものは何か理由がある」

「えー？ 字画なんて知らないわよ」

「本当に字画の悪い名前だけの人ならそれに越したことはないが、とっさに考えた偽名の場合、往々にしてこういうことが起こるんだ。人間心理の裏の裏だな」

「まさか、偽名で警察に就職出来るの？」

「多分、無理だ。しかし、こういうことは常に可能性で考えるんだ。次に行こう。彼らの言うICチップの不正輸出とは何のことだ？」

「よく知らないんだけど。輸出しちゃいけないものを輸出しちゃったらしいの。その上、大日本エレクトロニクスの技術者が一人行方不明になっているって」

「これが、本当なら、確かに外国為替管理法違反になるが、こっちは関係ないぞ」

「教授は別件捜査だとクレームを入れてました」

「当たり前だ。よし、向こうの責任者にも事情を確かめよう」

健一は机の本立てに置いてあるファイルに手を伸ばして、学生の卒業研究一覧表をめぐり、共同研究に関係している学生を内線電話で呼び出した。

四年生の倉島佳代がすぐに飛んできた。

「先生、お呼びでしょうか？」

「君だけ？」

「すみません。東海林《しょうじ》さんたちはお留守です」

「大学院生は全員かい？」

健一はため息をこぼしながら聞いた。指導学生は大学院にもいるのだが、夏休みが長いのをいいことに適当にさぼっているようだった。昼間に指導教官に捕まるのは素直に勉強している四年生だけのようだ。が、そんなことは健一もそうだったから、別に本気で怒っているわけでもないと思った。

「まあいい。企業との共同研究の件だが、テーマは自由電子のシミュレーションだったな？」

「はい、依頼分はすでに終わっているようで、別の条件でプログラムを走らせる準備をしています」

「プログラムは誰が書いたんだい？」

「東海林さんがメインで、グラフィックスが濱中さんです」

「いつものコンビだな。企業からの論理回路図を工学部で電子回路図に置き換えて、こちらでそのパターン通りに電子を飛ばしているんだ」

健一は芽衣にもわかるような言い方をした。

「それで、何か問題でもあるのでしょうか？」

「企業側に何かあるそうさ。開発の担当者を知っているか？」

「いえ、こちらとは、担当部長さんとだけしか接点がありませんから」

「おいおい、知らずにやっているのか。向こうからもらった図面のサインを看一看」

健一がぼんぼん言うと、倉島は少しうつむいた。

「端末から図面を見られるんじゃないですか？」と芽衣が助け船を出した。

「はい」

倉島は健一の端末から研究室の共通フォルダーを開き、研究用に大日本エレクトロニクスからもらっている論理回路図を出した。

「ふうむ」

「お兄ちゃんわかるの？」

健一の真剣なまなざしに芽衣は思わず声に出した。

「中身？ ナンセンスなことを聞くな。サインをチェックしているんだ。最終責任者は担当部長の武田信和氏だが、その下には、山口登志男氏のサインだ。その横にイニシャルだけ入ったのがある。これが、最初に書いた人だが、製図会社の人だから製品には関係していない。武田氏に会ってこの件につき確かめる」

「それが、大日本エレクトロニクスと直接つながっているのは田端先生と、工学部の中山教授だけです」

「そう、……では、田端先生に聞いてみるか。ちょっと行ってくるから、その図面を全部プリントアウトして持ってきてくれ。大至急だ」

「あの、A3がプリンターの最大なのですが、それより大きなものはどうしましょう？」

「縮小印刷でいいよ。サインが見えればいいから」

「わかりました」

健一はドアから出て行き、後に残された芽衣と倉島で、図面データのプリント作業を始めた。芽衣が倉島佳代を観察していると、向こうもじろりそこちを見て視線があっ  
てしまった。

「倉島さん、夏休みはどこかに行かないんですか？」

「卒業研究に夏休みなんてないわ」

少し目が怒っていた。指導教官から厳しいことを言われるし、大学院生は遊んでいる  
しで、余り機嫌はよくないようだった。

半分プリントした段階で、倉島がクリップで綴じて健一の後を追って田端助教授の部  
屋に持って行った。その間、残りのデータを芽衣がプリントしていた。すぐに倉島は戻っ  
てきたが、涙目になっていた。もっと厳しいことを言われたのかなど、芽衣は思った。

「このデータ、新しい順番から並べて綴じろって怒られちゃった」

「え？　じゃあ、出来たものから持って行こうって言ったのは、あたしですから、あた  
しが怒られに行きます」

「つまらないこと言わないで！　目的に沿わない仕事をするなっていつも言われ付けて  
いるのに聞いていなかったわたしが悪いのよ」

——そうか、誰がどの図面にサインをしているかだけを知りたかったんだ。

最後の一枚をプリントして、芽衣は、次は自分が持って行くと言ったが、倉島は許さ  
なかった。きっと、一年生のアルバイトの女の子に押しつけて逃げたと思われるのが嫌  
だったのだろう。気持ちはわかるが、芽衣とてただの一年生ではなく事務員なのだから、  
彼女に押しつけていいものとも思えない。

でも、倉島は一人で図面を持って行ってしまった。

いつまで経っても戻ってこないの、心配になり二階にある田端助教授の部屋に行き、  
入ろうかなど、迷っていると、中から大きな声がしてきたので、思わずドアに掛けかけ  
た手を引っ込めた。

学生の指導に問題があるという田端助教授の声と、研究の体制が無責任体質になっ  
ているという健一の声が交互に飛び交い、その横で、倉島の泣いている声が聞こえた。

——かーわいそ。と思ったが、一度、身代わりを申し出たのだから、あまり芽衣に罪  
悪感はなかった。

午後三時になり、芽衣は腕時計を何度も見た。アルバイトは九時から三時までだった  
から、もう帰っていいのかなど、不埒なことを考えていた。

(3)



(3)

——まあいいっか。

芽衣は何食わぬ顔で、山本教授の部屋に戻った。

「おや、君、話はすんだのかい？」

「いえ、いま、田端先生と黒澤先生が議論なさっておいでです」

「そう、あの二人の話は長いから、君はもう帰っていいよ」

「え、いいんですか。というより、そんなに長いんですか？」

「うん、滅多に研究室に顔を出さない割に、たまに朝まで議論しているときもある。そっ  
としておきなさい、貴重な時間なんだから」

——心配して損した。

芽衣は流し台と、机の上だけ整理して、ロッカーから自分のバッグを取り出して肩に掛けた。

「お先に失礼します」

「ご苦労さん」

挨拶して、芽衣は部屋を出て見つからないように反対側の階段から一階に下りた。

外は暑かった。七月下旬の午後三時半はもっとも厳しい時間帯だ。にもかかわらず、体育会系の学生が構内で練習をしていた。遠くから、吹奏楽部らしき管楽器の音色も聞こえてくる。サークル活動真っ盛りといった感じだ。去年までは高校のプールで泳いでいた芽衣だったが、それ以降運動をしなくなったので、この暑さの中でスポーツするなど想像を絶することだった。

芽衣はラグビー部の一年生が基礎トレーニングで汗びっしょりになりながら、中庭でスクラムを組んでいるのを見かけた。日焼けした首筋や腕から汗がしたたり落ち、見るからに暑苦しいが、そう思う中で少しだけ、そういうことに惹かれる気持ちがわき起こってきた。

ぴっと笛が鳴り、——スクラムが崩れて全員がランニング姿勢を取ったとき、胸がきゅんとなった。

——いかんいかん、何を考えているんだ。あたしゃ。

自分でも思わず乙女チックになってしまっていたことに気づき、自分も汗だくにならないうちに、ハンカチで額を抑えながらその場を立ち去った。

駅に着いたときにはもう汗びしょりになっていた。

改札を通るのに定期券を取り出そうとしてバッグの中を左手で探ったとき、プルルツと着信音がした。そのまま取り出して歩きながら出してみると麻衣子からだった。

——今いいかしら？

どうやら何度も芽衣に電話をくれたらしかったが、バッグごとロッカーに入れていたためにわからなかったようだった。彼女も芽衣が事務員のアルバイトをしていることは知っていたので問題はなかったが、向こうも外から掛けているようでいろんな音が入ってきて聞きづらかった。芽衣はホームに向かっていたが一旦向きを変えて、通路の広くなっている箇所では立ち止まった。

「それで何か御用かね？」

「芽衣ちゃん、今晚、ご飯を食べに来てくれない？」

「ご飯って、お米ばかりじゃ食べられないよ」

「馬鹿ね、……」

麻衣子は、マンションに実家から届いた野菜が大量に余っているので、何とか料理して処分したいと言った。結局、彼女に出来そうなアルバイトが見つからないので、三十日に帰省して夏休み一杯を田舎で過ごすことにし、それで、先日届いたキャベツや椎茸などの食材を食べてしまいたいということだった。

「野菜ばかりじゃない。野菜炒めにするの」

「そおねえ、芽衣ちゃんは食べる？」

「うえ、やっぱり焼き肉にしない？」

「肉は？」

「ふむむ」

月末になればアルバイト代が入ってこないし、今月はほとんどテストで休んでいたの財布が寂しいのだ。

「麻衣子は今どこにいるの」

「スーパーよ」

「じゃあ、そっちに行くよ。一緒に考えよ」

「ありがとー」

携帯電話を切って芽衣は、彼女が住んでいる新宿方面を目指した。

これまで、何度か遊びに行っており道順は知っているのだが、風俗店が集まっていることで有名な通りがマンションから二本ほど通りを隔てて存在し、間違えると、そこに紛れ込んでしまいそうで、芽衣はいつも緊張しながら歩いていた。マンション自体は結構高いそうなのだが、彼女の父親が不動産業者でありながら、なぜ、娘をこんな所に住まわせているのか疑問でもあったのだが、余計なことは言わないでいた。

新宿駅から徒歩八分の位置にマンションがあり、一番近くのエス・マートというスーパーに彼女の姿があった。いつもの行きつけの店だ。

「おまたせ」



と、芽衣は麻衣子の背中をたたいた。

「遅いわね、何か考えてくれた？」

「えっとね、野菜餃子に、広島風お好み焼き、野菜ラーメンってどうよ」

「うえ、お腹が膨れるのばっかじゃん。まあいいか。買うのは餃子の皮に、玉子、麺ね」

「うん、うん、ビールは？」

「芽衣ちゃん、未成年じゃないの」

「麻衣子も堅いんだね」

「だって、未成年ですもの」

と、彼女は答えた。まだ、十代ということにこだわりがあるらしかった。芽衣は彼女の気持ちだけ尊重しておいた。

買い物かごを持ってレジに並んだ。代金は麻衣子が払い、荷物を芽衣が持った。麻衣子の持ってきていた布製買い物袋だ。パンのシールを集めてもらったようなバッグだったが、昔の使い道のないものと異なり、かわいらしいデザインで材料も丈夫そうだった。

彼女の部屋はいつも片付いている。更に帰省の用意もしているようで、大きなカバンも置いてあった。麻衣子は買ってきたものの袋を開けて用意すると、床の上の段ボールを開けた。野菜が、……半月分はあるだろうか、置いてあった。

キャベツと椎茸、にんじんと冷蔵庫にあったミンチを麻衣子が刻んで油で炒めて、それを芽衣が餃子の皮で包んだ。後から焼くのだ。余ったキャベツはホットプレートの上で芽衣がお好み焼きにしていっていった。

熱くなった鉄板の上に溶いた小麦粉を落として薄くのぼしていく。その上にキャベツを盛り上げて焼いて最後は玉子でとじる。不器用な芽衣だったが、これだけは得意料理だった。本来は焼きそばが間に入るのだが、今日は野菜ラーメンもあるので、これは省略した。

こうして七時までにはおおかた出来上がり、ジュースで乾杯してお箸を付けた。

「麻衣子の輝かしい夏休みに乾杯！」と、芽衣は嫌みな挨拶をした。

「輝かしくなんてないよ。落ち武者状態なの」

「もう、そんなこと言って」

野菜だけの餃子だったが、結構美味しいと思った。話も弾み、思わずビールが欲しくなるくらいに盛り上がった。

「でも、芽衣子ちゃん、夏休みは本当に事務員さんに徹するの？」

「子につけないで。まあ、他に行くところもないし、予算もないしー」

「ふうん、あ、せっかくだから昼間は教習所へも行こうかな」

「お父さんが許してくれないんじゃない？」

「あれ、芽衣ちゃんもなの」

「春休みに原付を取ろうとして駄目だったの。うちの親って古いのよ」

「そっか、うちも同じかも知れない」

「それで、何日にこっちをたつの？」

「三十日の午前十時、羽田発宮崎行きに乗るの」

「うげげ、飛行機で帰るの、リッチねえ」

「だって、新幹線だと博多から在来線に乗り換えないといけないもの」

「ふうん」

お好み焼きにソースをたっぷり掛けて食べた後、お腹が一杯になり寝ころんでDVDで映画を見ているとあっという間に九時になった。いい加減に帰らないと母親に怒られると思い、芽衣は起き上がった。

(4)



(4)

彼女の部屋を出るとき、遅いから、近道せずに明るい道を通りなさいと忠告を受けたものの、駅への最短距離と思い、住宅地をショートカットして歩き、いつもとは一本西寄りの道に入り込んだ。

淫靡な感じのホテルが軒を連ね、時折、中年男性と女の子のカップルが歩いている。

——前に来たとき、こんな場所あったかな？

確かに、見覚えのない場所だった。完全に道に迷っていた。人に聞いた方が早いと思ったが、すでにその雰囲気ではなかった。

いかがわしい男女と目を合わさないように下を向いて歩いていると、ビルの陰に、ひょろっとした軽薄そうな男が立っていた。彼は芽衣の姿を認めると、軽い足取りで近づいてきた。いかにも場慣れしている感じがし、芽衣は一瞬身構えた。

「お姉さんは一人かな？」

男はやや高い目の声で話しかけてきた。三十代半ばくらいと思った。芽衣は無視して早足で通り過ぎようとした。

「ねえ、君、高校生なの、それとも、短大生？」

「違いますっ」

芽衣が振り切ろうとしても、男はなおも食い下がり、つい、歩調をゆるめてしまった。

「ね、僕、暇なんだ、これから飲みに行かない？ カラオケでもいいよ」

「いや、いいです」

「いいの？ よかった」

男は拒否の意思表示をしたのを逆手にとって大げさに喜ぶふりをした。その割に、その目は全然嬉しそうではなかったし、唇にはわずかにゆがみが出ていた。

「やめてください。急いでますので」

「いいじゃない、本当は相手を探してたんでしょ、ね」

本当にしつこかった。芽衣の声も段々と荒くなってきていた。

「あたしはそういうのじゃないんです。構わないで下さい」

「そういうの？ みんなそう言うんだよ。ね、五千円あげるからついてきなよ」

完全に馬鹿にしていると思った。

「はあ、五千円？」

「じゃあ、円じゃなくてドルだったら？ 五千ドル」

「え？ 本当に」

と、馬鹿な応答をしてしまった。

「お、乗ってきたね、五千ドルのお姉さんなんだ。いいよ出しても」

男はそんなことを言った。芽衣は男のペースに乗せられていると、感じていたが、反転してこの場を離脱することが出来なかった。走って逃げるにしても革のローファーを履いていて全速を出すことは出来ないし、それを差し引いても、男性を振り切ってまで逃げおおせる体力はなかった。相手を言い負かすしか手はない、そう判断したのだが、少し甘かったと悟った。

でも五千ドルと言えば、今日の相場で約六十万円だ。本当なら、新しいパソコンを買ってもおつりが出るし、夏休み中アルバイトしなくてすむと、漠然としたことを考えた。

芽衣がもたもたしている、男はジャケットの内ポケットから財布を出そうとした。

「あ、やめて下さい」と、芽衣は男の腕を押さえて制止した。

男はそれに構わず、黒い革の財布を取り出し、内側のカードホルダーを出し始めた。

「こういうものです、ちょっと、来て下さい」

男のカードホルダーの中には、警察の身分証が挟んであった。芽衣は意味がわからなかった。

「あの、あなたは警官なんですか？」

「そうですよ」

「警官が勤務中に女の子をナンパしてていいんですか？」

「ええ、潜入捜査員なんですよ。君は捕まったのは初めてかい」

「じょ、冗談じゃないです。あたしが何をしたって言うんですか？」

「それは、中で聞きましょう。ついてきて下さい」

男はそのまま芽衣の腕をつかんで、つかつかと通りを歩いた。芽衣は恥ずかしくなり下を向いておとなしく従った。

芽衣が連れ込まれた先は、ホテルではなく交番だった。若い制服巡査がいる中を、顔を真っ赤にしなが、奥の取調室のような所に連れて行かれた。

机が一個あるだけの小さな部屋だった。芽衣はその前に座らされ、さっきのひょろっとした刑事が前に座った。芽衣は恨みのこもった目で彼を見つめたが、男は悪びれもせず、用件を述べた。

「ここに連れてこられた理由は、わかってるよね？」

「いいえ」

「困ったね、君は売春防止法違反の現行犯で逮捕されたんだ。第五条勧誘の禁止ね。値段の交渉はまずかったね」

男は事務的に淡々と語った。

「ふざけないで下さい。あなたが勝手に言い出したんじゃないですか！」

「いやいや、五千ドルと言ったのは君の方だよ」

「そんな」

「それに、君、ここで捕まるのは、本当に初めてかい？ 本当にここで援助交際と称して売春をしている若い女の子は多いんだ。よそで捕まったりとかないの？」

「ないです」

「君の年は？」

完全に犯罪者扱いされて、芽衣はキレてしまいとうとう黙秘権の行使に出た。

「何だよ、優しくしていれば黙るかよ。……名前と住所は黙秘できないよ」

芽衣是最悪の夜だと思った。よりもよって援助交際の取り締まりに当たっていた機嫌の悪い、意地悪な警官に引っかかってしまったのだ。誰かに助けてもらいたかったが、売春防止法違反など、誰にもいえない容疑だった。その事実もないから余計にへそを曲げているのだ。

小一時間ばかり、芽衣がねちねちと説教されても、黙秘を続けていると、信じられないことに、男は芽衣のバッグの中を無断で調べ始めた。

「ちょっと、やめて下さい。警察がそんなことしていいんですか？」

「つべこべ言うな。お前が黙っているからだ。……ほら、これ学生証じゃないか。東都大学なのか？」

男は意外なものを発見したとばかりに驚いた。

「そんなこと、関係ないでしょう！」

「ほう、黒澤芽衣、平成五年五月八日生まれ、東京都墨田区、ほほう、……そう、君、東都大生だったんだね」

男はさも、芽衣の弱みを握ったかのようにほくそ笑んだ。

「しかも、未成年じゃないか。ご両親に連絡しなくてはな、番号は？」

「お願いします、もうやめて下さい」

芽衣はとうとう泣き出した、それを見て男は嬉しそうに笑った。

「ふふん、じゃあ、一筆書いたら許してやってもいいぞ」

「一筆？」

男は自分で書いた供述調書を反省文だと言って、芽衣の前に置き、署名と拇印を押すよう強要した。芽衣はもう逆らえないと思った。

「サインしたら、本当に家に帰したもらえるんですか？」

「ああ、その通りだとも」

芽衣は腕時計を見た。十一時を回っていて怒られるだろうが、まだ帰れると思った。でも、文面を見ると、芽衣が売春を持ちかけて検挙され、心から反省をしていると書いてあった。警官としてはそんなもの一枚取るだけでいいのかも知れなかったが、一女性としては絶対に許せないと思った。

「でも、こんなこと、あたし言ってないです」

「じゃあ、きっちり話をつけてもいいんだよ。これから新宿署の留置場に移送してきっちり取り調べて、それから、送検して今度は東京拘置所だ。それから裁判して、無罪になっても出られるのは三ヶ月くらい先かなあ？」

完全に脅迫だった。だが、今なら目の前の書類に名前を書くだけで解放してもらえる。そんな誘惑が頭をもたげた。

芽衣があきらめてサインをすると、男は喜んだ顔で、——ちょっと待っていなさいと、部屋を出て行き、しばらく一人にされてしまった。ドアには鍵が掛かっている、窓には格子がはまっていた。呆然と天井を見上げながら、どうしてこんなことになったのだろうと、反省とも、不運を嘆く気持ちとも取れぬ感情にとらわれた。

十五分しても、三十分しても男は戻ってこなかった。

段々と、芽衣はあの書類にサインしてしまったことを反省し始めた。あんなものにサインしたら本当に売春しましたと認めてしまったことになる。たとえ留置場に放り込まれても断固拒否すべきだったのではないかと後悔した。

——でも、もう遅い。そう思うとまたうつむいて涙が出てきた。

しばらくして、背広姿の別の刑事が入ってきた。

「聞き覚えのある声がすると思ったら君だったのかい、こんなことをする子だとは、思えなかったのだが」

芽衣が顔を上げると、小林がいた。

「え？」

顔見知りになんか姿を見られるなど、最悪の事態に陥ったと思った。

「この調書に書いてあることは事実かな？」

「違います」

「そう、潜入捜査員に売春を持ちかけてそのまま逮捕、後で、補導に切り替え、どこまでが事実なの」

「全部嘘です。声を掛けてきたのも向こうからだし、あたしに有無を言わずに腕をつかんで引っ張ってこられたんです。信じてください」

「そう。まあ、君のことだから反抗できなかったのかな？」

小林にそんな優しい言葉を掛けられ、芽衣はうなずいた。

「ただねえ、この供述調書の威力は大きいんだ。ふつうの証拠は検察が提出したものに弁護側が反証して裁判官が採用するかどうか決めるんだが、これは、本人がしゃべって判子をつくものだから、そのまま証拠として通用する。証拠の王様と言われる所以なんだ」

小林は困った顔をして芽衣の瞳を見つめた。やっかいなことに巻き込まれてくれたなど、言わんばかりであった。

「あの、あたしはこれから、帰れると聞いているんですけど」

芽衣はおそるおそる聞いてみた。

「ああ、これをファイルしたら終わりだ。でも、この記録はずっと残っちゃうよ。東都大生で将来がある身なのに、何だかねえ」

「え、そんなこと聞いていません」



「だって、供述証拠じゃない。君も嚴重注意とはいえ検挙されて、それを認めたんだから。少し輕率だったねえ。それに、これはあり得ないことだが、万が一、大学にこのことが漏れると、停学か退学処分になっちゃった例もあるんじゃないかな」

小林の方が恐喝の度合いは大きかった。芽衣は真っ赤な顔をしていたのが真っ青になった。

「あの、事実じゃないのに信じてもらえないのですか？」

「実際に君が売春したかどうかではなくて、証拠があるよ、ってレベルの話なんだ。これが、唯一の証拠なんだけど」

小林はそう言ってさっきの調書をひらひらと手でかざした。芽衣は段々と腹が立ってきた。

「それ、五千円でなかったことにして頂けませんか？」

「五千円？ 大人をなめてはいかんよ」

——五千円に引っかけたあたしが馬鹿だった。

「でも、僕たちの任務を手伝ってくれるなら、考えてもいいよ」

「手伝います」

芽衣は即答した。

「では、君の上司である山本教授がこれから大日本エレクトロニクスのIC技術者の行方を調査するのだが、その情報をこちらに流して欲しいんだ。君が最適だと思っている」

「そんなこと、警察の方が詳しいんじゃないですか？」

「君の名誉のために提案しているんだよ。嫌なら、さっきの刑事を呼び戻して、正規の手続きをするだけだ」

小林は冷たく言い放ったので芽衣は少し慌てた。もちろん、慌てたことを顔に出すほど子供ではなかったが、言いがかりや別件逮捕であることを、また、さっきの刑事に主張できそうには思えなかったのだ。芽衣がどんなに頑張っても、まるで、犯罪者を取り扱うかのようなようだった。彼と話をするだけで、芽衣の人間としての尊厳を傷つけられてしまう気がした。

「あの、教授の調査情報を小林さんにこっそり流すだけでいいんですか？」

「ああ、そうだよ。その気になったかい」

「さっきの調書や、ここに連れてこられた記録なんかを消してもらえるんですか？」

「任務が終わったらね」

芽衣は上目遣いに小林をにらんだ。が、もう十二時前だった。これ以上すったもんだしても、帰れる保証はないし、と、弱気になったところを小林にたたみ込まれた。

「君は今、重要なポジションにいるんだ。大日本エレクトロニクスのセキュリティーは厳しいし、外部から監査できるのは山本先生だけだ。その山本先生の腹心の部下である黒澤先生の身内ならファイルを覗くことが可能だろう。それを、わたしに定期的に知らせるだけでいいんだ。終わったら、この調書もシュレッダー行きだ。どう？」

芽衣はこくっと頭を下げた。取引成立だ。

芽衣は夜の新宿を放心状態で駅まで歩いて、電車に乗り込んだ。取りあえず、解放してもらったものの、調書と逮捕記録を小林に証拠に取られたままだし、精神的に強姦された様な気分だった。

おまけに家に着いたのが午前一時前になって、待ち受けていた両親に小一時間、お小言を言われてしまった。もちろん、警察のご厄介になったとはいえない。

## 2. マテリアル



## 2. マテリアル



(1)





## (1)

翌日、芽衣はジーンズとシャツにスニーカーという格好で、出勤した。昨日の経験ですっかり意気消沈していたが、あんなことになったら、今度こそ走って逃げようと考えたのだ。もっとも、学生や大学院生は皆ラフな格好なので、そんなに目立つものでもなかった。

夏休みがはじまり、教授は少しゆっくり気味の出勤になり、芽衣は早めの出勤になった。流し台の上のポットにお湯を入れた後、机の上をぞうきんがけしていると教授が入ってきた。

「おはようございます」

「おはよう。おや、顔色が悪いねえ、何かあったの？」

今まで女の子の顔色など、気にしたこともない山本教授にそんなことを指摘され、芽衣は動揺した。

「え、いや、別に何でもありません」

「それに、昨日までスカートだったのに、君までジーパンかい？」

「え、いや、趣味が変わったんです」

「そう、……うちの女房も階段で膝を打って青たんを作ったとか言ってたまにズボンにしているよ。あはは」

教授の奥さんと一緒にされて少し自尊心が傷ついたが、昨日のことは誰にもいえない秘密だった。芽衣は目をそらして作業を続けた。

「そうだ、今日の午後到大日本エレクトロニクスの部長が見えるそうだ。田端君と黒澤君の予定を空けておいてくれ」

「かしこまりました」

芽衣は内線電話で二人に連絡し、そして、教授の端末から来客情報メモに記入した。同じフォルダーを眺めていると、大日本エレクトロニクスの武田信和氏は、三年くらい前から頻繁に研究打ち合わせとして行き来していることがわかった。

十時頃、学生の倉島佳代が教授の所に、今日の会合用の参考資料を持ってきた。芽衣が預かろうとすると、冷たくその手を払われた。キツとした目で芽衣をにらむその眼光に昨日の意地悪な刑事を思い出してしまい、芽衣にも不愉快さが伝染した。

「何よ」と倉島はからんできた。

「別に」

「それに何よ、上級生に向かってその態度は、いくら黒澤先生の妹だからって調子に乗ってるんじゃないの？」

と、倉島は昨日よりいっそう、芽衣に厳しかった。多分、昨日、田端と健一の二人に責められ続けて泣き出し、泣いても駄目だ、と、また怒られ、その間に、芽衣だけうまく脱出したことを根に持っていた様に思えた。

まさか、彼女が男を雇って、あの刑事に芽衣を罠に掛けるよう頼んだのではないか、という妄想を抱くに十分なくらいの、態度の悪さだった。

山本教授が資料を受け取ると、中身をばらばらと確認し、内容につき倉島に二、三、質問を浴びせ、答えられないと、黒澤君に聞いてきなさいと追い返され、彼女の不満に火を付けるのを手伝うみたいだった。

芽衣はいい加減この女の相手をするのが苦痛になってきた。

昼休みは一人で学食に行った。麻衣子も帰省の準備をしている頃だし、しばらくひとりぼっちになると思うと食欲も湧かなかった。食べられると思って選んだ、トンカツ定食だったが、半分残してお箸の先でつつき回していた。

考え事にふけていると、不意に、ぽんと肩をたたかれた。

驚いて振り向くと兄貴だった。

「ひゃっ、おどかさないでよ。もう」

「どうして驚くんだよ、そんな刑事を見るような目で」

「嫌なこと言わないで！」

「怒るなよ、つまらない冗談に。何か悩み事でもあるのか？」

「別に、ないけど」

本当は、兄に相談したかったのだが、昨日の一件だけは誰にも言えないことだった。

「けど？」

兄貴は更に促してくれた。

「あ、そうだ。女の子をいじめるのはよくないよ」

「別にお前のことなど、誰もいじめてはいないぞ」

「あやしじゃないよ。研究室の倉島さんのこと」

「ああ、あいつか」

「あいつって、まさか、みんなしていじめているの？」

「まさか、ここは大学の研究室だぜ。能力のあるやつは誉められるし、ないやつはけなされる。それだけのことだ」

「もう、もっと優しくしてあげてよ」

「何で俺に言うんだ。他の教官に言えよ。大体、卒業研究のない学科を選べば最初から楽勝だったんだ。まったく」

「だから、八つ当たりされるこっちの身にもなってよ」

「ほう、あいつが八つ当たりするのか？ 面白い、研究が進むようにお前が誘導してやれ。ところで、お前は今日何を食べたんだ。うまそうだな」

「もう、ここに美味しいものなんてあったらノーベル賞ものよ」

「食べ物ではノーベル賞は出ない。残念だったな」

そう言って、兄貴は食券売り場の方に歩いていってしまった。相変わらず口の悪い男であったが、根は悪い人ではない。芽衣がしょんぼりしているのを見かけてさりげなく声を掛けてくれたのだと感づいてはいた。

芽衣が食事を終えて、トイレでリップだけ直して教授の部屋に入って秘書のような顔で、しばらく準備していると、大日本エレクトロニクス部長の武田信和氏が時間より少し早めに来訪してきた。

芽衣はあいさつして、武田氏をソファに案内して、紅茶を出した。

見かけは無口そうな人には見えなかったが、今日見る限り、無口でふさぎ込んでいるという感じがぬぐえなかった。あらかじめ、健一から事件のあらましを聞いているせいかもしれない。

一時になって、山本教授が食事と午後の散策から戻り、武田氏の姿に気づき、挨拶した。田端と健一はなかなか来なかったが、内線電話で呼び出そうとしたら丁度やってきた。後ろについてきている倉島佳代が涙目だったのと、コピーしたての資料を抱えていることから、最後の最後まで怒られながら資料整理をしていたと思われた。芽衣は彼女の姿を眺めていると最後にじろりとにらまれたので、ぎよっとなって、目をそらせた。

「このたびは色々ご迷惑を掛けております」

武田氏はそう挨拶で始めた。

「そんなことはいいんですがね、研究の外部への漏洩となると、すこし我々としても問題にしなければなりません」

田端助教授がまくしたてた。

「いえ、警察の捜索の件ですが、われわれにも心当たりがないのです」

「どういうこと？」

と山本教授がげげんそうに聞いた。

「はい、わたくしどもの開発チームは二十名の正社員技術者と十五名の外注メンバー、それとわたしで構成されています。行方不明になったことなどないし、ましてや海外への技術移転など、そのような事実はありません」

「武田さんの知らないところで事態が動いているということは考えられませんか？」

「わたしの？」

「ええ、たとえば取締役が部長の頭越しに商談を進めているケースもまれにはあるようですよ」

「馬鹿な、量産品ならとにかく、開発品でこのチームをわたしに知られずに動かすなど不可能ですよ」

三人が話している横で、健一は大日本エレクトロニクスからもらっている図面を一通り、チェックしていたが、気になることがあったようで、口を出した。

「あの、この図面なのですが、三年前にPAC 4用のCPUの回路図を手がけていますね」

「ええ、あのときも共同開発でした」

「今回のPAC・NEOシステム用とで、人員構成が変わっていますか？」

「それは、そうですよ。こちらは民間企業ですから、三年もたつと正規社員で五名程度、外注メンバーでは七、八名程度が入れ替わります。定年退職と新規採用によるもの。それから、転勤、転属によるものです。でも、PACシステムのチームとしてはわざわざ入れ替えることはしていません。やはり、機密保持の必要がありますので」

武田氏は当然のこのように答えた。確かにその通りだったのだが、教授は何を言い出すのかわからないような顔をした。

「たとえば、……この論理回路図で製図以外に三人の方がサインしておられますが、武田さん以外のサインは皆異なっていますよね？」

「ええ、責任者はわたし一人ですずっとやっていますが、CPUの設計は演算回路とキャッシュメモリなどで分担が違いますし、過去に何度か人事異動で変わったことがあります」

健一はそれを聞いて、図面を前にして座っている倉島に変わった点はないか聞いた。が、数千枚にも及ぶ図面を目の前にして、彼女はうろたえた。

「あの？」

「何だ？」

「これ全部ですか？」

「だから、昨日選別したときにチェックしなかったのか？」

健一は少しきつめの言い方をし、田端助教授も、——役に立たないねえ、という目で彼女をにらんだ。たちまち、倉島の目に涙が浮かんできた。

「おい、君、ざっと、見てくれ」

この仕事は芽衣に回ってきた。また、倉島に恥をかかせたと恨まれそうな気がして躊躇したが、兄貴に怒られるのはもっと怖かった。仕方なしに、図面をばららっとめくり、目を細めて図面ナンバーとサインをスキャンした。

「サインはどの欄も変更されていますが、下に行くほど頻度は高いです。でも、何度か並べてサインしたり交互にサインしたりしてから次の人に引き継ぐという法則性があります。ただし、過去一度だけ、三年前ですが、林崎技師から山口技師に突然変更になっていますね」

「ほう」

健一はそう言って、武田氏に向きなあった。

「え、ああ、そう言えば、林崎は急に転勤になり担当が山口に変わったんです。何かあつ

たかな」

彼は頭をかきながらそう言った。

「基本的に御社内部の問題ですので、別に構いませんが、この真ん中の欄というのは実質的な担当者ではないですか？」

「ええ、そうです」

「彼らが急に変更になるのは何か差し迫った事情でもあったのですか？」

と、芽衣は武田氏を追い詰めた。

「確かに、……ああ、生産ラインで人手が足りなくなり、応急処置的な異動だったんですよ。それがそのままになった。よくあることです」

何となく武田氏がしらを切っている様な気がしてきた。芽衣はこれ以上大人の相手は出来ないと健一に目で合図した。

「まあ、いいでしょう。今回の警察の捜索が全くの見当違いということだけでもよしとしましょう。僕から苦情を入れておくよ」

山本教授は、少し安心したような表情で話を終えてしまった。

「山本先生、この話題とは違うのですが、別の問題がありまして少しお知恵を拝借したいのです」

「別の問題ねえ」

「実は I C 製造ラインに入れるシリコンウェハーなんですけど、子会社から納期遅れを通知されているんです。彼らが仕事をさぼっているわけではなく、今年になり原材料の一つであるイットリウムとタンタルが入らなくなってしまったと泣きつかれています。そこで、……」

「おいおい、うちは、物理学科だよ。資材調達など守備範囲外だよ」

「いえ、山本先生は顔が広いじゃないですか。経産省あたりからどこか紹介していただけないでしょうか？」

「シリコンウェハー、今回はガリウム・ヒ素ウェハーだが、これのメーカーかい？」

山本教授は少しあきれた顔になった。最近、あらゆる金属価格が高騰し市場からも消えてしまっているのだ。こうした事態も以前から予想されていて、山本教授から後藤審議官にも話はしているのだが誰も対策を打たない状況を嘆いたところだったのだ。

「この開発そのものは、社内備蓄材料を使ってウェハーを作らせたのですが、実際の P A C ・ N E O システムのボードに乗せるだけの I C チップを作るには量産ラインに乗せ、それに必要なウェハーを供給する必要があります。もし、調達できないと、これらに変わる元素を混入したものを代替させる必要があるのです」

「そんなことしたら、開発自体がやり直しじゃないか」

「そうならないために、お願いします」

ふむ、と山本教授は腕を組んで考える振りをしていた。芽衣もこの話にどこか違和感

を感じていた。つい最近まで、この研究室にシリコンウェハーを山ほど持ち込んで工学部でICチップに加工して性能試験をしていたのだ。急に材料がないなんておかしいと思ったし、それに、新たに調達先を探すなど、大学ではなくメーカーである大日本エレクトロニクスから探した方が確実と思えた。

教授もそのように考えたようで、武田氏にそう告げた。

「おっしゃるとおりです。実は、当社の資材調達部がどこかにマークされていて、我々が材料を競り落とすのを故意に妨害されているように思うのです」

「心当たりは？」

「このシステムのことを妨害しようとしている国際組織しか思いつきません」

「ライバルメーカーじゃないの？」

「ライバル？」

「国内では一社指名かもしれないが、海外の対空ミサイルメーカーなどそのままライバルだしな。まあ、外務省の筋から調べてもらおう。国内は北九州金属工業なんかとはもう話をしたかい？」

「いえ、取引実績がないので接触はしていません」

「じゃあ、経産省の局長から紹介してもらおう。来週にでもそちらに連絡が行くよ」

「ありがとうございます」

武田氏は頭を下げて、これまでとは打って変わった態度だった。元々、こっちの話題で相談したかったのに違いない。

会談が終わった後、健一が芽衣をお茶に誘ってくれた。芽衣が学食は飽きたと言ったら、大学前にいっぱいある喫茶店の一つに連れて行ってくれた。芽衣はカレーがいいかな、ミックスサンド大盛りにしようかなと楽しみにしていた。

健一はウェイトレスが来ると、ミックスサンド大盛り一つと、アイスコーヒー二つを注文した。

「ごちです」

芽衣がおどけて兄貴に甘えた。

「いいよ、これから少し働いてもらわなければならない。技師のサインの話で武田氏は少し言葉を濁しただろう。それからお前の出番だとは言っておいたはずだ」

「ひえー、それから、倉島さんのことが少し怖いんだけど」

「役に立たないやつほど、取り扱いが難しい。芸をしないペットみたいだな」

「そう言う意味ではなくて、あたしが目立ちすぎたから、何かされそう」

「心当たりでもあるのか？」

健一はアイスコーヒーにフレッシュを注いで、ストローでかき混ぜながら聞いた。濃いコーヒー色に出来たマーブル模様がきれいだった。

「まあ、それなりに」

芽衣も言葉を濁した。

「何だよ、女の子同士のいさかいか？ お前らしくもない」

「何よそれ。あたしのこと妹と思ってないんじゃないの？」

「弟か、あはは、それ面白い」

「もう」

芽衣は少しだけふてくされたが、ミックスサンド大盛りが運ばれてくるとすぐに機嫌は直った。パンからはみ出しそうな野菜とハムをこぼさないよう、口いっぱいにはおぼった。こんな姿は兄の前でなければ出来ない芸当だった。





(2)



## (2)

昼休みが終わる前に教授の部屋に戻ろうと早足で歩いていると、一階の階段で大学院生の東海林と出くわした。彼は博士課程二年生であり研究に忙しいはずなのだが、アルバイトに明け暮れているようにしか見えない。

「あの、こんにちは」

芽衣は一言苦情を言っておこうと彼を呼び止めた。

「やあ、芽衣ちゃんに声を掛けてもらえるなんて光栄だな」

にこりともせず、そんなお世辞を言った。もちろん芽衣は本気にしない。

「倉島さんって東海林さんの指導学生ですよね？」

「さあ、そうだったっけ？」

「ひどい。少しは面倒を見てあげて下さい。困ってますよ、きっと」

「別に俺は困らないしな」

兄貴の教育が悪いのか、ここの研究室にはこんな自己中心的なやつばかりが集まっていた。

「ICチップの共同研究があったじゃないですか。情報漏洩があったらしいですよ」

芽衣は少しお尻に火を付けてやれと思い、けしかけてみた。

「何だと？ 倉島がやったのか？」

「違いますって、大日本エレクトロニクスからみたいっす」

「ふうむ」

「心当たりでもあるんですか？」

「あそこは情報管理は厳しいんだが、人事はかなり緩いんだ。どこも一緒かも知れないが、機密情報を一杯抱え込んでいても簡単に左遷してしまうんだ」

「そうなんですか」

「まあ、どちらにせよ、うちには関係のない話だね」

東海林は簡単に割り切ってしまった。

「でも、東海林さん。大日本の内部情報にも詳しいんですか？」

「別に、でも、以前送ったデータを紛失したとか言って内緒で二度送信したことがあるんだ。三年ほど前だったかな？」

「紛失？」

「これ内緒だぞ、向こうの担当者が急に変更になって、引き継ぎ資料の置き場がわからなくなったそうだ。結局は見つかって一件落ち着いたんだけどね」

「それって、もしかして、林崎と山口という名前がからんでないっすか？」

「よく知っているね。そうだよ、でも呼び捨てはよくないね、林崎氏は担当課長で、山口氏は主任だ」

「なぜ、変わったんですか？」  
「それは民間会社だからねえ」  
「もう、何かご存じなんでしょ？」

東海林は少し目をそらした。  
「うわさ話のレベルなんだけどね」  
「うわさでいいです。聞かせてください」  
「君だから話すんだよ。誰にも内緒にしてくれるかな、いい？」  
「はい」  
「彼はセクハラで飛ばされたらしい」  
「はぁ？」

芽衣はきょとんとした目で東海林の顔を眺めた。いくらうわさにしても、現実味がなさそうに思えたのだ。最先端軍事技術を扱っている技術者が、そんなことで機密情報もろとも左遷されるなど、むしろ、そちらの被害の方が大きいような気がした。

「あの、あたし、からかわれているんですか？」  
「と、とんでもない。本当だ。あ、いや、……」

東海林は言葉を濁した。本当に、三年前に何かあったような感じだった。  
「セクハラってそんなに厳しいんですか？」  
「昔の会社なら問題にならなかったのに、と、先方は言っていた。俺もサラリーマンじゃないから詳しいことは知らない。実際にはね、大日本の設計部のコピー室はラックに囲まれて外から見えない区画になっていたそうだ」  
「コピー室？」  
「その中で部下の女子社員の体を触ったとして問題にされた」  
「その人って変態なんですか？」  
「さあ、変態と言えば変態だ。が、当時は限りなくえん罪に近いと言われていた」  
「え、じゃあ、無実の罪で左遷になったんですか？」  
「それが、わからないんだよ。密室の中だし、触ったという証拠もなければ、触らなかったという証拠もない」  
「ひどーい」  
「でも、女子社員からしたら、そんなおじさんを処分しない方が、ひどいと言うだろう。当時は丁度そういったことが問題になり始めた頃でスケープゴートになった観があるのだが、現実には林崎氏は退職を余儀なくされてたんだ」  
「その林崎さんは今どちらに？」  
「わからない。一度、休職してその後に地方に転勤になったと、……これもうわさね」

東海林の話は当時のうわさ話の域を出なかったが、その事件の後、コピー室がガラス張りになったなど、生々しいことも含まれていた。ただ、会社外部には一切秘密で、大学側にも当時出入りしていた、プログラム担当の大学院生だけしか知らないことで、教官たちにも知られないよう口止めされているという。

「ひょっとして東海林さんも、お金をもらったとか？」

「変なこと言うなよ」

「五千円？」

「ば、ばか」

「かねと女」

「セクハラ疑惑の口止めにそんなことをするやつがいるか、よく考えろ」

「やっぱりお金なんだ」

芽衣が問い詰めると、東海林はとうとう逃げ出してしまった。——まあいいか。廊下の鏡で前髪を直して、教授の部屋に戻った。

「遅かったね」

「すみません」

「いいけど、今日の夕方、後藤さんと会うから五時頃にタクシーを予約しておいてくれ」

「かしこまりました」

山本教授は、武田氏の依頼による北九州金属工業への働きかけのために動くのかなど、想像した。しかし、単なる商談なんかのために後藤審議官を通したことは過去なかった。

「山本先生？」

「何だい？」

「後藤さんとは内閣官房の後藤様ですか？」

芽衣の質問に、山本教授はふふんと鼻で笑った。

「何か感づいたかな？」

「はい、いつもと違うように思うのですが」

「そう、いつもとは違うよ。いつもと同じでいい仕事はわたしは引き受けない」

そう言って、芽衣の瞳をじっと見つめた。意見を求めている感じだった。

「えっと、レアメタルを北九州金属から買うことは、問題ないことを前提として、よそへ納入されるはずのものを横取りするわけだからその影響を最小限に食い止めるための根回しですか、あ、いや、軍事技術に使う戦略物資だからアメリカへ一報を入れるためですか」

「ふふ、その両方だよ。君は相変わらず頭が切れるねえ。お兄さんにそっくりだね」

「いやあ」

と、芽衣は頭をかいた。その切れる頭で、昨日は警視庁の小林氏にはめられている。だから今日は余り大きな顔をしなかった。

「芽衣ちゃんの言うとおりの、元々、芝崎セミコン社向けの材料をこっちに回してもらうことにしたんだ。しかし、彼らの最終納入先は米軍向けのコンピュータだった。少し問題があるので、今回は後藤君に口をきいてもらうことにしたんだ」

「はぁ、それから、情報漏洩の件なのですが、大日本エレクトロニクスの林崎という技師がセクハラ疑惑で地方の工場に左遷されていたらしいんです。うわさレベルの情報です。この直後に山口技師が図面に登場しています」

「そう、それで、武田さんも口を濁したんだね」

「もし、情報漏洩が事実と仮定すると、林崎技師がどこに行ったかわからないのと、それから、セクハラを受けた女性が容疑者として浮かんできます」

「民間会社の行方不明はその人事部でないと把握しきれない。少しやっかいだな」

この話は打ち切りになり、芽衣は書類の処理をして判子のいるものに関しては、芽衣は抱えて、田端助教授と健一の部屋に届けた。

田端と健一もこの「うわさ」について知ってはいなかった。

この問題は、大日本エレクトロニクスが必死で隠していて、しかも、本業の開発品の機密漏洩より厳しく秘匿していたのだ。技術漏洩以上に、スキャンダル漏洩はあり得なかった。芽衣もそろそろ学内での調査に見切りを付けていた。

外部に出て、林崎氏の足取りを追うことと、彼がセクハラをした派遣社員のその後の行動を知る必要があった。

(3)





### (3)

三時に事務のアルバイトを終わってから、売店でアイスでも買って帰ろうと思い、廊下を歩いていると、倉島佳代に呼び止められ、長い時間文句を言われた。もちろん芽衣の責任ではないことだ。

午前中の会議で、彼女が図面の内容に関して答えられなくて、役立たず呼ばわりされたことと、その横で笑って見ていたと思われている芽衣への恨みがあったみたいだ。しかし、実際にはそんなことは序の口で、その役立たずの彼女を脇にやり、すらすらとかつこうよく自分の意見を述べた芽衣に嫉妬を覚えている様にした。

「感じた」というのは、彼女自身はっきりとは言わず、どうでもいいようなことを根に持って、ねちねちと責めてくるから何が言いたいかわからないのと、反論のしようもなかったのだ。芽衣は返す返すもこんな女にはなりたくないと心からそう思った。

「待ちなさいよ」

立ち去ろうとする芽衣を更に倉島は呼び止めた。

「何ですか？」

「人が話しているのに、向こうを向くなんてどういう神経をしているのかしら」

芽衣はもう話は終わったと思って、神経はすでにアイスクリームに向かっていた。

「あたしの態度が悪いのは謝ってるじゃないですか」

「あら、今度は開き直るの？」

ああいえばこういう、とでも言うのだろうか、からむことに意義を見出している感じだ。芽衣は研究室の大学院生と四年生の関係ってこんなにややこしいのだろうか、ふと、疑問に思った。こんなことが日常茶飯事なら、研究など進まないに違いない。

「別に開き直ってなんかいません。倉島さんこそ、どうかしてますよ」

「へえ、人のせいにするんだ」

「あの、倉島さん、研究はいいんですか？」

芽衣がそう言うと倉島の目はつり上がり怖い顔になった。何だか首を絞められそうな雰囲気になってしまったことを後悔した。

「おい」

後ろから、東海林の声がした。反射的に倉島は小さくなった。

「データの入力をしてないじゃないか、何をしていたんだこのポケ！」

ひどい言い様だった。彼女がぐれるのも無理はない、と思った。

「すみません。すぐに」

「もういい、やる気がないなら帰れ」

たちまち、倉島は真っ青になり、しゅんと落ち込んで、とぼとぼと研究室に戻っていった。

芽衣としては、彼女が自分からんでいる間に研究に打ち込んでいたらしいのにと、思う一方で、アルバイトと海水浴で研究室に出てこない東海林たち大学院生の研究がちゃんと進んでいることに疑問を感じていた。これが本当だったら、遊んでいる時間を研究に当てたらもっと立派な研究になると言う余計なお節介だ。

でも、せっかくのチャンスだったので、芽衣は倉島が落ち込んで研究室に戻る姿を見ながら足早にその場を脱出した。

売店でアイスクリームを買って外の木陰に腰掛けて食べていると、健一も休憩らしく、缶ジュースを飲みながら近づいてきた。

「よう、旺盛な食欲だな」

「まあね」

「一口くれ」と、兄貴が手を伸ばしてきた。

「いやよ」

芽衣は身をよじって兄貴を避けた。

「まあ、いい。それで、山本先生は今日お出かけなのか？」

「うん、五時にタクシーを予約しているわ」

「早速動くのか、武田さんのことは何かわかったのか？」

「ううん、凶面のサインの急な変更により内部の事情がありそうなことくらいかな」

「そんなことは、わかっている。その事情が何か問題なんだ」

「何かね、林崎という技師が左遷されたらしいんだけど、それから先のことはわかんないよ」

「調べられそうか？」

健一は真剣なまなざしで芽衣を見つめた。

「ギャラ次第かも」

芽衣はカマを掛けた。どのみち、警視庁の小林に弱みを握られ、強要されている以上は調査して情報をあげなければならないし、それまでに、兄貴を始め、大学のバックアップを精一杯受けたいという事情があった。

「ふむ、まあ、ただとは言わない」

兄貴にしては珍しく、最初から折れていた。

「ご、五千ドル？」

「なんだ、それだけでいいのか？ いいぞ」

「え？」

芽衣は肩すかしを食った。ふっかけたつもりがあっさり認められ、本格的に調査に乗り出す義務を負うことになった。でも、小林が五千ドルに応じず、恐喝で芽衣を動かそうとしたのに対し、こちらは余りにあっけなかった。

——軟弱だぜ、日本外交！　と思った。

「ただし、調査費用込みだからな」

少しけちられたものの、アイスを食べた後に健一の部屋に連れて行かれ、本当に研究費として六十万円を封筒に入れて渡してくれた。

「あの、おにいちゃん、これ、あたしが使ってもいいのかな？」

わざと首をかしげてかわいらしく聞いてみた。

「帳簿に載らない金だから領収書はいらないが、成果は必要だ。ちゃんと報告しろよ」

「うそ、じゃあ、新しいパソコンを買ってもいいの？」

「それは駄目だ。これは消える金なんだ。わかるな」

「じゃあ、温泉に行ったりとか？」

「馬鹿じゃないか。でも、温泉で情報が得られるならそれでもいい」

そう言われて芽衣は少しくうきしてきた。

持ち付けないお金を持つと、不安になるものだ。芽衣は早速何か成果を上げようと、これから調べることを考えようとしたが、そういうことは余り得意ではない。

「武田さんに接触するか何かして、林崎氏と山口氏の交代劇の裏側を探ってみろ」

健一は気軽に命じた。確かに調査の第一歩であることは芽衣にも理解できたが、そう簡単なことでないことも理解していた。

「簡単に言わないでよ。ハッキングしたらわかるのかな？」

「さあ」

「さあって？」

「五千ドルははした金ではない。そう言った調査手法のノウハウまで含めた金額なんだ。金額に見合ったアウトプットを出してくれ」

「ええ、うそ」

「うそじゃない、余ったら本当に温泉に行ってもいいぞ」

その言葉に乗って、芽衣は早速、健一の端末を借りて、大日本エレクトロニクス習志野工場のコンピュータに侵入しようとしたものの、あっさり、くじけてしまった。セキュリティの堅さは小林が言うとおりに非常に高く、また、外部からアクセスできる箇所に、人事情報などの重要なデータを置いていなかったのだ。

しかし、芽衣は諦めなかった。

大学近くのスーパーで男物の下着を何点か適当に買って、紙バックに入れて、電車に乗り千葉県習志野市にある大日本エレクトロニクス習志野工場に向かった。武田部長の

所属する特殊半導体開発チームがある工場だ。

正門前に来ると、警備員詰め所がありその前にいかめしい表情をした警備員がいた。

「あの、こちらでお世話になっております武田信和の娘でございます。仕事が忙しいそうなので、着替え用の下着を持ってきたんですが」

「へえ、あんた、武田部長のお嬢さんかい？」

「はい」

芽衣は純朴そうな年かきの警備員の前でかわいくほほえんだ。

「入っていいけど、書類だけ書いてね」

彼は詰め所の中に芽衣を連れて行き、机の上に、訪問者名簿とボールペンを出した。武田氏の住所など知らなかったが、警備員も知らないだろうと思い、適当に書いておいた。名前も架空だ。——武田信子？ わざとらしいかな。と思いつつ、ふと見ると、内線電話表が置いてあった。中を素早く見ると部署と、社内の構成がわかる。

詰め所を出た芽衣は、近くの建物に入り、事務員のような顔をして一台の端末に座った。誰の使っている端末かは知らなかったが、他人の情報やデータベースで社外秘の情報を仕入れるためには管理者権限でログインする必要がある。

内線電話表で情報システム課主任の番号を調べ、掛けてみた。

「はい、高橋です」

「社内サーバー管理をしている高橋さんですね？」

芽衣は念を押した。高橋さんが何人もいるのを確認する様な言い方だ。

「ええ、そうです」

相手の声は面倒そうだった。きっと、システムに関するクレームの電話を一日中受けているに違いない。

「こちら安全衛生課からなんです、高橋主任の健康診断がまだお済みでないので、お電話差し上げました」

「ええ？ この間行きましたよ」

「あら、じゃあ、データが間違いですね、別の高橋さんと入れ替わったようです。生年月日と社員番号をもう一度確認してよろしいですか？」

内線電話だと、割と警戒心を抱かないものだ。高橋氏は自分の生年月日と社員番号を教えてくれた。芽衣は人事課で更に高橋氏の住所と家族構成を聞き出し、この端末からハッキングを開始した。

ログインがすべての始まりだ。管理者権限でログインすればこのコンピュータすべての機能を管理することが出来る。芽衣は彼の社員番号を組み合わせでIDを推定し、何度かの入力で誕生日がそのままパスワードになっているのを確認と同時にアクセスに成功した。

武田氏の開発チームの人事情報を調べてみた。

うわさ通り、三年前にセクシャルハラスメント監視委員会の処分が林崎氏に対してな

されていた。相手は派遣社員の江藤真由美二十四歳だ。彼女はこの処分が出て林崎が出版社停止十日を受けた後に派遣元から呼び戻されている。

林崎の情報も入っていた。林崎繁和四十五歳、肩書きは担当課長、当時は開発チームリーダーだったが、この事件の後、宮崎工場のメモリーチップ生産課に異動になっていた。奥さんと子供が一人いたが、これも、事件の後、離婚されていてその際、一ヶ月休職していた。かなりごたごたともめたことが推定された。宮崎では会社の単身赴任寮に住んでいる。

芽衣はその住所をメモに控えた。

この女性の素性も気になった。人事課のデータを調べても記載されていなかったが、全検索を掛けると、資材調達課にファイルが入っていた。派遣社員が資材扱いなのは初めて知った。

事件の半年前に、都内に本社を置く丸の内アウトソーシング株式会社から派遣され事件の後にやめていた。やっぱりやめるくらいにショックだったのかな、と芽衣は思った。

彼女の履歴書らしきファイルがあったのでそれをプリントしてここを撒収した。

千葉から都内へ向かう電車も六時を回ると結構混んでいた。吊り革に捕まりながら、林崎のやった事件のことを考えていた。どう考えても違和感があった。

高度五万メートルを飛んでいる目標を同時に五百十二個も打ち落とすシステム。こんな先端軍事機密に携わっていた四十五歳の技師が、二十四歳の女の子の体を触って訴えられ、左遷されていたのだ。しかも、その女の子はセクハラに対して戦ったのは立派だが、その後すぐに辞めている。つじつまが合わないと思った。

総武線錦糸町駅に着いて、とぼとぼ歩いていると、携帯電話が鳴り出した。芽衣が不思議に思って画面を見ると、向こうも携帯電話だが知らない番号からだった。おそろおそろ通話ボタンを押した。

「もしもし？」

「黒澤芽衣だな、今どこにいる？」

「あの、どなた、……あ、小林さんですか」

「この番号だけ登録しておけ、その代わり他の電話から俺の名前を使って掛けるやつがいとも、無視しろ」

「わ、わかりました」

「こっちは駅前にいる。来られるか？」

「錦糸町？」

「ああ、喫茶店で待っている」

「は、はい」

小林からの電話を芽衣はおどおどしながら聞いていた。まるで、いじめっ子の前に出た中学生のようだが、弱みを握られているので、今のところ何を言われても従うしかなかった。芽衣は来た道を、また、もどり駅前の喫茶店を探した。彼の好みの店ってどこ

だろうと純粋に詮索した。

閉める準備を始めた喫茶店のウィンドウ越しにコーヒー一杯で頑張っていそうな、おじさんの姿を見つけた。近づいてみると小林だった。芽衣は外からにっこり笑顔を見せて入り口に回った。

「遅くなりました」

「まあ掛けてくれ、コーヒーでいいかい」

彼は店員にコーヒーを注文し、本題に入った。なぜだか今日の午前中に大日本エレクトロニクスの武田部長が山本教授の元を訪れたことを知っていた。

「まず、武田氏は何をしに行ったんだい？」

「共同研究がらみのことで、大学にまで捜査員が行ったことに対するお詫びでした」

「そう、悪かったね」

小林は心にもないことを言うと思った。

「武田さんは不正輸出も情報漏洩の事実もないと主張なさいました」

「ふん、それで？」

「大学側に流れている図面のサインのうち、担当者が急に変わっている時期がありました。三年前の林崎技師から山口技師への変更です。普通はサインを並記して業務を段々と引き継いでいるのに、このときだけは急でした。これを問い詰めたところ、武田さんは通常の人事異動だと言い逃れしました」

「なるほど、林崎が怪しいというわけかい」

「そこまでは言っていません」

芽衣は、林崎がセクシャルハラスメント監視委員会により、処分を受けていてその後に左遷された事実を述べた。そして、さきほど、習志野工場に潜入して林崎の現住所と、相手の女性の所属会社を突き止めたと話した。

「実際に工場に侵入したのかい？」

「武田部長の娘を装って、正門から入りました」

「ほう、プロの工作人員顔負けだな」

芽衣には嫌みに聞こえた。自分は何をしているのだろうと、ふと、思った。

「林崎さんは、この処分を受けた後、奥さんとも離婚して現在は宮崎工場の単身赴任寮に移っているようです」

「よくやった。彼とその女性のことはこちらで調べよう。また連絡する」

「あの？」

「何だい」

「林崎さんのような先端軍事技術を担当している技術者が、女の子の体を触ったくらいのことですら本当に左遷されるんですか？　いまいち信じられないんです」

「ほう、君のようなかわいらしい女性がそんなこというんだ。君、中年男に触られたことはあるかい？」

「いえ」

「こればかりは経験してみないとわからないと思う。そんなことと思うかも知れないが、一人の女性の人権は国家機密より重大な場合がある、これが民主主義国家だ」

小林が本気でそんなことを言っているとは信じられなかった。芽衣のことを売春防止法違反のえん罪で無理矢理引っ張っておいて、同じ口でそんなことを言うのだ。ますます、男って信じられないという思いが募っていった。

さすがにコーヒー代は小林が払ったが、芽衣の情報はただだった。





### 3. 夏休み



### 3. 夏休み



(1)



(1)

芽衣が小林に喫茶店に呼び出されてからしばらくは、何も音沙汰がなくなった。それはそれで、平和なことなので、芽衣も安心だったが、自分がサインしてしまった供述調書や補導記録などがそのままになっていて、こっちはこっちで不安の種だった。

アルバイトの教室事務員は相変わらず続いていた。

七月三十日の午前中に、友人の大西麻衣子が羽田空港から彼女の実家である宮崎に発ってしまい、少し寂しい思いをしている。

芽衣は彼女からの楽しそうなメールをもらって、うらやましくなった。十一時頃、売店に注文してあった教室の文房具を受け取りに行き、奥のサービスカウンターで国内旅行のパンフレットを見ていた。

——湯布院、黒川温泉、指宿温泉、……麻衣子の家に泊めてもらって、あちこち行けたらラッキーと楽しげな想像を巡らせていた。

ふと、雑誌を置いてあるラックの向こうに計算機物理学教室の男子学生がいるのを見つけた。こんな時間だし、昼食の時間までだべっているつもりかなと芽衣が聞き耳を立てた。

「事務の女の子って援助交際しているらしいぜ」

「まじかよ、そんな風には見えないが」

芽衣はどきとした。補導されたのがばれてしまったのかと不安になった。

「まじめそうな子に限って危ないんだよ」

「おれ、相手してみたい気がする」

みんな好きなことを言っていた。

「いくらくらいかな」

「一回五千円と言ううわさだ」

「ガセネタだな。絶対にあり得ない」

「だから、金目当てじゃなくて、ボランティアでやってるらしいよ」

「へえ、やはり考えることが違うな。俺もお願いしようかな」

「馬鹿、ここにいられなくなるぞ」

何となく話がリアルになってきていた。五千円という金額をきいたとき、芽衣の額から脂汗が落ちた。どこから話が漏れたんだろうと疑問に思った。

彼らが時計を見て、売店を出て行くまで芽衣は棚の陰に隠れて待っていた。こんなうわさが広がる前に何とか打ち消して置かなければとんでもないことになると思った。売

店から出る前にハンカチを頭からほおかむりのようにかぶり、下を向き、誰とも目を合わさないように教授の部屋に戻った。まだ、どきどきしていた。

「芽衣ちゃんどうしたんだい？」

「いえ、別に、文房具はどうしましょう」

「ああ、黒澤君に渡しておけばいいよ、彼から学生たちに配っているから」

「はい」

「どうしたの、本当に顔色が悪いよ」

「な、何でもありません」

芽衣はそそくさと、部屋を出て健一の部屋に向かった。途中の階段で一年生男子学生に出会い、目を合わさないようそろそろと通り過ぎた。彼らの顔は芽衣は知っていた、理学部で体育会系のサークル活動をしている男の子だ。向こうは芽衣のことを覚えていないらしくそのまま通り過ぎて行ってしまった。多分、冷房のついている涼しい教室で、昼休みを過ごすつもりには違いない。

——うわさが彼らにまで伝わっていないのか、知っていて知らない顔をしてくれたのか？

心配しながら健一の部屋に入り、文房具を届けると、難しい顔をしたままロッカーの中を整理して入れるよう言われた。

「お兄ちゃん、難しい顔をして何かあったの？」

「ふむ、昨日の続きだ。教授が後藤さんと面談してきたんだが、……」

「一大事？」

「いや、会食の伝票をどうやって切ろうかと悩んでいるんだ」

「何だ、そんなこと」

「それより、お前、顔色が悪いぞ」

「そ、そう？」

芽衣は少しくつむいてしまった。腹の立つうわさ話だが、まんざら嘘でもないだけに誰にも相談できないのだ。

「まあ、飯でも食いにいこうか」

「え、いいよ」

「何か食べたのか？」

「ううん、外に出たくないの。何か買ってきてよ」

「変なこというやつだな、食堂で食っても、ここで食べても栄養は同じだぞ」

「当たり前のこと言わないでよ」

「まあいいや、あんぱんでも買ってきてやる」

健一はそう言って、机の端に置いてあった財布をポケットに入れて廊下に出て行った。芽衣は軽くため息をついて、健一の座っていたいすに腰を下ろしたものの、一人きりになると却って不安になった。

いすをまわしてくると外に向かうと、窓から中庭が見えた。冷房の室外機の熱気で空気がゆらゆらとゆれ、通路脇に植えてある緑の桜から蝉の鳴き声が聞こえてきた。暑



い中スポーツに興じているサークルの女の子たちを見ていると段々と自分が悲しくなってきた。うつむいて、悲しいことの原因を心の中からひもところすると、まつげがしめり、涙が、ぼたりと落ちた。芽衣は手の甲でほっぺを伝う涙をぬぐった。

不意にがちゃりとドアが開き、健一が戻ってきた。芽衣はきれいにぬぐったつもりだったが、泣いていたことが簡単にばれてしまった。

「おい、あんぽんだ。ほれ」

親切にもあんぽんと牛乳の紙パックを買ってきてくれていた。机の上にぽんと置かれたが、泣いていたばかりで食べられなかった。

「後で食べるよ」

「何かあったのか？ 学内でのトラブルなら相談に乗るぞ、おい」

「ううん」

「誰かとけんかでもしたのか」

「別に」

「ひょっとして倉島か？」

妹のことを結構心配してくれていた。倉島佳代との確執など、芽衣も気にしていなかった。だが、本気で敵に回すとややこしそうな相手だとは感じていた。

「あの人って、どんな人なの？」

「やっぱりあいつか、とっちめてやる」

「待ってよ、別にけんかじゃないんだから」

「ふん、成績は優秀だ、だが、使えないやつだと言うのが、教官と大学院生の評価だ。実際に使えないしな」

「ちょっと、使えないってなんのことよ？」

「お前も四月から研究室を覗いているんだからわかるだろう。三年生までは試験で八十点以上を取れば優をもらえるが、卒業研究から以降はすべて自分で考えて進まなければならない。さぼって海水浴に行こうがアルバイトに専念しようが、論文の締め切りに間に合えば誰も文句は言わない代わりに、論文の書けないやつは、皆勤賞でも能なし呼ばわりされる。そんな世界なのだ」

健一は威張ってそう言った。芽衣は目を丸くした。今までそんな目で見えていなかったのだ。

「論文？」

「学位論文と研究論文があるが、どちらも、参考文献をふまえながら更に一步踏み込んだものでなければならない。つまり、それ自体が教科書にもない事柄になるし、それが、逆に教科書に載ることもある。有名な科学者の名前がついた式や法則がその例だ」

「そうなんだ」

「学生のうち、ほとんどはこういった意味で役に立たない。論文の書ける学生のサポートに回しているのが現状だ。しかし、本当の役立たずは、何も出来ない学生ではなく、出来る学生の足を引っ張るやつだ。やつはその典型になりつつある」

「引っ張られているのは東海林さん？」

「よくわかっているじゃないか。お前も東海林の二の轍は踏むなよ」

「踏んじゃったかも」

「おいおい、気をつけるんだ。何ならしばらく休みを取るか？」

「あ、逃げていいの？」

健一はふふんと笑って、芽衣の質問を軽くかわした。雇い主は健一ではなく、山本教授なのだ。許可なくしてさぼることは出来なかった。

「逃がすわけではないが、八月の月上旬に九州で応用物理学会のシンポジウムがある、それに出席させてやる」

「し、シンポジウム？ あたしに出来るの？」

「お前は座っているだけだ。落語じゃないから講演者が面白いことを言ってもゲラゲラ笑うんじゃないぞ。交通費と宿泊費だけは別途出してやる。スケジュールはうまく組んで、しばらく大学に来なくていいようにしよう。……ほとぼりを冷ますというやつだ」

「さっすがお兄ちゃん、頭がいいね」

芽衣はほっとして、机の上のあんぱんを初めてほおぼった。そんなに美味しいものではないと思っていたが、つらいときには甘さが心にしみた。

小さい頃から、兄にはいつも最後の最後の場面で助けてもらうことが多かった。コロッケを取られたり、からかわれたりと言った子供じみないじめはあったものの、肝心の時にはいつも助け船を出してくれる。十歳も年齢が離れているが故に、大人の対応が取れることが芽衣にはありがたいことだった。

少し安心して廊下にてたところで、倉島佳代とぼったり出くわした。もう怖くないと芽衣はおもった。研究が進まなくていじめられている哀れな女と思うと、責めるのもかわいそうと思う余裕があった。

「あら、あなた、かわいい顔してすごいことしているんだってね」

彼女は唇をつり上げて、勝ち誇ったことを装うように言い放った。

「すごいことって、変なうわさ話のことですか？」

「知ってて表を歩けるなんて、すごいわ。神経が太いのかしら」

ねちねちした言い方に芽衣は腹が立っていた。

「ひょっとして、そのありもしないうわさを流しているのって倉島さんなんですか。だったら即刻やめて下さい。迷惑です」

「火の気のないところに煙は立たないものよ。本当にしているんでしょ、ねえ」

火の気と言われて、芽衣は動揺した。

「してません。そっちこそ、こんなところで油を売っていないで、研究室にいらなくていいんですか。東海林さんも怒ってますよ」

芽衣がそう言ったとたんに、倉島の顔が一瞬真っ青になり、直後に真っ赤になった。まるで鬼のようだった。

「ふん、売春している子に言われたくないね、あんたなんかには研究の何がわかるのよ！」

明らかに倉島はキレてていた。四月からの勝手のわからぬ研究室生活により、彼女の

精神は追い詰められていそうだったが。本当の問題は彼女にその適性がなかったことだ。  
「倉島さん、あなたは成績がいいじゃありませんか。きっと、卒業研究のない学科を選んだらよかったですよ、多分」

芽衣は火に油を注ぐかのように健一の台詞を口にした。もう、意図的にやっていた。  
「あんたに関係ないだろ、それに、理学部に卒研のない学科なんてない！」  
「ひえ」

倉島は芽衣の胸ぐらをつかんで押し上げた。相手が女の子だったので、まさか暴力に訴えるとは思っていなかった。首を絞められ、息が出来なくなった。

気がついたとき、倉島は男子学生たちに取り押さえられていた。芽衣は助かったと思った。

「君、大丈夫か？　彼女はすこし精神的にひ弱なんだ。あまりいじめないでくれるか？」  
東海林がそんなことを言った。

——いじめていたのは大学院生たちじゃないか。と反論したかった。  
「とにかく、学内でけんかはよくない。やるなら外部でやってくれ」

「が、外部だったらいいんですか？」

「もちろん。僕たちの関知するところではない」

どこまでも無責任体質な奴らだと思った。



(2)



## (2)

助手である健一の仲裁で、しばらく、倉島は別のテーマに携わることになり、芽衣もシンポジウムへ出ることで少しの間、旅行に出かけることになった。シンポジウムは二日間だけだったのだが、資料作成の名目で、図書館にこもったり、早めに現地入りする許可を取ってくれた。

芽衣はせっかくだから、宮崎の実家に帰省している大西麻衣子に会いに行こうとスケジュールを組んだ。

会場は宮崎市立大学で、テーマごとに各教室が割り当てられていた。健一の情報では、人気のあるテーマほど大きな教室になっているそうだった。

肝心の物理学は少しだけ参考書を読んで、後は旅行と温泉ガイドを探した。時間を掛けるために鉄道で移動して、途中下車の旅を楽しみ、当日までに宮崎入りすればいいと考えていた。自分の端末からインターネット接続して検索すると、よさげな旅館がいっぱいあった。

二、三日は平和な毎日が続いていた。

八月四日、芽衣が前回のシンポジウムのパンフレットを眺めていると、携帯電話に小林からの呼び出しが掛かってきた。——困ります。と文句は言ったものの、結局は呼び出しに応じてしまう。

場所は田町駅近くのオフィスビル内の喫茶店だった。

芽衣が電車を乗り継いで店に入ったとき、彼は奥まった席でコーヒーを飲んでいた。

「あの」

「遅かったな、まあ、掛けたまえ」

芽衣はぶすっとして、向かいの席に腰掛けた。ウェイトレスが注文を聞きに来たので、アイスコーヒーを注文した。バッグを横に置いて、小林の顔をにらんだ。

「どうして、いつも、変な場所に呼び出すんですか？」

「ここは変な店ではない。それに横浜に行っていたので、帰り道だったんだ」

——小林は何かとぼけている、と感じた。

「大日本エレクトロニクスの林崎と、彼を訴えた江藤真由美の足取りを追ってみた」

「それはご苦労様です」

芽衣は嫌みを言った。

「元々、江藤は林崎と同じ職場で働いている有能な技術系の派遣社員だった。真面目で勤務態度もよく、派遣先、派遣元での評価も高かった」

「じゃあ、林崎の毒牙にかかったとでも？」

「林崎もまじめで、このときまで何の問題も起こしていない」

「じゃあ、出来心？」

「君は何でもドラマのように考えすぎる癖があるな。世の中はそんなに単純ではない」

小林の説明はこうだった。

真面目な技術系派遣社員だった江藤真由美はある時期から、正体不明の男Xに目を付けられて、しつこく言い寄られ、根負けする形で関係を持ってしまう。その関係に頼る形でXから情報漏洩を強要されるようになり会社の機密書類の持ち出しを始め、最後には林崎を引き抜くために一旦彼を失脚させることに協力させられた。

林坂のことを妻子ある男と知っていたが、Xに頼み倒されて、一度だけ林崎と関係を結んでしまった。林崎の呼び出しとホテルのセッティングはXが全てやった。

Xは二人でホテルに入るところとベッドでの写真を撮影してこの作戦を終えた。

「あの、小林さん、それって本当の話なんですか？」

「今のところ、江藤真由美は三年前から行方不明だ。Xの正体もわからない」

「じゃあ、当てずっぽうじゃないですか？」

「推測と言え。林崎が訴えられる直前に姿を消していることがわかった。江藤もXに操られていると気づきながらそんな写真が出たのはショックだったようだ。そしてこの写真が林崎の離婚調停の材料にもされている。セクハラ委員会の提訴などは駄目押しに過ぎない」

「写真って？」

「おそらく、自宅通勤OLでない江藤に目を付けて林崎に近づけ、色仕掛けの罠をかけた。江藤はそれ以来会社にも行くことが出来ずに、行方をくらませたが、林崎は離婚調停があったので、さすがにそれも出来ず、その間休職で乗り切ったのだろう。どちらにせよすぐには転勤にも応じられなかったんだろう」

「江藤真由美さんはどうなったのですか？」

「わからなかった。実家にも戻っていないし、搜索願が出たきりになっている」

行方不明と聞いて芽衣も暗い顔になった。

「林崎さんは？」

「彼の住民票は君の言った住所に移っているがこれから本人か確認する。奥さんと子供は彼女の両親と暮らしている」

「あの、この話を総合すると、直接の関係者がいないんですが、情報の確かさという面では大丈夫なんですか？」

「そう、確かに直接の関係者はいない。Xには情報屋の証言しかないし、江藤真由美はその友人の証言、林崎の家族は近所の人のお世話しかない。しかし、推定にはこの程度で十分だ。刑事裁判を維持する訳じゃないんだからな」

「つまり、次は、ICチップの情報を追うため、林崎の行方を追うわけですね」



「その通り、だが、宮崎にいるのが林崎本人かどうかは問題ではない、ノウハウの行方を追うんだ。と言うわけで、君にもついてきてもらいたい」

「ご冗談ばかり」

「冗談じゃないさ、ICの技術情報を扱っているのなら、それを鑑定できる人間が必要なんだ。出来れば機転が利いて、困難に直面しても対処できる人材がいい」

「いや、あたし馬鹿だから、あはは」

芽衣がとぼけると、小林はジャケットの内ポケットから茶封筒をちらりと見せて脅迫した。まさか、あのときの供述調書を持ち歩いているわけがないが、芽衣を黙らせるには十分だ。

「それで、目立たないように、わたしとは別のルートで日南市にある、大日本エレクトロニクス宮崎工場に来てもらいたい」

「あの、困ります」

「ふふ、断ればもっと困ることになるよ」

彼はまた連絡すると言い、伝票を持って喫茶店のレジに向かった。芽衣は一人残され、アイスコーヒーに差し込んだストローに息を吐き出し、ぶくぶくという音を立てるのを眺めていた。

混雑した電車で揺られて、家に帰り着くと、母親に顔色の悪さを見とがめられた。自分でも少しやつれた様な感じはしていた。

「ちょっと、芽衣。あんた最近痩せたんじゃないの？」

「本当？ お母さん」

「嬉しそうにしなさんな。どこか悪いんじゃないの」

「ううん、最近ストレスがたまっているからなあ」

「もう、大学生にもなって何がストレスよ」

「心配掛けてごめんね」

芽衣はそう答えて視線を落とし、そのまま二階に上がってしまうと、母親は余計に心配そうな顔をした。

パソコンで大日本エレクトロニクスの情報を調べると、場所はシンポジウム会場である宮崎市立大学とそれほど離れていなかった。芽衣は少し考えて、友人の麻衣子の実家に泊めてもらい、そこからシンポジウムとこの会社の捜査を行うことを計画した。一人でホテルに宿泊するより安心だし、また、言いがかりを付けられて弱みを握られそうになったとき、彼女が一緒だと証言してもらえそうに思えた。

ポータルサイトの検索で、宮崎駅までの新幹線と列車の時刻を調べて、明日、大学生協の旅行サービスカウンターで切符を買おうと思い、画面をプリントした。

一階の台所から、芽衣を呼ぶ声がした。兄貴が帰ってきたので一緒に食事を取れとい

うことだ。芽衣は自分で調べた時刻表を持って下に降りた。

今日はハヤシライスだった。大きく切った野菜とデミグラソースから立ち上る香りが食欲をそそる。現に兄貴は先にぼくついていた。

芽衣は自分で皿にご飯をよそって、ソースを掛け、テーブルに着いた。

「ねえ、お兄ちゃん、シンポジウムなんだけど、あたし早めに宮崎に行って、寄り道してもいいかな？ 麻衣子とも会いたんだ」

「遊園地でも行くのか？」

「そうじゃないけど、……」

「ふうむ」

健一はソースのついたスプーンを口に入れてきれいに嘗めた。そして、少し考えて、話し始めた。

「山本先生がこの間、内閣官房の後藤審議官とお会いになったのは知っているな？」

「うえ、何だかそちらの仕事もあるの」

「嫌な顔をするな、こっちの方が実は重要なんだ。現在、鉄鋼を含めて金属類の価格が高騰しており、特にレアメタルと呼ばれるものは入手困難なものすら出てきている。場合によっては国家存亡の危機にも直結する事態になるので、その対策を打ちたいし、案が出来れば、官房長官を巻き込んで実際の対策に出ると言うことなんだ。まあ、俺が聞いたわけではないがな」

「それと、あたしのシンポジウムとどういう関係があるのよ？」

「お前が対応してもらわないと困るのは武田部長が持ち込んだ課題に関してだ。あの刑事の奴らの言っている機密漏洩だの不正輸出だのとはレベルが違う。それくらいわかるだろう」

芽衣もぼくついていたハヤシライスを口に運ぶのをとめた。

「あのさ、この不正輸出が仮に本当だとして、誰が得をするのかな」

「アメリカが乗り込んできて、相手国への経済制裁を強化するだろう。だが、金属の価格高騰はこれとは関係がない」

「あ？」

「何だよ」

「ねえ、レアメタルって本当にレアな存在なの？」

「ふむ、レアなものもあれば、そうじゃないのものもある。埋蔵量は豊富だが、採掘が難しいもの。精錬が難しいなどの理由で市場に出回らないもの。いろいろだ」

「じゃあ、鉄鋼の価格高騰なんておかしいじゃない」

「これは埋蔵量ではなく生産量が追いつかないのが理由になっている」

「そのアメリカが制裁に乗り出して、逆にレアメタルの生産が落ちたりして」

「どういうことだ？」

「中国北東部から朝鮮半島北部に掛けて、タンタルやイットリウムの埋蔵地が分布しているよ。だから、ICチップの問題くらいで経済制裁に乗り出せば、デメリットの方が大きいと思うな」

「ふん、どうせブツは第三国経由で輸出されるのが常のことだ。直接の制裁などほとんど影響はない」

「でもさ、ICチップの不正輸出と、ミサイル防衛システムの破綻が直結してしまったら無視できなくなるんじゃないか？」

「おいおい、そんなことになったら日本も制裁の対象になるぞ」

「だから、本気で制裁なんかしないんじゃないの？」

「ふむ」

と、健一は腕を組んで考え込んでしまった。芽衣はその際にハヤシライスのお代わりをした。

「まあ、何にしても一度、山本先生に相談してみるよ。お前はシンポジウムに行っておけ、いつでも連絡が取れるようにな」

「了解です」

芽衣はスプーンを持ったまま敬礼してみた。

八月六日、芽衣は東京発博多行き新幹線に乗っていた。

荷物は旅行鞆に詰め込んだ紺のスーツと着替え類だ。バッグに研究室のノートパソコンを入れている。お盆休みの前と言うこともあり、少し混雑していて指定席を取っておいて正解だと思った。

前日に小林からメールが入り、芽衣には九時五十分ののぞみで小倉に移動し、そこから特急に乗り換えて宮崎駅まで出ること、そして、宮崎市内で一泊してそこで打ち合わせをすることになっていた。

芽衣が席に座ってしばらくたつとお腹が空いてきた。腕時計を見るとお昼を回っていた。新大阪を過ぎて少したつと車内が空いてきたので、駅で買っておいた唐揚げ弁当を開けた。前席背もたれのトレイを出して、ペットボトルのお茶を飲んだ。



(3)



### (3)

芽衣が宮崎駅に着いたとき、駅の時計は十九時二十分を指していた。

新幹線を小倉で降りて特急に乗り換え、途中どこにも寄ることなく延々とシートに座り続け、着いたときにはかなりくたびれていた。もっとも、お弁当を食べたのをかわぎりに、おやつや軽食をずっと食べ続けていたせいもあるかも知れない。

駅のホームを降りて自動改札機に切符を入れて外に出た。

旅行カバンを下に置いて、のびをしてから肩を回した。

ロータリーの向こう側から同じように手を振っている人が見えた。大西麻衣子とそのお父さんらしき人だった。中型セダンで迎えに来てくれていた。芽衣は恐縮しながら荷物を抱えて走り寄った。

「芽衣ちゃんいらっしやい！」

麻衣子が手を振った。

「どうも初めまして、このたびはお世話になります」

「こちらこそ、娘がいつもお世話になっています」

と、挨拶した。その間に麻衣子が芽衣の荷物をトランクに入れてくれた。東京にいるときには彼女の家は宮崎市内にあるようなことを言っていたが、実際には少し遠方の方ようだった。

——会社の事務所が宮崎神宮駅の近くなんですよ。

父親は頭をかきながら言い訳のようなことを言った。麻衣子は、えへへと笑った。芽衣は嫌みめいたことは一切言わず、自動車の後部座席に麻衣子と並んで仲良く座った。座った瞬間から、麻衣子から家族と一緒に住むことのデメリットにつき延々と語り始めた。

「でも、麻衣子のお父さんっていい人そうじゃない？」

「営業スマイルよ」

「え、じゃああたしって本当は歓迎されてないの？」

芽衣は少しショックだった。確かにシンポジウムにあわせてやってきて、勝手に泊まって後は帰って行くだけの旅人には違いない。

「そんなことないわよ。娘が一人増えたって、お母さんも嬉しそうよ」

「あのさ、これから、少し不動産巡りなのよ」

「何それ？」

「行方不明になった技術者の足取りを追っているの。日南市にある大日本エレクトロニクス宮崎工場に勤務しているんだけど、いまいち行方がわからないの」

「ふーん、探偵のアルバイト？ 面白そう。社宅とか、社員寮なら案内できるよ」

と、麻衣子が言ってくれた。不動産会社なのだからかなり、事情には通じていそうだった。

「あそこは日南市と言っても丁度宮崎市に近い方にあるので、高速道路のインターチェンジがあるからあれで通勤している人も多い。寮は都城 I C の近くの田んぼの中だし、幹部用の社宅は一個建てで、これは宮崎市内に点在している。どれも、高速を通れば通勤時間も掛からない。芽衣ちゃんも就職するならこういうところがいいよ」

と、お父さんは説明した。

「あはは、麻衣子さんもこちらに就職するんですか？」

「いやあ、娘には東京で頑張ってもらいたいと思っているんだ」

——何よそれ、と思った。

日もとっぷりと暮れ、人通りのない県道を延々一時間ほど走り、山の中にぽっかりと出来た住宅地に入っていった。二階建てのかわいらしい家が目に入り、芽衣がいいなど思っていると車はその前に止まった。

「芽衣ちゃん、ここ。疲れたかな？」

「ううん、大丈夫よ。素敵なおうちね」

芽衣がそう言うとお父さんが嬉しそうにニコりとした。

「さあどうぞ、汚いところですが」

「おじゃまします」

娘の親友が東京から泊まりに来るということで、麻衣子のお母さんは張り切って料理を作っていた。こちらの名物料理らしく、地鶏の南蛮揚げや冷や汁など、ご自慢の逸品がいっぱいあった。

「美味しいですう」

と、芽衣は涙を流してぱくついた。朝から弁当とおやつなど、保存食品ばかりで、手の掛かった料理を胃袋に流し込むのは久しぶりの感覚だった。

お父さんが焼酎を勧めてくれたが、これは、麻衣子が横から、——未成年だから、と断った。

八時頃、芽衣と同じ年くらいの男の子が、塾の帰りらしくカバンを持って帰ってきた。

「ただいま、あれ、お客さん？」

「おじゃましてます。黒澤です」

「あ、どうも」

無愛想なやつだった。でも、色白の肌に、長いまつげ、大きな黒い瞳と結構美少年だった。芽衣は内心嬉しくなった。

「あ、こいつ、弟なの。翼、高三の受験生、芽衣は邪魔しちゃ駄目だよ」

「そうなの、受験生なんだ。どこを受けるの？」

「いや、別に」

翼くんは、無愛想に答えた。



夜は麻衣子の部屋に布団を二つ並べて寝かしてもらった。

麻衣子は探偵ごっこに興味があるようだったが、芽衣自身、社会的に危険なことであると感じていたし、麻衣子の塾講師のアルバイトを邪魔しても悪いので単独で動くことにした。

次の日、芽衣はお父さんの車で、不動産会社の事務所に連れて行ってもらった。ここで、地図を借りて大日本エレクトロニクスの社員寮と社宅住所の確認を行うつもりだった。ネットの地図では番地や人名まで載っていないし、ガスや水道の細かいデータはこちらで調べた方が早い。

以前調べた、林崎技師の単身赴任寮は宮崎郡内のマンション型の住宅だった。

「あの、お父さん、ここに誰が住んでいるか確認できますか？」

「誰って登記簿上って意味かな」

「いいえ、実際に住んでいる人です」

「それは、行ってみないとわからないねえ。ここは、大日本エレクトロニクスの会社所有で各個人がそれぞれ賃貸する形式になっているね。住民票なんかはここにしていないかもしれないな」

「そうですか」

「行ってみるかい？」

お父さんもやけに親切だった。しかし、今日、駅前で芽衣は小林に会うことになっているし、時間も取れないので、丁重に断った。

芽衣は宮崎神宮駅から宮崎駅まで一駅だけ鈍行で移動し、小林からの連絡を待っていた。

小林は正午ぴったりにタクシーで現れた。彼の姿を見て芽衣は少し緊張した。相変わらず紺の背広をびしっと決めていた。

「こんにちは」

「ああ、ご苦労さん」

無愛想な態度だった。宮崎空港から直行したらしくタクシーのトランクを開けてトラベルバッグを取り出していた。

「あの、飛行機だったんですか？」

「そうだよ。時間は大切だからね」

——あたしの時間も同じだよ、と思った。

「捜査は進展したのかい？」

芽衣はむすっとした。

「林崎技師の単身赴任寮の住所地および地図を手に入れています」

「そう、実際に住んでいるかどうかは？」

「まだです」

「ふん、そういうときは、これから調べるところです、と答えた方がいい」

「ご親切にどうも」

小林は芽衣を近所の食堂に連れて行ってくれた。珍しいこともあるなと思いながら、メニューを見てトンカツ定食を注文した、小林はウェイトレスが来たときにカレーライス、と言った。

芽衣はその言葉を聞き、少し安心した。何事にかけても事務的なこのおじさんがカレーなど食べるのが、ある意味愉快だったのだ。

小林が左手でスプーンを操り、カレーライスを口に運ぶのは少し目障りだったが、芽衣は何も言わないことにしていた。彼は彼で、芽衣がとんかつを忙しそうに口に運ぶのを興味深げに見ていた。

昼食がすむと、小林は駅でタクシーを捕まえて、林崎の住所地を指定した。

——高速道路を使ってくれ、と彼は指示した。

タクシーは東九州自動車道、宮崎西インターチェンジに向かった。途中で宮崎自動車道に変わり、田野インターチェンジで降りて小さな町に入る。少し山に向かうとこぎれいなマンションがあった。

(4)



(4)

——ここでいい、と小林はタクシーを止めて、料金を現金で支払った。

芽衣は小林のトラベルバッグを持ってついて下りた。

「ここか？」

「さあ」

芽衣の間抜けな返事を無視して、小林はマンション一階の事務室に向かった。会社の  
単身赴任寮なら管理人室があるはずだ。

小林は管理人室の小窓をのぞき込んでノックした。

「何か？」

初老の男が出てきた。

「あなた、管理人ですか？」

「ええ」

「わたしは弁護士の小林と言います。こちらの林崎さんのお嬢さんの依頼で動いていま  
す。彼女が面会を希望しているのですが」

「はぁ？ 林崎さんに娘さんがいたのですか？」

「ご存じないですか」

「いや、林崎さんに家族がいたのは知りませんでした」

小林は離婚した父親を訪ねてきた娘の弁護士を装い、管理人を騙して林崎の部屋に案内させた。芽衣は半ばあきれながら、半ばびくびくしながら大きな荷物と一緒に  
行った。確かに警察を名乗り任意捜査だと言えば、最悪の場合、拒否される可能性もあ  
ったが、弁護士だと言えば、夕方に本人が帰ってくるまで部屋に上がり込むことが出来た。

管理人が合鍵でドアを開けると、小林と芽衣は部屋に上がり、管理人はしばらく様  
子を見ていたが、事務所に電話が掛かったのをきっかけに帰って行った。

「さて、お嬢さん。搜索だ」

「ちょっと、やりすぎじゃないですか？」

「目的を遂行するために手段を選ばなければならないときもある。しかし、今回は時間が  
ないのだ」

「それで、あたしは何をすればいいんですか？」

芽衣はそう言って部屋の間取りを見た。リビングと寝室、台所からなる結構よさげな

部屋だった。リビングには林崎の本職である手製のデスクトップパソコンがあり、たこ足配線から伸びる電源がハードディスクやビデオディスクにつながっていた。

「パソコンの通信ケーブルを切ってから、メールソフトとハードディスクのデータを調べろ」

「へ？」

「リモートホストから監視されているかも知れない。確認して何もなければネットにつないでいい」

「わかりました」

芽衣はモデムからパソコンにつながっているケーブルを一旦外してから、電源を入れた。ランプが灯り、ぶぶーんというディスクのモーター音が静かな室内に鳴り響いた。大きなハードディスクをつないでいるせいか起動に時間が掛かった。

ざーっと流れる起動画面を芽衣の瞳がスキャンし、このパソコンのCPUがウィンドウ対応のものでないと感じた。アイダホインストルメンツ製ではなく大日本エレクトロニクス製だった。

芽衣は小林に黙って作業を続けた。

メールソフトには二年前からのものが保存されていた。

「メールは誰からだ？」

小林はいちいち芽衣に確認した。

「女性との密会の約束と、男性との何かの取引みたいです」

「密会？」

「デートのいやらしいやつでしょ？」

芽衣は見たらわかるだろうという、口調で返事した。

「ああ、名前はわかるか」

「複数です、ミホとチヒロ」

「ふん、男との取引は？」

「ファイルを小出しに売って、金を振り込ませています」

「中身は？」

「このメールにはありません、口座番号も入っていません」

「まあいい、お前はパソコン内のファイルを探せ、回路図やダイアグラムを見逃すなよ」

「了解です」

芽衣がパソコンにインストールされている製図ソフトの種類を確認して、ハードディスクに検索をかけると同時に、小林はポケットから先の曲がった金属製工具を取り出し、机の鍵穴に差し込んでぐりぐりとねじった。

「ちょ、ちょっと小林さん、やりすぎですよ」

芽衣がそう言ったとき、鍵ががちゃりとまわった。芽衣は自分も机の中にはものを隠せないなと思った。

引き出しの中には、手帳と、三通の通帳があった。小林は通帳をばらばらとめくり、一通を芽衣に手渡した。

「こいつは、月に一回記帳している。入金のうち一回は給料だろう。もう一回大きな入金がある、誰からだ」

「え？ アオノミノルって書いてますが、それ以上はわかりません」

「それでいい。電話番号検索をかけろ」

「はい」

「それから、林崎は別れた妻に慰謝料を分割で払っている。それプラス愛人に金をつぎ込んでいる。この会社はそんなに給料が高いのか。わたしが移りたい位だ」

「つまらない冗談は言わないで下さい。あたしそういうの大嫌いなんです」

「女学生のようなことをいうな」

「悪かったですね、あたしも女学生です」

芽衣が口答えると、小林は珍しく無視した。

「このアオノというのが、林崎に金を渡し、それでやりくりしているんだ」

「その代償って、ひょっとしてPAC4システムですか？」

「だとしたら、安すぎるがな。考えるのもおぞましいやつだ」

小林の表情が険しくなった。電話番号はこの町内で一件見つかった。他の市外局番でもっと見つかるかも知れないと思い、芽衣はネットにつないでいいか確認した。

「ふむ、まずはそいつから調べよう。他のファイルはまだか？」

小林は偉そうに命令した。

「待ってください。フォルダーが多くて簡単にはわかりません」

「作成日時が三年前のものを優先しろ」

「はい」

だららっとファイル名が並び、その中に製図ソフトのファイルがあった。

「小林さん、ありました」

「内容は？」

「ぼんぼん言わないで下さい。大学のデータと照合しないとこれがPAC4かどうかなんてわかりません」

「照合しろ」

本当にぼんぼんと言われて、芽衣は持ってきたノートパソコンを携帯端末に接続してネットにつないだ。健一のIDを使って東都大学計算機センターのデータベースにアクセスした。計算機物理学教室のファイルの健一のフォルダーに、大日本エレクトロニクスから提供されたデータがあるはずだった。

芽衣はこの製図ソフトの使い方をよく知らなかったが、マウスでクリックしてドラッグすると移動できそうだったので、二つの図面を重ね合わせ、合わない箇所を赤色で塗りつぶす操作をした。

何か所か赤い箇所が出たが、概ね一致した。

「こんなものか。君はどう思う？」

「結構近いと思いますが、大学でシミュレーションしたものを、後で改良したのではないですか？」

「いや、大日本は改良結果を、必ず後から大学でシミュレーションさせて検証している。だから少しおかしいんだ」

「ここを拡大してみます」

芽衣は図面の一致しなかった箇所を拡大した。

「後からわざと形状を変えています」

「あ、そうか」

小林が何か気づいた様な声を出した。

「何ですか？ 教えて下さい」

「このユーザーは正規ユーザーではない。だから、一部変えたものを渡して、金ももらったら後から修正版を送ったんだ」

「なるほど、悪党ですね」

「かつて愛していた女房と、現在愛している愛人のためだったんだらう」

また、小林が嫌な言い方をし、芽衣はむっとした。

「でも、敵は本当にこれだけで満足していたんでしょうか？」

「ふむ、本命はPAC4システムのノウハウそのものだ。しかし、林崎が愛人を囲うことを条件に、情報を小出しにしていたら、彼の仕事の性質上、別にこの田舎のマンションから全体をコントロールできたはずだ」

「だとしたら、彼を監視していたのは、近くにいます」

「アオノのことか、多分、町内だろう。それに偽名で、何かの身分偽装をしていると思う」

ファイルを整理し、敵に牙をむけようとしている小林の背中を見ると、なぜか哀愁が漂っていた。

「小林さん、ここにあるものってPAC4システムだけでなく、基盤、それから、最新のPAC・NEOシステムの基盤も扱っていると思うんです」

それを聞いた小林の目はいっそう鋭くなった。

「PAC・NEOシステムだと？ お前なぜそれを知っている？」

「これも、大日本エレクトロニクスと大学とで、PAC4システムと同じやり方で共同研究方式がとられていました」

「PAC・NEOシステムまで敵に渡るとは、それは少し尋常では行かない。彼の身柄を拘束してとっちめなければならない」

小林の指示に従って、芽衣は最新のPAC・MANシステムのICチップや回路図などを探したが、机の周りからは見つからなかった。

「おい」

「はい」

「PAC・NEOシステム自体は新しいものだ。三年前にこっちに転勤してきた林崎が関与しているのも不自然だし、ファイルを持っているわけがない」

小林は芽衣を馬鹿にしたような目で見てもう言ったが、高度なCPU設計図を勝手にいじり回す彼の能力から見て、あり得ない話でもないと感じていた。

「あの一」

「何だ、さっさと見え」

「もう、……このパソコン自体が変なんです」

「確かに自作のパソコンだな、それで？」

「さっき起動したときにアメリカ製CPUを認識せずに、大日本エレクトロニクス製のC



PUを認識しました。オペレーティング・システムはウィンドウだから、日本製で対応するCPUがあるなんて聞いたことありません」

「PACシリーズのシステムはパソコンに載るのか？」

「普通は載りません。ですが、共同開発した評価用ボードはパソコンにこれらを普通のCPUと認識させるためのものです」

「早く言え」

小林はそれを聞くと荷物からドライバーを取り出し、デスクトップパソコンの筐体の解体を始めた。遠慮がなかった。バラバラにねじを外すと、並べておくこともせず、ケーブルを無造作に抜き、大きな基盤を引き抜いた。芽衣はハラハラしながらその光景を見ていた。

「これを見ろ」

「見たことのない、基盤ですね」

「そう言う意味じゃない。大学の評価用ボードとの違いを比べろ」

芽衣はノートパソコンで大学で現在、中山教授たちが使っている評価用ボードの設計図を引っ張り出した。が、違うものだった。

「見ろ、このCPUの六桁のナンバーは国防省の管理ナンバーで同盟国に供与したものに割り振られているものだ」

小林が基盤中央の大きなICチップにシルク印刷されている番号を指さした。芽衣が触ろうと手を伸ばすと、振り払われたので引っ込めた。

「ボードが出鱈目でも、CPUは正規のものだ。サンプル品を持ち出したと思われる」

「じゃあ、基盤は林崎が自分で作ったのですか？」

「今のところ、そう判断するしかない。メールのやりとりだが、取引材料がこの基盤だとしてもう一度チェックしてみてくれ」

「パソコンがバラバラなので出来ません」

「ハードディスクをお前のノートパソコンにつなげ」

「はい」

面倒だったが、芽衣は小林に逆らうことは出来ない。また、一からメールを読み解き始めた。もう午後四時を回っていた。



## 4. 情報部



## 4. 情報部



(1)





## (1)

三ヶ月前の四月三十日、小林は国防省ワシントンビル内にある、情報部のオフィスに勤務していた。そこに、かつての上司だったジョン・F・マッケイから電話が掛かってきた。

——マッケイ大佐？

小林が国防省情報部に入省した時の上官だった。ずっと一緒に勤務していたが、マッケイが身分偽装して国務省官僚として東京のアメリカ大使館に移ってからは、お互いに連絡も取っていないかった。小林も三年ほど会わないうちにすっかり忘れていた。

——是非、君に助けて欲しいんだ。

そう言われ、至急東京に来るよう頼まれてしまった。

マッケイ大佐には子飼いの情報部員が大勢いて、任務に向いた人間を重点的に投入するタイプの上司だった。小林は多分、そうした状況で白羽の矢が立ったのかなど、現在の上司の許可を得て要請に応じた。

空路で日本に移動し、赤坂のアメリカ合衆国大使館に行くと、早速、マッケイの執務室に通された。彼の横には秘書らしき男がいた。

「わざわざ来てもらってすまないね、アーサー」

マッケイは小林をファーストネームで呼んだ。以前一緒に仕事をしていたときには、それほど親しい間柄ではなかったが、何かやっかいな頼み事があるときに、彼はよくこういう言い方をすることは聞いたことがあった。

「いえ、久々にお会いできて嬉しく思います。マッケイさん」

小林は横にいる男をちらりと気にした。マッケイ大佐と近い間柄で仕事をしていることを、大使館員である国務省の人間にも知られたくなかったのだ。情報部の人間に取り、顔と身分を知られることは、ときには致命傷にもなりかねないのだ。

「アーサー、彼は心配しなくていい。彼も国防省情報部所属の人間だ」

「彼も？」

「彼は、電子偵察機の受信データの解析専門士官だ。今回の事態を見抜いた最初の人間だ」

「続けてください」

マッケイ大佐がうなずくと士官は紙フォルダから、データシートとレポートを机の上に並べた。

「これが海軍の電子偵察機E P 3 Eの受信した、地上からのレーダー波を解析したものだ。通常のレーダー信号に紛れて、P A C 4システムのフェイズドアレイレーダーからの電波が入っている。何かの間違いいないが、敵がP A C 4システムを解析して故意に電子偵察機を攪乱しようとしたのなら重要な問題だ」

マッケイ大佐はデータシートを指し示して解説した。

「わかります。有事の際に、P A C 4システムが妨害されたり、こちらからの航空攻撃が困難になる可能性を示唆します」

「君の任務なのだが、日本側の内部情報、……彼らから漏れたのかどうかを捜査してもらいたい。本来はセンター（中央情報局）の管轄なのだが、彼らだとホワイトハウスにまで情報が上がってしまう。出来ればアジアのことはアジアだけで解決したい」

「ですが、わたしは国防省情報部の将校です。こちらの捜査権限がありません」

「うん、そう思って、君のことは日本側防衛省との将校レベルの交換人事に紛れ込ませてある。これから君は防衛省にひとまず入る。その後の省庁間の人事異動はこちらがうまくやる。君は警察庁、あるいは警視庁の捜査員として彼ら官憲の力を適宜利用して捜査してくれたまえ。期限は六月末だ」

「六月末？」

「二ヶ月で結論を出せ、いいな」

「命令なら従います。ですが、どうしてわたしが選ばれたのです？」

「不満かね」

「いいえ、ただ、日系人と言うだけで日本での作戦に投入されるのなら少し不本意です」

「確かに、君の日本語能力には少し問題があり、こちらの習慣にも通じていない。今の君ならボストン生まれのわたしの方がより日本人らしく振る舞うことが出来る。だが、君は日系五世だったね」

「はい、そう聞いていますが、日本語もしゃべれませんし、もちろん書けません」

「余り時間がないんだ。知らないかも知れないが、白人が日本人社会に溶け込むには非常に時間が掛かるし、地方に行けばなおさらこの傾向が強いんだ。地元警察に紛れ込んで工作するには君のルックスが欠かせない。それに第一優秀だ」

「ご冗談はよしてください。ルックスだけでこなせる任務なのですか？」

「こっちはそういう地区なんだ。訛りのない日本語を話すわたしを外人扱いする日本人農夫は多いが、彼らはどんな言葉遣いだと思う？」

「さあ」

「地方訛り丸出しなんだ。そのくせ、自分たちの方が日本について詳しいと盲信している。つまり、見かけだけで判断され、実際の日本語能力などあまり問題ではないということだ」

「では、見かけだけでいい、と言うことは、やはりルックスだけで選ばれたわけですね？」

「冗談だよ、アーサー。頭がいいことがこの作戦の第一条件だ。それで、君を選んだんだ。アーサー・クラーク・コバヤシ君。わかったら時間がないぞ。簡単な日本語会話を大使館のオフィサーから習っておけ。ありがとう、と、すみません、だけでいいから」

小林はマッケイ大佐の悪い冗談に顔をしかめた。

一週間、海軍横須賀基地で即席日本語コースを受けた後、早速、警察庁に配属が決まりここで半月の間勤務しながら、PAC4システムの情報を追いかけてみた。

レーダー、電子機器、ミサイル本体、制御用コンピュータとあらゆる分野の複合体であるシステムはアメリカ合衆国の企業と日本国内複数の企業との間で技術供与契約がなされている。

これらの企業内部からの情報漏洩なのか、あるいは外国によるスパイ事件なのか、それを見極めるのが小林の仕事だった。その点、警察庁に入り込んだのは正解であった。他に情報機関のない日本では一番、情報を得るのに適していた。

五月上旬には、ターゲットを大日本エレクトロニクス習志野工場内の開発プロジェクトに的を絞っていた。この時点で、更に関東で活動しやすい警視庁に移籍した。

警視庁で捜査活動を初めて一週間後、赤坂の大使館から呼び出しが掛かかり、小林は出向いた。マッケイ大佐は捜査の順調ぶりとは裏腹に仏頂面をしていた。

「ご苦労様、アーサー、早かったね」

「いえ、日本の防衛省から受注しているメーカーは限られております。情報が漏洩しているとすれば、防衛省か大日本エレクトロニクスかどちらかしかありません」

「なぜ、防衛省ではないと思ったんだい？」

「電子偵察機の傍受した信号は、PAC4そのものではなく、それらしく作られたものです。つまり高度に応用する技術を持っている。ユーザーではなくメーカー側が犯人と見るのに十分な状況です」

「なるほど、それで次に、具体的な漏洩ルートを特定しなければならない」

「少し問題があります」

「大日本エレクトロニクス側のセキュリティーの高さか？」

「そうです。警察側から入り込んでも、情報は得られません。技術者の派遣を要請します。内部に潜り込ませたいと思います」

マッケイ大佐は腕を組んだ。大きな右手であごをさすった。

「大日本エレクトロニクスは東都大学と共同研究を持っている。学生も出入りしているはずだ」

「学生をスカウトするのですか？」

「いや、使えない学生を相手にすると、こっちの首を絞めることにもなりかねない。誰かをカバーにして、それを裏で操ろう。優秀な学生なら事件解決まで任せておけるし、駄目でもこちらの関与を否定できる」

「わかりました。これはわたしが自分で探します」

「うん」

小林はそこで改めてマッケイ大佐の顔を見た。今日、呼び出した理由が、捜査の進捗状況の説明だけとは思えなかった。ただでさえ、マッケイ大佐が国防省情報部の存在を国務省に秘匿しているのに、小林をここに呼ぶことすら危険な行為なのだ。

国務省に知られて、ホワイトハウスに報告されれば、政権内部で大きな問題となりかねず、また、マッケイ大佐の作戦自体が、中央情報局の管轄を侵していることを指摘さ

れてしまうのだ。

「今年になり、東ヨーロッパのNATO軍レーダー基地と、極東ロシア軍が、サイバーテロの被害に遭ったという情報を得ている」

「テロ？」

「いずれも、信号ケーブルを切断したり、電源回路を破壊したりと言った高度な破壊活動で、物的損害は軽微なもの、レーダー基地が半日麻痺したなど、戦略的に重篤な被害といえる」

「犯人グループは同一なのですか？」

「今のところ、手口が同じとしかわかっていない」

「それと、今回の電子偵察機の件と、つながりがあると考えておられるのですか？」

「イギリス情報部が、旧ワルシャワ条約加盟国内にある基地の盗聴を行い、誰かが暗号通信を行っていたことを把握している。使われたアルファベットから、コードネーム、ハンニバルと呼んでいる」

「ハンニバル？ 第二次ポエニ戦争でローマを何度も打ち破った将軍の名前ですね」

小林が皮肉気と言うとマッケイ大佐は首を横に振った。

「史上最高の指揮官とも言えるハンニバルに比べ、今回のテロリストの動きは極めて卑小だ。意味から取ったのではなく、暗号通信文の最後にいつも、H、N、B、L、がついているのをイギリス情報部の担当者がおもしろがってそう呼んでいるに過ぎない」

「では、今回もその暗号があったのですね」

「そう、今回もイギリス情報部が受信している」

「イギリス情報部が受信したと言うことは、我が国の中央情報局も知っているのではないですか？」

「ハンニバルのことは知っているが、電子偵察機がPAC4システムの攪乱信号を受けたことは、まだ、報告をあげていないのだ」

小林は、マッケイ大佐が、自分の面子のために、事態を自分だけで解決しようとしているのか、情報漏洩を問題にして日米間の外交問題にまで拡大するのを食い止めようとしているのか、真意を測りかねていた。

どちらにしても、この極東地域でハンニバルと名乗るサイバーテロリストが暗躍していることと、最高機密のはずのPAC4システムの情報が漏洩していることは事実だった。しかも、小林の捜査では、大日本エレクトロニクスに問題があるのはほぼ間違いないだろうと思われた。

「アーサー、この問題を解決するには、大日本エレクトロニクス内の情報提供者と、ハンニバル配下のエージェント双方を、日本の警察が拘束するしかない。それ以外の方法では必ず外交問題に発展する。わたしが言うのだから間違いないよ」

「わかります。しかし、警視庁には公安以外のカウンター・インテリジェンス部門はありません」

小林は文句を言った。

カウンター・インテリジェンス部門とは、外国のスパイを取り締まる専門の警察のことである。憲法上、軍隊を持たないことになっている日本では、スパイ組織もないし、ましてや、スパイを取り締まる法律もなければ組織もない。仮に小林が苦勞してスパイをあぶり出したところで、警察は動くことが出来ないのも、何か別の法律違反を根拠に逮捕しなければならない。俗に言う別件逮捕であるが、違法行為であることは昔から指摘されている。

「別件逮捕でも、任意同行でもいいよ。相手のことをお見通しだと、強力なメッセージを送ることが重要なんだ。最終的な結末は知る人ぞ知る、で、いいと思う」

「大佐は犯人はロシアとお考えですか？」

「いや、ロシアも被害に遭っているんだ。他のテロ支援国家は限られている」

「わかりました。大日本エレクトロニクス内部の情報提供者を見つけ出して、相手と接触させ、双方を拘束します」

小林は大使館を出て、警視庁の職場に戻った。



## 5. ファイル





## 5. ファイル



(1)



(1)

林崎の部屋に忍び込んだ小林はしばらくの間、パソコンの中から引き抜いた、PAC・NEOシステムの評価ボードを眺めていた。

芽衣はその間、自分のノートパソコンで懸命に林崎のメールの解析作業を続けていた。

「小林さん、それ、眺めていても何も出ませんよ」

「生意気な口をたたかず解析に専念しろ」

「でも、そんなもの、……あ、どうしてこんなものを持っていたんでしょう」

「彼がスパイである証拠じゃないか。今さら何を言うんだ」

「でも左遷されてから三年ですよ。PAC・NEOはもっと新しいですよね？」

「お前、頭がいいな。どう説明をつけるんだ」

「だから、PAC4が先に実用化されるじゃないですか。それを、漏洩してしまって、その間にPAC・NEOのサンプルチップを元に自分で開発したんじゃないでしょうか。

だから、本物とは少しずつ違っているんですよ。多分ですが」

「憶測じゃないか」

「憶測でいいと言ったのは小林さんです」

「お前生意気だぞ。だが、可能性の高い方にかけてよう。メール解析はもういい」

「え？」

小林はポケットからシガレットケースのようなものを取り出した。中を開けると、電子パーツが詰まっていた。その中からシールのようなものを取り出してボードのICの背中にべたりと貼り付けた。

「小林さん、それは？」

「小型発信器だ。誰かに手渡すのを監視できるようにする」

小林は、ICボードを元通りコネクタにつなぐと、ねじや配線を元通りにし、筐体を組み立て、前よりきれいにした。

「後は仕上げだ」

そうつぶやいて、コンセントや蛍光灯のプラグ、部屋の花瓶の底などに、これ見よがしに盗聴器を仕掛けた。だが、素人にはわからないだろう。

「でも、林崎技師なら、そんなものすぐに見つかると思うんですが？」

「そう。人間は一つ見つけると安心するものだ。ダミーだな」

「へえ、頭いいんですね」

「生意気言うな」

と、芽衣は頭を軽くこづかれた。

「てへ」と舌を出した。

「よし、撤収だ」

小林は手早くゴミを集めてポケットに入れ、芽衣はノートパソコンをバッグに入れた。後は管理人の口を封じておけば完璧だった。

芽衣は小林がどんな風に小細工をするのか、何だか楽しみになってきた。

管理人室を覗くと、彼は日誌を付けていた。黙って出て行ってもわからないが、小林は彼を呼び出した。

「あれ、弁護士さん。お帰りですか？」

「ええ、すみません。六時までにお嬢さんを家に帰さなければならぬんです。なにぶん、今回は母親に内緒で面会に来ているものですから」

「それは、しょうがないですね、林崎さんなら終業時間になれば、すぐに帰ってくるのですが、……もう少しですよ」

「この件ですが、母親の承諾を得るまでの間、面会に来たことを誰にも秘密にしておいてもらえませんか」

「林崎さんにもですか？」

「ええ、離婚の当事者ですから、当然のことです」

「わかりました。秘密ですね」

管理人は、まるで任務を与えられたかのように、真剣なまなざしでうなずいた。

外に出ると芽衣は、やったね、と言う顔で小林を見た。

「おい、携帯電話を持っているか？」

「ありますけど、小林さんはお持ちじゃないんですか」

「通話圏外になっているんだ」

「あ、あたしも」

宮崎郡の山間部の住宅地だった。こんなこともあるかも知れない。もたもたしている芽衣を放っておいて、小林は足早にさっきの社員寮の管理人室に行き、電話でタクシーを呼んでもらった。

待っている間に、さっき調べた林崎のメールを解析していた。

「おい、そんなもの自分のパソコンにコピーしたのか？」

「はい」

「今度、こんなことをする機会があったらやめておけ。ウイルスを仕込まれたら、その日一日仕事にならなくなるぞ」

「そうですね、……でも、通信相手の女性が浮かびました。小野千尋さん、佐伯美穂さんの二人です。取引らしきものは、これは、外人の名前でしょうか、ハンニバルというのと、ユーリというのが出てきます」

「何だと？」

小林が画面をのぞき込んだ。が、いつもの芽衣のスキャンによるもので、目に見える形では表示されていなかった。芽衣は少し言い訳した。

「便利な特技だな、が、ハンニバルとはアルファベットか？」

「HNBLと続いています」

「名前と言うよりコードネームっぽいかもな。ユーリのフルネームはわかるか？」

「それが、内容からこのハンニバルと同一人物と思われます。二回、使われていて、ユーリ・サノバビッチと名乗っています」

「偽名だ」

「どうしてそうなるんですか？」

「英語のスラングからもじっている。人間心理の裏の裏だな」

「ぷっ」

芽衣は以前、小林の名前を兄貴が偽名だと、同じことを言っていたのを思い出し、面白そうに笑った。

「何が面白いんだ？」

「いえ別に」

「そのファイルに江藤真由美という名前は見つからなかったのか？」

「ありません。ですが、このパソコンが二年前から使用しているものなので、それ以前に関係が切れたのかも」

そう言っているうちにタクシーがやってきた。二人で乗り込んで、宮崎駅前に向かった。

「わたしはこれから宮崎県警本部の人間を使って捜査する。君は明日の午前中までフリーにしてていい。以上だ」

「え？ フリーと言われても」

「警察に来るか？」

「いや、いいです」

もっと、時間があれば、どこかに行きたかったが、半日だけではどうやって時間をつぶそうか迷うだけだった。

駅前で芽衣だけおろされ、小林はそのまま警察署の方向に走り去ってしまった。





(2)



## (2)

ライトを付けて走り去るタクシーを見送って、芽衣は少し立ちつくしていた。腕時計を見ると八時を少し過ぎていた。駅前にはコンビニエンスストアの明々とした照明が、芽衣の視神経をいらだたせた。

ふと、大きな鞆を持って道を歩いている、かわいらしい男の子が目についた。麻衣子の弟の翼くん。芽衣は期待半分で、彼に声を掛けてみた。

「ね！」

「あ、黒澤さんですか、何か用ですか？」

「つれないこと言わないでよ。あたしも探偵のアルバイトで疲れてるの。ジュースでも買ってよ」と子供のようなことを言った。

「コンビニエンスストアでいいですかね」

翼くんは面倒くさそうな態度で芽衣を連れて、駅前のコンビニエンスストアに入った。中身は東京にあるものと、ほとんど変わらない。少しでも地域色を出そうと、地鶏の炭火焼きなどを置いているが、全体の売り上げから見ると小さいだろう。

芽衣は紅茶のペットボトルを選んで、翼くんにもとまりついた。

「黒澤さんっていつまでいるんですか？」

いかにも邪魔そうな声で芽衣に聞いた。

「さあ、翼くんがつきあってくれるなら、いつまででもいいよ」

芽衣は、相手のことを完全に弟扱いしていた。

「……黒澤さんって、姉貴の友人ですよ、僕をからかうために何か仕組んでいるでしょう？」

「ま、疑い深いのね、姉弟仲がわるいのかな？」

「見て、わかりませんか」

「わかんない」

「姉は、昔から成績優秀で、現在は東都大生です。去年の入試はインフルエンザで欠席しましたが、あれがなければストレートで入っていたでしょう。つまり、挫折を知らない人間なんですよ」

翼くんはそう言って、近くの植え込みの柵に腰掛けた。芽衣も横にちょこんと座った。「へえ、麻衣子って挫折を知らない人間だったんだ。知らなかったわ。でも、翼くんはこれからじゃない」

芽衣は訳のわからない言い方で励ました。

「これから？　これからどんどん挫折するんですよ、きっと」

「あはは、そんな意味じゃないよお」

「こっちでどこか入れそうな大学に潜り込んで、卒業後は不動産会社に入って見習いで  
す。挫折はなさそうですが。黒澤さんの目から見てどこかに落とし穴がないですか」

翼くんは不安そうに芽衣に聞いた。芽衣は彼の瞳を見ていると胸が苦しくなり、彼の腕にしがみついた。

「将来はあの店の社長さんなんですよ。いいじゃない」

芽衣が体をぴたりとくっつけると、翼くんの鼓動が激しくなっているのが感じられた。それが、芽衣には愛おしかった。何だか翼くんが求めてきそうな気がする、と、思った瞬間、彼の携帯電話の着信メロディーが鳴り響いた。悲しげなメロディーだった。芽衣も悲しかった。

「姉からです。アルバイトが終わったので、これからこっちに来るそうです」

「へえ、やっぱり仲がいいんじゃない。どこか食事に行くの？」

「馬鹿言わないで下さい。夕方を過ぎると家までのバスがなくなるので、親父の帰りの車に乗せてもらうんです」

「ふうん、随分とやる気のないバスなのね」

「だって、他に乗客がいませんから」

「塾は同じ所？」

「まさか、姉貴が行っていたのは、東都大受験専門の高級予備校です。僕が行けるところではありません」

「ふうん、随分、卑屈なんだ」

芽衣は自分の兄が健一でよかったと思った。年齢が十歳も離れているせいもあるかも知れないが、これまで、芽衣の人間的尊厳を損なうようなことはしなかったし、他人がそう言う態度を取るのも決して許さなかった。口は悪いものの理想的な兄だった。

にもかかわらず、弟の自信をすっかり喪失させてしまうとは、悪い姉に当たったものだ、と、芽衣は翼くんを引き取りたくなかったほどだ。

十分ほどして、お父さんの車に乗って麻衣子が現れた。芽衣はお父さんにお辞儀して今朝のお礼を述べた。

「あら、芽衣ちゃん、こんな所にいたの？」

「うん、探偵業も楽じゃないよ」

「君、用は果たせたのかい？」

「ええ、まあ。でも、また謎の人物が現れちゃって、あはは」

「まあ、早く乗りなさい」

「すみませーん」

芽衣は翼くんと一緒に後部座席に乗り込み、体をくっつけて座った。

麻衣子の家で夕食を頂いた後、芽衣は彼女の部屋でおしゃべりしながらコンセントを借りてパソコンをつづいていた。今日、コピーした林崎のメールファイルだった。

「芽衣ちゃん」

急に麻衣子が語調を変えた。

「え、なあに？」

「翼とやけに仲がいいように見えるんだけど」

「別に、駅前で見かけたから声を掛けただけだよ」

そうは言ったものの、弟が女の子とつきあうことに、なぜ麻衣子がそこまで神経をとがらすのかがいまいち理解できなかった。

「あいつは、受験生なんだからね」

昨日と同じことを言った。でも、受験の邪魔になる、と、それだけが理由のように見えなかった。何か姉弟間の確執の様なもの、存在していそうな気がした。

芽衣には何となく予想はついた。翼くんがまつげも長くくりっとした瞳で女の子よりかわいらしく、姉とは対照的だ。麻衣子は成績が優秀なだけ取り柄で、真面目で堅物だ。多分、昔から、姉と弟が逆だったらよかったのにね、と言われて育ったに違いない。

それに、麻衣子なんて、いかにも取って付けたような名前だ。男の子だと思っていたら女の子だったので両親が慌てて付けた。これに対して、翼くんの名前は少しかわいい。

根拠のない推理だったが、芽衣はそんなことを妄想し、一人でやついた。こんなこと口にしたらたちまち麻衣子とは絶交になってしまうかも知れないし、今晚追い出されそうだった。

他人のメールはとにかく解りにくい。当人たちにしか通用しない隠語、略語を使うし、前後の話のつながりが、同じメールソフトを使っていたならいいが、大抵、電話の内容をメールで続けたり、携帯電話のメールの続きだったりする。

芽衣は辛抱強く、二年前からの林崎技師のやりとりを、麻衣子からもらったメモ用紙に整理していった。

元と同僚とのやりとりなどから、習志野工場では携帯電話のCPUや特注ICなどを扱っており、林崎はチームの実質的な担当者であることが解った。武田部長はこれら、いくつかのチームを統括する責任者で、対外的にはトップであるが、内部のことはほとんど林崎が取り仕切っていたようで、解任後も彼に同情的な意見が多く寄せられていた。

相手の女性の江藤真由美については、一切の記述がなかった。訴えられたのなら何か、金銭的なものに限定されるとしても交渉がありそうだった。

——弁護士に一任しているのかな？　とも思ったが、それらしい交渉は一切見あたらない。

かたや、宮崎工場はRAMやコンバータなど、汎用ICチップの専門生産工場であり、本来なら林崎の出番がなさそうなところで、実際、勤務態度も段々と悪化しており、最近では、そのパソコンから休暇願をメールで送るなどの、ふざけたまねをしているのが目立った。二年前までは会社の上司からも、色々、言ってきてはいたが、ここ半年のメールでは一方通行のメールが多く、会社からも無視されているようだ。

「芽衣ちゃん、真剣な顔してるね」

麻衣子が顔をくつつけるように芽衣のノートパソコンをのぞき込んだ。

「捜査してる人なの。普通の人だったのに、最近ものすごく怪しげになっているの」

「ふうん」

麻衣子はそう言ってため息を漏らした。芽衣は彼女の横顔を眺めた。眉と鼻は何となく、翼くんと共通するものがあった。でも、翼くんが女の子のような顔なのに対し、麻衣子は少年っぽい顔つきだ。どの部分でそうなるのか、芽衣には不思議であった。

「芽衣ちゃんのほっぺ、触っていい？」

「え、あ、うん」

麻衣子に顔をなでられ、芽衣は不思議な気分になった。どうも、さっき、翼くんに冷たい態度を取ったのは、彼女も芽衣に変な気があったのではないかと、勘ぐった。

「ひとつのファイルを分割にして売り払っているのよ、この人」

「.....え、ああ、ごめん、聞いてなかった」

麻衣子は少し慌てた表情になった。芽衣はわざと気がつかない態度を取った。

「ICチップの設計図なんだけど、いくつかに分割しているの」

「それって、全体構造を知ってないと出来ない芸当よね」

「そう思う？」

芽衣は瞳をくりりとさせて尋ねた。

「回路の重要な部分と、繰り返しが多い部分では値段が違って当然よね」

「そっか。買う人はどうだろう」

「買い取り予算に制限がないとしたら、際限なく取引できるけど、.....重要な物にお金を払い、そうでないところには出来るだけ値切るのが人間でしょ」

麻衣子は芽衣より少しだけ大人だった。

「買う人も全体像を知っていたってこと？」

「さあ、そこまで知ってたら買う必要あるのかな」

「待って、この人のノウハウを三年がかりで家庭教師して教えたとしたら？」

「ファイルは単なるテキストとでもいうの」

「そうよ、だとしたら、全部のファイルが同じ価格というのも不自然じゃないわ」

と、芽衣は結論づけてしまった。麻衣子はよくわからないという顔をしている。

(3)





### (3)

次の日、麻衣子の家族と一緒に朝食を頂いた。

「芽衣ちゃん今日はどうするの？」

と、麻衣子が聞いた。

「午前中は少し調べ物をしたいんだけど、あ、お父様の事務所に行ってもいいですか？」

「うん、いいよ」

お父さんは快く承知してくれた。

「何するのよ？」

「探偵ごっこ」

麻衣子は朝から夏期講習講師のアルバイトが入っているし、翼くんは塾である。お父さんは彼女たちを駅前まで送ったあと、自分の事務所に向かうのだ。芽衣は昨日、林崎の部屋で見つけたアオノという男のことを調べてみようと思っていた。

林崎が売却していたのが、ICチップ図面のファイルではなく、ノウハウの家庭教師だったとしたら、やはり、芽衣の目論見通り、そんなに遠いところに住んでいるわけではなく、市内局番でヒットしたあの青野稔がそうだと思った。不動産会社の事務所なら、住所地から近辺の地図が手に入るかも、と期待していたのだ。

お父さんの車に乗ったとき、麻衣子と翼くんはどちらが後部席に座るかで少しもめた。何だか、昨夜以来、二人の仲が余計に険悪そうになっていた。

「この二人は昔から喧嘩ばかりしているんですよ。はは」

お父さんは投げやりにそう言った。

最終的に麻衣子が助手席に座り、翼くんは芽衣の隣に来た。麻衣子が怖い顔でにらんだので、芽衣は思わず翼くんにしがみついた。彼もまんざらではなさそうであった、駅前に着くまで彼のきれいな横顔をながめていた。

駅前で麻衣子と翼くんをおろすと、お父さんは事務所に向かって車を走らせた。

「芽衣ちゃん、うちの息子は東京に出てもやっつけられるだろうか？」

そんなことを言った。

「やっつけられるって？」

芽衣は意味がわからず、聞き返した。

「いやさ、あいつはのんびりしているから、大都会で生きていけるか心配なんだよ」

「いやだ、東京って言っても普通ですよ、普通」

「麻衣子は見ての通りしっかりしているから、最初から安心はしていたんだけどね」

——どっちも一緒ですよ、と、思った。でも、出来れば、翼くんには来年、芽衣の近くに来てもらいたい気もした。

「翼くんも大丈夫ですよ」

芽衣は根拠のない太鼓判を押しておいた。

事務所の前で芽衣は車を降りて、お父さんと一緒に事務所に入った。彼は一番に窓を開けて換気をして、そして、エアコンのスイッチを入れた。

芽衣は昨日調べた住所のメモを渡した。

「この住所なんですけど、どこかわかりますか？」

「どれどれ」

お父さんはメモを受け取り、しげしげと眺めた。

「宮崎駅近くの繁華街だねえ、地図と照合しないとね」

「入り組んでいるんですか？」

「ははは、東京ほどじゃないよ」

そう言って、お父さんは番地の載っている地図をめくりメモにある箇所を探り当てた。

「青野さんだったね？」

「はい」

「居酒屋やバーなんかの並びだから、ここもそうかも知れないね」

これ以上は実際に見てみないと解らないと思ったので、お父さんに地図のコピーを取ってもらい、その足で駅に向かった。時計の針がすでに午前十時を過ぎ、直射日光を浴びると溶けそうになるほど暑かった。

宮崎神宮から宮崎まで一駅だけの切符を買って、列車に乗った。

——あ、シンポジウムに行かなきゃ、と本来の用事を思い出した。

東京に帰ってから何か報告しなければ叱られるという思いが頭をかすめた。小林に脅されて行動していることを、誰にも告げていなかったのも、万が一にも事故に巻き込まれたら、それこそ行方不明者になってしまうのだ。でも、言えないのが、恐喝の恐喝たるゆえんでもある。

今回の出張は半分、教室内のいざこざから当分の間だけ身を隠すという理由もあったのだから許されるのではないかと自分自身に納得させて、宮崎駅に着いてからすぐに兄の健一に電話を入れた。

「あ、お兄ちゃん？」

「何だ、もう帰りたくなったのか、まだ、そっちにいてもいいぞ」

その声を聞くと芽衣の瞳から涙が出てきた。

「あのさ、シンポジウムなんだけど」

「あれは絶対に出てこいよ。そのための出張なんだからな」

「うえーん」

「どうした、余りに詰まらなくて涙が出てくるだろう」

「そうじゃなくて、……例の不正輸出の捜査でね」

「お前、一人で動いているんじゃないだろうな？」

「ううん、助手がいるの」

「ならいいけど」

「あのね、……」

と、芽衣は小林のことは言わずに、林崎の単身赴任寮の搜索や、青野という男との関係を手短かに説明した。

「お前にしては上出来だが、この段階で林崎と青野の身柄をこの間の刑事とやりに連絡して逮捕させろ」

「え、いいの？」

「ICチップの不正輸出ではなく、設計ノウハウの漏洩なのは、多分間違いないだろう。一ヶ月前から行方不明というのは、単に足取りがつかめなくなっただけのことだ」

「でも、情報漏洩だけで逮捕できるの？」

「警察をなめちゃいけない。赤信号を渡っただけで逮捕は出来るんだぜ。林崎は脱税、青野は外為法違反で丁度いいじゃないか」

「それって、人権侵害なのでは？」

「お前の身が危ないかも知れないんだ。そのくらい構うもんか」

健一はきっぱりと割り切っていた。このくらいでないと、山本教授のお気に入りの部下にはなれないようだった。

「じゃあさ、シンポジウムは？」

「しょうがないな、パンフレットだけ送ってもらうから、それに、適当に感想文を付けて提出しろ。A4一枚でいいぞ」

「ありがとー」

とは言ったものの、出てもないシンポジウムの感想など書けそうにないと思ったが、さすがにそこまでは言い出せないでいた。

宮崎駅を出て、地図の通りに歩いて五百メートルばかり進むと目的地周辺だった。番地を頼りに歩いていくと、麻衣子のお父さんの言うとおりの、居酒屋とバーの看板が並んでいた。昼間だと、どこも閉まっていたが、青野の住所地の店は扉が半開きで、いかにも仕込み中の感じを醸し出し、人の働いている気配がした。

芽衣は外から店の電話線を確認した。光ケーブルが入っていた。

——外観は古びていて、築数年というレベルではない。

外回りの確認だけすると、おそろおそろ扉を開けて中を覗いてみた。

「すみませんお客さん、まだ、準備中なんです」

女性の咄めるような声で、思わず足が止まってしまった。カウンターの奥を見ると、芽衣より一回り年上に見える女性が、魚のわたを取っていた手を休めてこちらをにらんでいた。カウンターには、作業前に飲んだと思われるコーラの瓶とコップが放置しており、その横には海外旅行情報誌がページを開けてあった。

「あの、青野稔さんを訪ねてきたのですが、こちらでよろしかったでしょうか」

「あれ、あんた、東京の人？」

「はい、一応」

「いや、言葉が違うから、あはは」

彼女はそう言って笑った。地方の人に言葉を笑われるのは初めての経験だった。多分、麻衣子なども東京に出てきた最初のうちはおそるおそる喋っていたのかも知れない。

「あの、……」

「ああ、店長は出掛けてます。開店時間まではいつも出歩いていますけどね」

「店長だったんですか？」

そう言われて初めて店内を見渡すと、テーブルの上にはさすが逆さまになって置かれており、カウンターのガラスの中には新しそうな魚介類と地鶏肉が並んでいた。隅の冷蔵庫にはビールや日本酒が置かれている。

材料の仕込みは従業員に任せて、店長は出歩いているとなると、どこかで工作活動をしているに違いないと疑った。

「あの、アメリカに行く予定があるのですか？」

芽衣が何の気なしに聞くと、女性は一瞬手にしていた魚を取り落とした。

「べ、別に、ないわよ。どうして？」

「別に、ただ、ここに、旅行誌が置いてあったので」

「あ」

「青野さんと行くんですか？ それとも、別に行くんですか？」

芽衣が問い詰めると、女性は下を向いたが、すぐに反撃に出た。

「ちょっと、何を言うんですか。それに、まだ、準備中なんです。営業は五時からです」

「すみませんでした」

彼女は完全に芽衣を無視して、仕込み作業を続けだした。こちらを意識しているのはありありだったが、これ以上、頑なな態度を取っている人間から情報を引き出すことは出来なかった。

扉を開けて、外に出て、もう一度外壁を眺めた。

うろうろしていると、携帯電話がぶいーんと振動した。小林からだった。芽衣はすぐにバッグから取り出し耳に当てた。

「おい、どこにいるんだ？」

「すみません、青野さんの店の前です」

「随分と手回しがいいな、調べたのか？」

「はい、……自分でも色々疑問が湧いてきたので」

「それはいいことだ。俺もそこに行くから動くなよ」

「あの、ここの女性の様子が少し、……」

完全に芽衣の憶測だった。

「女性って誰だ？」

「え、と」

やはり、うまくは伝えられなかった。

十分後、小林が近くまで来た。彼は路地から手招きして、芽衣を呼んだ。

「何か分かったのか？」

「えっとですね、林崎の取引材料なのですが、I Cチップそのものではなく、製造ノウハウだったのではないかと思うんです」

「なぜそう思うんだ？」

芽衣は頭から否定されなかったことに、小さな安堵感を覚えた。

「林崎から青野に渡ったファイルは細切れのものでした。でも、金額は月に百五十万ずつ振り込まれています。CPUなどの回路は主要部分と周辺部分で、価値に差があるはずなのにおかしいです。だから、単なるテキストに過ぎず、ノウハウの家庭教師代金だと思ったんです」

「家庭教師だと、面白いことを言うな」

「だから、あの居酒屋でビールでも飲みながら、語り合っていたんじゃないですか？」

「推測の上の推測に過ぎん。飛躍しすぎだ」

「だったら、昨日仕掛けた林崎の発信器ですけど、ずっと監視してても動きはないはずですよ。みすみす取り逃がしても知りませんよ」

「生意気言うな」

そう言ったものの、小林は向こうを向いて携帯電話で連絡を取った。芽衣が聞き耳を立てていると、どうやら、林崎の社員寮前に張り込んでいる捜査員に、確認するよう命じていた。

電話による報告では今日は通常通り出勤していったらしい。

「青野さんの、経歴ですけど、……本当に昔から住んでいるんでしょうか？」

芽衣は小林が電話を切るやいなや、質問を浴びせた。

「ふむ、十年前に一度だけ交番に相談として届けられている。いなくなったんじゃないかという町内会長からのものだ。しかし、三日後に巡査が確認して無事を確認している」

「だから、その辺がおかしくないですか？」

「何がだ」

「キルヒホッフの法則って以前におっしゃいませませんでしたっけ。ある一軒の家に注目したとき、人数に変化がなければ出て行った人間と、入ってきた人間の数は等しいんですよ？」

「君、女学生の割に、恐ろしいことを言うな。エイリアンにでも取って代わられたとでも言うのか」

「誰がやったかはわかりません」

「ふむ、なぜ、そう思うんだい？」

「またも、小林は腕を組んで、考え込んだ。これもまた、頭から否定はされなかった。芽衣は何か事情があるような気がした。」

「仮に、青野さんが昔からここで営業している居酒屋さんの場合、林崎に大金を払って、ICの回路設計工学の家庭教師をしてもらう理由は何でしょう。趣味ならいいですが、そんな人はいません。産業スパイなど外部への持ち出しが目的と考えられます。更に、このICはPAC4及びPAC・NEOシステムの制御装置に使われるものです。つまり、持ち出す先は、日米両国を敵視している国家の情報部と考えるのが自然です」

「ほう、この数週間うちに、よくしゃべれるようになったね。概ね、正しいだろう。結論を言え」

「はい、ノウハウの売却先が敵国となる場合、この論理の前提である、青野さんが居酒屋さんという仮説が成り立ちません。背理法によるものです」

「ふん」

「つまり、十年前までここで営業していた青野さんと、それ以降の青野さん、更に、多分二年前と思うのですが、この作戦に荷担している青野さんは別人と思います」

「大胆すぎる推理だが、青野を産業スパイ、軍事スパイと見るのは正しいかも知れない」

(4)





(4)

小林はジャケットの内ポケットから、白い用紙を取り出した。芽衣がちらっと見たら、捜査令状だった。判事の判子まで押しているが、上半分は白紙だった。明らかに偽造の令状だった。

彼は近所の家の窓を下敷きにして、芽衣にボールペンをわたし、罪状、外為法違反、捜索場所に青野の住所地、二階も含む、と書かせた。明らかに芽衣の丸文字だったが、小林は気にしなかった。何となく芽衣も共犯になりそうな気がした。

準備が終わると、小林は青野の居酒屋に乗り込んでいった。

「警察だ。外国為替管理用違反の容疑で、捜索する。現状をそのままにしておけ」

さっきの、女従業員はおろおろしていた。

「ああ、仕込みなら続けていいぞ。君、この男を知っているね、林崎繁和、常連のはずだ」

「え、はい」

「青野と、ここで飲んでいたのか？」

「いえ、奥のテーブルでパソコンの画面を見ながらずっと仲良く喋ってました」

「店は君が一人で見てたのかい？」

「仕入れの値段交渉は主人、あ、いえ、青野がしてましたけど、中のことはわたしが仕切ってました」

「アメリカに渡る予定があるのか？」

そう言うと、女は泣きそうな顔になった。

「二年前から同棲してたんですけど、アメリカに移住して楽しく暮らそうって言われていたんです」

「この居酒屋はいつから営業している？」

「店長が二年前に始めたんです。わたしはそのとき、オープニングスタッフとして雇われ、そのままずっと勤めています」

「二階に上がらせてもらおうぞ」

小林は女の返事を聞かずに、そのまま上がり込んだ。

木造の階段を上ったところに、左右二間あり、一つは寝室のようだったが、もう一つは事務所にしているらしくパソコンが数台置いてありまるでオフィスのような間取りになっていた。その隅で男がストूलに腰掛け書類の整理をしていた。

「邪魔だったかな、青野くん」

小林が声を掛けると、男は怪訝そうに見上げた。小林は警察の身分証と令状を見せると、男の顔から血の気が引いた。手にしていたA4用紙の束の端がぶれて、ぼらぼらになった。明らかに動揺していた。

「け、警察が何の用です」

「見ての通りの捜索だよ。青野くん」

小林はわざと低い声で威圧した。

「別に脱税などしていません。調べても何も出ませんよ」

「誰も脱税とは言っていないよ。大日本エレクトロニクス技師からの情報漏洩の件だ。お前、青野と名乗り、林崎繁和から情報を引き出しているな」

「情報を引き出すのは犯罪ではありませんよ」

青野はそう、うそぶいた。

「この国ではね、だが、警察をなめない方がいいぜ」

「べ、別件逮捕にしても、わたしは何もしてないぞ！」

青野は段々と狼狽していた。警察に拘束されること自体を嫌っている、そんな雰囲気だった。芽衣は何週間か前の自分を見るようで少しかわいそうな気がした。

「お前が、別名で海外に送金した金の情報を把握している。外為法違反でしょっ引くことも出来るんだぜ」

そう言うと、青野はうつむいておとなしくなった。——どこまで知っているんです、と、つぶやいた。

芽衣が、これまでに調べたことを淡々と述べた。林崎技師に月払いで多額の金を渡し、ICチップの設計図と共に、その製作ノウハウを居酒屋で家庭教師みたいに習っていたこと。林崎はそれで離婚した奥さんへの慰謝料の支払いと、現在の愛人への手当に充てていたこと。

更に、この居酒屋が昔から営業しているにもかかわらず、青野の存在が二年前からしか感じられない、ということ。ただしこれは、直感である。

「あなたの別名って、本名なのですか？」

「ええ」

「北の工作員だったのですか？」

青野はぶるぶると首を横に振った。

「工作員なんかではありません。元は、祖国の軍隊で無線技師をしていました。ただの通信兵ではなく技術部門です。それでこのスパイのようなことに巻き込まれました。多額の報酬が保証されていたのと、日本ではスパイは死刑にはならないので、身に危険が及ぶことはないと言われたのです」

「でも、元の青野さんを消してしまったのは重罪ですよ」

「それはわたしがやったものではありません。わたしがここに来たとき、すでに、誰もおらず、そのまま店を始めるよう言われました」

「居酒屋などやったことがあったのですか？」

「ありません。ですが、求人を出すと、安くて能力のあるスタッフが来てくれました。下にいる女性がその一人です」

「彼女とは深い仲なのですね」

芽衣が何気なく質問すると、青野は深刻な顔になった。彼女に被害を及ぼさないように、言葉を選んでいる、と、そんな気がした。それだけ、愛していると言うことだ。

「いつまでも、こんなことをしていられない。アメリカに亡命して彼女と暮らすことを真剣に考えていました」

「おい、何か具体的な行動は取ったのか？」小林が問い詰めた。

「え、あ、はい、東京のアメリカ大使館に何度か手紙を書きました」

芽衣は、小林の顔をみた。

「返事は？」

「今のところありません」

「わかった、大使館で保護するよう要請する。証拠の書類やICチップなどをまとめて荷造りしておけ」

「刑事さんで大丈夫なんですか？」

「俺が言うんだから間違いない」

小林は胸を張った。

芽衣はあっちに行ってしまうとは、事の真相がうやむやになると思い質問を続けた。

「あなたの本名は」

「キム・ヨンイプです」

「あなたへの命令は誰からなされていたんですか？」

「直接は不明です。日本ではメールでなされていました。サインにはハン・ジョンナムとありました」

「ハンニバルというのは誰だ？」

小林が口を挟んだ。

「わかりません。ときどき、メールの中に出てくる名前です。ただ、わたしの想像ですが、ハン・ジョンナムと同一人物の様な気がします」

「理由は？」

「メールの文章が似ているのと、考え方が終始一貫しています」

「話を元に戻します。林崎技師に近づいた、江藤真由美さん、それからこちらで愛人関係にある佐伯美穂、小野千尋ですが、あなたは知っていますね？」

「最初の一人は、わたしは聞いたこともありません。後の二人は林崎に協力させるために使ったと、上司から聞いています」

「江藤さんがどうなったのか、……」

「おい、もういい」

「でも」

小林は強引に芽衣の尋問を打ち切ってしまった。

ここから、林崎を張り込んでいる警官に連絡を入れて彼を、逮捕するよう指示し、青

野には、大使館で保護するために、これから東京に移動することを伝えた。

しかし、青野は少しおびえていた。彼に命令を下していた上司の顔もしらないし、彼の周りには他にもスタッフがいて、こうした裏切りを見張っているかも知れない。そうなったら、いつ命を狙われるか知れなかった。

大胆なスパイの割に、小心者だった。

芽衣は彼書類と、パソコンのファイルからPAC・NEOシステムの全体構想から、CPUの回路図まで入った図面があるのを確認した。PAC4に関しては二年前に国外に流出しており敵国がすでに利用していることもうかがわせていた。

小林は憂鬱な顔で、芽衣に向かってこれらのファイルにパスワード付きのロックを掛けるよう命じた。

「〇五〇八にしますね」

「何の番号だ？」

「あたしの誕生日ですよ」

「ふん、もっと覚えやすいものにしろ。まあ、いい」

「いいんですか？」

芽衣は嬉しそうに笑った。

芽衣と小林が店を出てしばらくすると、宮崎県警の私服捜査官が段ボールを抱えて店に入り、二階からパソコンやハードディスク、書類の束を押収してバンに積み込んで出て行った。警視庁の要請で動いているので、後から東京に送ってくれる、と小林が言った。

## 6. クルーズ



## 6. クルーズ





(1)



## (1)

小林の指示により、芽衣は明日、宮崎を発つことになった。  
夕方、麻衣子の家に戻ると、またまた、皆で歓待してくれた。

嬉しそうなお父さんとお母さんの顔を見ていると、どうやら、麻衣子の誕生日の様だった。八月十二日が彼女の誕生日であることを芽衣はすっかり忘れていた。

芽衣の誕生日の時は、まだ、麻衣子と知り合って日が浅かったので、特に何もせず、高校時代からの友人とケーキを食べに行っただけだ。

「おめでとう、麻衣子」

「ありがとう」

彼女は終始素っ気ない態度だった。芽衣は横にいた翼くんを見たが、彼ももくもくとお造りを食べていた。仲の悪い姉弟だった。

「あ、二十歳になったら、ビールを飲んでもいいんだよね？」

「飲まない」

「あら、そうなの」

両親は無愛想な娘ですみませんねえ、と言う顔をして、芽衣を見た。

「芽衣ちゃんは明日、東京に帰るの？」

と、お母さんが聞いた。

「はい、長い間お世話になりました。シンポジウムも終わったものですから」

「あら、遊びに来ていたんじゃないの、あはは」

実際、シンポジウムなどには一回も行かなかったが、この母親にも遊んでいると思われていたようだった。

「いや、そんなことはないですよ。えへへ」

「翼は来年、宮崎の大学を受けるのよ」

「へえ、東京には来ないんですか？」

「この子はのんびりしているから、都会は無理よ」

お母さんはそんなことを言った。

「そんなことはないですよ」

「そう？　じゃあ、芽衣ちゃんに面倒見てもらおうかしら、ねえ、翼。東京の大学も受けてみる？」

そう言って翼くんを見た。芽衣もそれがいいかなと少しだけ考えたが、麻衣子を見ると怖い顔をしていた。

食事の後、麻衣子の部屋で怒られた。

「翼には、いい顔しないでくれる？」

「ど、どうして」

「あの子が、芽衣にちやほやされて、にやついているのを見るとムカッとするのよ」

「ど、そうして、そんなに仲が悪いのよ？」

「別に、理由なんてないわ。昔からそうなのよ」

芽衣は翼くんのことを、弟みたいに思っていたが、麻衣子を敵に回すことと、心の中で天秤に掛けた。

「わかったわ。麻衣子の言うとおりにする」

「うれしい」

彼女は単純に喜んだ。成績はいいくせに、どこか歪んだところが見え隠れしていたが、やはり、その答えは故郷にあったようだった。容姿にコンプレックスを抱いていて、それを自分でカバーするために色んなことを頑張ってきたのだ。それを、見てくれがいいだけの理由でたやすく乗り越えることができる弟が許せない、らしかった。

麻衣子は、その後芽衣にべたべたくっついてきたが、敢えて何も指摘はしなかった。また、十月になり大学の講義がはじまれば元通りになるのだ。余計な一言で波風を立てることもあるまいと思った。

——でも、学部が違うから、共通の講義も来年で減ってしまうな、と少しだけ気がかりだった。

翌朝、いつも通り、家族が顔を合わせて仲良く朝食を取り、芽衣はお別れの挨拶を告げた。お母さんはいつの間にか土産物を用意してくれていた。芽衣は恐縮しながらも、ありがたく受け取った。

「日持ちするものばかりだから、慌てて食べなくていいからね」

「ありがとうございます」

「じゃあ、翼が受験の時はよろしくね」

「おまかせください」

と、麻衣子がこっちを向いていないときに、答えた。

今日は宮崎駅前で、麻衣子たちとも、お父さんとも別れた。ほんの数日だったが、麻衣子のお父さんは娘を嫁に出すかのような顔だった。芽衣も心からお礼を述べた。

少しして、二台の黒塗りのバンがやってきた。後ろの一台から、小林と二人の背広姿の捜査員、そして、青野の姿が見えた。もう一台にも数人の捜査員が乗っていると思われた。

「小林さん、おはようございます」

「おう、これから、フェリーで川崎港に向かうぞ」

「はあ？」

「青野が命を狙われる可能性がある。一台はダミーで高速道路で東京に向かってもらう。われわれは、県警から二名の護衛をつけてもらって、フェリーで向かう」

「そんなに危険なんですか？ それに、飛行機は使わないんですか？」

芽衣は内心、飛行機を期待していた。

「今回のスパイ事件は、PAC4システムのノウハウに起因している。万が一、飛行機が撃墜されたら、恥もいところだ。だから、絶対に使わない」

「ああ、そうですか」

面子のために時間の掛かる船を使うことに、抵抗を感じていたが、文句は言えなかった。

先に捜査員だけ乗せたダミーのバンが、駅前を出発したのを見送り、小林は芽衣を二台目のバンに乗せて、港に向かった。

栈橋には、フェリー待ちのトラックや乗用車がすでにたくさん待っていた。小林に聞くと、午前十時半に乗車で、まだ少し時間があると言っていた。しかし、捜査員の一名はフェリーの乗降口前に立ち、不審な自動車が入り込まないか、ちゃんと見張っていた。

まもなくすると、フェリー川崎航路の「トロピカル・マンゴー」五千六百トンの大きな船体が現れた。エンジン出力を落とし、スラスターだけで位置を微調整している。

芽衣にとっては大きな船だが、実際には大きなく、言うほどの規模のものでもない。それに、この航路は、景気のいいときには運行しているが、不景気になると廃止になると言う、宮崎と関東を結ぶ大動脈の割に、よく止まっていた。この船もこの三月から営業されたばかりのものだった。

三十分かかって、栈橋に接岸した。

その後、川崎から乗ってきた自動車が、乗降口からドンドン下りていった。

「おい、バンに乗れ」

小林は芽衣に指示した。

芽衣の乗ったバンは捜査員の運転でフェリーの乗降口から入り、自動車デッキで車輪止めを掛けられ、長い航海の安全に備えた。

「乗っててもいいんですか？」

「駄目に決まっている。青野とお前は別に一等船室を取ってある。ゆっくりしてていい」

自動車デッキから船室に上がり、部屋を確かめた後、芽衣は船内の探検に出掛けた。廊下は窓で覆われ、海の暴風から中の絨毯を守るようになっている。外の海風に当たるのが出来るのは、後部デッキだけだった。

芽衣は食堂の入り口で食券を買い、焼きそばを注文した。

一人でもぐもぐ食べていると、小林に見つかった。

「今のところ、不審者情報は入っていない。洋上に出れば完全に密室状態になる」

「じゃあそれが終わるまで、うどんも食べられないんですね？」

「ふん、カレーライスくらいなら食えるさ」

小林は食券を買いカウンターに行き、カレーの入った食器と、スプーンを乗せたトレイをもち、芽衣の隣に座った。

「小林さんて、左利きなんですね」

「ああ、色々便利だぜ」

「便利？ 例えば？」

「右バッターに対して投げるときとかな」

「野球をされるんですか？」

「冗談だよ、あ、乗降時間が終わる。連絡時間だ」

乗降口で見張りをしていた捜査員から、異常なしの報告が入り、小林はひとまず安心した。これで川崎まではほぼ密室状態になる。一等船室に捜査員という青野に危害を及ぼすものはいないだろう。

まもなく出航時間になり、港湾作業員が舳網《もやいづな》を外して回っていた。船のエンジンは回転数を上げて、サイドスラスタを全開にして、横から渦を作って推力を作り出し、徐々に離岸していった。数十メートル岸壁から離れると、「トロピカル・マングロー」は向きを変え、港出口に向かって静かに前進していった。

芽衣の船室も取ってくれていたが、この先、二十時間もある。今日の午前十時半にこちらを出航し、川崎港に着くのは明日の午後五時過ぎになる予定だった。最初のうち、うろろうろしていたがそれもやがて飽きてしまった。

食堂でうどんを食べたり、焼きそばを食べたりとそんなことばかりしていたが、大切なことを忘れていた。

小林の姿は青野の側にはなく、後部デッキだった。そこでぼんやりと海風に当たっていた。

芽衣は小林が手すりに腰を掛けて、考え事をしている横にちょこんと、割り込んだ。

「何か用か？」

「えっと、最初に小林さんが、大学に見えたとき、技術者が一人行方不明になったとおっしゃいましたね。今回の事件で片付いたんでしょうか？」

「片付いたと言えば、片付いたと言えるし、まだ、見つかっていないと言えば、それも、その通りだ」

「え、見つかっていない？ それでも、片付いたんですか？」

「ふん、気づいていないようだが、その技師とは林崎だ。一ヶ月前に一度姿をくらまし、そのまま連れ去られたのか、消されたのかは判らない。だが、昨日逮捕した林崎は偽物

だった」

「ええ？ 彼には奥さんもいるし、子供も、そして、寮の管理人や会社の上司もいるんですよね」

「ああ」

「じゃあどうして、誰かが入れ替わるなんてことが出来るはずがあるんですか？」

「今回のタイミングは彼がこっちの工場内で配置転換になったときに巧妙に行われた。誰も彼の顔を知らない状況だ。妻も娘も面会を拒否しているし、会社は武田部長なら知っていそうなものだが、宮崎工場で、左遷組、更に、こちらでも役に立たず、あちこち、配置転換を繰り返している。人間的つながりはもはや誰とも切れている」

「青野さんなら」

「よせ、もう青野はアメリカに亡命する身だ」

「じゃあ、警察は林崎の身元を追わないんですか？」

「もう、その必要もない。今いる林崎がどっちでもいいんだ。彼を別件逮捕したと言うことで、北へのメッセージは十分だ」

「冷たいんだ」

「たこ焼きでも食うか？」

「え、本当？」

芽衣も少し現金なところがあった。

食堂でたこ焼きを買ってもらい、ほくほくと食べていた。デッキに吹き渡る太平洋の風が心地良かった。

「少し気がかりなんですけど、……林崎の愛人たちのことです」

「ふん、ハンニバルが雇っていたんだらう。多分、口座を調べたら裏が取れるはずだ」

「あの二人だけでしょうか？」

「何が言いたい」

「ほら、青野の居酒屋で熱心に働いていた女性。アメリカに行きたいと言っていました」

「彼女もハンニバルに金で雇われたとでも言うのか？」

確かに彼女までは少し疑いすぎという気もしないでもなかった。彼女は青野を愛していたし、青野も彼女を愛していた風に見えた。だが、そこに彼女のつけている隙があったとも言うことが出来る。

「あの、県警の方を使って、あの店が今日も営業されているか、確認してください」

芽衣がそう言うと、小林は面倒そうな顔でそれを却下した。

「彼女は青野がアメリカ大使館に受け入れられた後で、渡米することになっていた」

「でも、……」

いやがる小林を尻目に、芽衣は携帯電話で麻衣子のお父さんの事務所に電話して、青野の居酒屋がどうなったかを確認してもらうことにした。

「どうも、最後まで恐れ入りますです」

芽衣は恐る恐る頼んでみたら、仕事のついでに寄ってくれると言ってくれた。でも、ついでというのは芽衣を気遣ってのことで、実際にはわざわざ時間を割いてくれるのだろうと言うことは、鈍感な芽衣にも察しはついていた。

段々と海岸から遠ざかると、携帯電話はどこかの中継基地を経由してつながるから、

接続が悪くなる。何度か、芽衣の着信音が鳴りかけては止まった。

「もしもし、……芽衣ですが」

「ああ、やっとながった」

麻衣子のお父さんだった。

「すみません、わざわざ」

「例の居酒屋さんだけど、シャッターが閉まったままで、貼り紙がしてあった」

「貼り紙ですか？」

「都合により閉店します、長年のご愛顧、うんぬん、と書いてある」

「え、あの、その従業員の女性の行方はわかりませんか？」

「近所の人にも聞いたんだが、朝、自転車で通勤するところを見た人がいるんだけど、その先はよくわからないそうだ」

「そうですか、……どうもありがとうございました」

「何か力になれなかったみたいだね」

「そんなことないですよ、そんなことないです、……」

芽衣は力なくつぶやいて電話を切った。

小林はすでに、どこかに行っていた。

彼女までどこかに連れ去られた可能性があった。青野を今日、東京へ連れて行くことは、県警の捜査員の他には、彼女しか知らなかった。芽衣は小林に知らせなければならぬと、早足でデッキから客室フロアに駆け込んだ。多分、自分の船室にいるはずだと思った。

彼の船室は青野のいるところと同じ通りの端にあった。何かあったときに護衛の捜査員を後ろから援護するためだ。

芽衣は人が見ていないのを確かめてから、小林の部屋の扉を軽くノックした。しばらくして、ずっと扉が開き、小林が顔を出して芽衣の顔を確認した。

「何の用だ？」

「あの、居酒屋の女性店員の行方が朝から判らなくなっているそうです」

「休みじゃないのか？」

「え？」

「青野が退職金を払ってしばらく、田舎で過ごすことになっている。彼が落ち着いてからアメリカに呼び寄せることで話がついているぞ」

「うそ。店には貼り紙がしてあって、女性は朝、自転車で通勤してきたのを最後に消えたそうです」

「誰がそんなことを言っている？」

「知人に、店の前を見てきてもらったんです。都合により閉店しますって、だから」

「青野との打ち合わせと違うな。何もせずに夜逃げすることにしたのに」

「だから、ハンニバルの偽装工作じゃないですか？　彼女が連れ去られ、あの店で何かあったように見せかけるための」

「嫌なことを言うな。待て、少し確かめてみる」



さすがの小林も嫌な顔をしている。もう、この作戦も、この船が川崎港に着いて、青野を赤坂のアメリカ大使館に届けたらそれで終わりなのだ。ここにきて、ハンニバルの妨害工作など認めない態度だった。

携帯電話を使おうとしたが、洋上ではつながりが悪く、船内電話を使った。

「こちら、第二班指揮、第一班の状況を連絡せよ」

「第二班指揮、こちら県警作戦班。第一班とは三十分前に定時報告があったきり連絡が途絶しています」

「道路情報に何かないか？」

「現在、九州自動車道エビノジャンクションから上り十キロの地点で、大型トラックと乗用車の多重衝突事故があり、事故渋滞が五キロほど出来ています」

「おいおい、巻き込まれたんじゃないだろうな」

「すみません、県外なもので、わかり次第報告します」

「ご苦労さん」

小林は更に電話を掛けた。芽衣が聞き耳を立てていると、どうやら、日豊本線でも捜査員が乗り込んでいたようだった。

「小林さん、ダミーって一体何人いるんですか？」

「情報の重要性に鑑みというところだな、ハンニバルはどう動くと思う？」

「もうっ、青野さんの奪還が第一目標でしょう。難しければ、抹殺ですか？」

「成長してくれて嬉しいよ。理由を述べたまえ」

「元々、青野さんがスパイをしていたのは、PAC4システムのノウハウを得るためでした。多額の費用を掛けていると思われるので、一種の投資です。だから、奪還しないと無駄になってしまいます。でも、このことが明るみに出ると、国際的非難を浴びることになり、青野さんはもとよりハンニバルの身の上が危なくなります。だから、そんな危険を冒すより口を封じると思ったんです」

「なるほど、俺の若いときのようなことを言うんだね」

小林は芽衣の意見を軽く笑った。芽衣はムカッとした。

捜査員の一人が、小林の部屋に入ってきた。大きな無線機を片手に持っていた。

「小林さん、作戦本部から連絡がありました。第一班の車両がトラックに追突されて大破です。けが人が出ています」

「やけに、簡単に大破したんだな、防弾車両が泣くぞ」

「面目ありません。青野をこちらで輸送したのが正解でした」

彼は悔しさを隠せない表情をしていたが、やはり、県警捜査員としての面子があり、警視庁の小林の任務を果たすことに意識を集中していたようだ。

「護衛を一名残して、もう一人は船内、車庫スペースの不審者、不審物の搜索に当たれ」

「了解しました」

捜査員が出て行くと、小林は芽衣の方を向いた。

「敵が県警のバンを狙って、わざとトラックを追突させたんだ」

「どうして？」

「第一班のバンは外から中が見えないから、奪還より抹殺を選んだんだろう。列車は中から近づけば、本物の青野かどうかわかるから、多分何も起こらない。飛行機は撃墜される可能性があるから今回はわざと敵に知らせて条件から外した。被害が大きすぎるからな」

「じゃ、じゃあ、最初から情報が漏れることを前提に輸送計画を立てたんですか？」

「いちいち、驚いたような声を出すな。本来の目的を考えろ。青野の身柄を守るのは何のためだ？ 敵国に対し、スパイの証拠を握っていると誇示するためだ」

それで、小林は青野を確保した後は、特にIC情報について尋問することもなく、更に、林崎のことについても無関心だったと、芽衣は納得した。だとしたら、後はこの「トロピカル・マンゴー」号の航海の安全を祈るのみだった。

太平洋を見渡す限り、船は安全に思えた。外から敵が入ってくることもないし、近づいてくればすぐにわかる。また、近づいたとしても、デッキは海面から二十メートル以上あるし上がってくることは出来ないだろう。

(2)



## (2)

芽衣にも船室が一つ用意されていたが、相変わらず暇だった。捜査員には護衛の任務があり、常時船内を見回っているが、芽衣は単なる小林の助手であり、三時間もすると船室にいるのも苦痛になり、フェリー後部のデッキで海風に当たっていた。航跡が船体の斜め後部に広がっているのを見ていると、段々と船酔いに似た感覚に襲われた。

芽衣は思わず我に返り、空を眺めた。日が高いと思っても、八月半ばになると、少し秋の気配を感じてしまう。どんなに暑くても。

ふ、と、元の任務を思い出した。小林は小林なりに答えを見つけ出して、そこに導いていっているように思うが、芽衣は最初から只のつかいっぱに徹しており、自分の考えでは何もしていないと言える。

事の起ころは、もちろん、小林が研究室の山本教授を訪れたことにあるのだが、あくまで、大学と大日本エレクトロニクスが共同研究を行っていた、PAC・NEOシステムの情報漏洩の調査だったのだ。

もっとも、その点については、大日本エレクトロニクス習志野工場を左遷された林崎技師の単独犯行と言えるのだが、彼を左遷に陥れた、江藤真由美なる人物の行方もわかっていない。更に、小林の情報では、逮捕した林崎も本物ではないと言っていた。

「回路中の一点に注目したとき、入ってくる電流と、出て行く電流の合計は零である」

芽衣は、いきなり小林にキルヒホッフの法則について聞かれてとっさにこれを口について出したのだ。

今回、大日本エレクトロニクスといい、青野の居酒屋といい、見事にこの法則通りで、小林は正確にこの中に入ってきた電流を検出していったと言えるだろう。

でも、何のためにこんなまどろっこしい真似をしているんだろうと、夕日を見ながら考え込んだ。アメリカや日本に配備されているPAC4システムが、よほど邪魔になり、これを無力化しようという国なら、気持ちは分かるが、しかし、今回のようにばれてしまったら、逆効果なのだ。却って外交問題に発展して、関係はこじれ、下手をすると経済制裁にもなりかねない。そろばん勘定だけで行くと、敵のこの作戦は間違っていた。

芽衣がぼんやりと海を眺めて考え事にふけっていると、小林が夕食に誘ってくれた。多分もう最後の食事だと思っているのかも知れなかった。

「腹が減っているだろう？」

もう少し、大人の女性扱いして欲しかったところだが、贅沢は言えない身分だった。

「ええ、まあ」

「何か悩んでいる顔だな、どうしたんだ？」

「ええ、まあ、今回の事件なんですけど、……何だか腑に落ちなくて」

「どこが？ 単純明快だぞ」

「アメリカが日本に配備した防衛システムの機密が敵国に漏れて、その事件の証拠を押さえたんですよ」

「そうだよ」

「敵国にとっては、機密を握ろうが、握れまいが、日米両国から経済制裁を受けてしまいます。どちらにしても、利益はなさそうに思うんです。もっとも、日本やアメリカに大打撃を与える核ミサイルを保有しているなら話は別ですが」

「考える必要はないよ」

「え？」

「情報を上げて警告するまでが、俺たちの仕事だ。それを利用するも、ゴミ箱に放り込むのも政治家の仕事なんだ。後は任せよう、俺たちが選んだ代表なんだから」

「それが、民主主義なんですか？」

ある意味恐ろしい選択とも取れた。

「考えなくていい。食事に行こう」

小林は自分に言い聞かせるように、芽衣をエスコートしてフェリーの食堂に行った。

珍しく、小林が芽衣の分まで食券を買ってくれた。

「唐揚げ定食でよかったかな？」

「はい！」

芽衣は元気よく返事した。小林は食欲がないのか、うどん定食にしたが、なぜか箸の代わりにプラスチック製のフォークを付けてもらっていた。カップ麺みたいだった。小林はそのフォークでうどんを器用に食べていた。芽衣はそれを目の前で眺めていたが、左利きの人と面と向かうと鏡を見ているようで、自分の調子まで狂ってしまう。

そんな思いを振り払って、唐揚げをお箸でつまんで口に入れた。

小林の食べ方は、やっぱり変だったが、スピードは刑事のものだった。芽衣がご飯を四分の一も食べ終わらないうちに、もうお茶を飲んでいる。彼も芽衣の食べる姿を興味深げに見ていた。

「何ですか？」

「別に」

小林は何も言わなかった。

「あの？」

芽衣はここ数日気にしていたことを口にした。

「何だよ？」

「青野さんを大使館に届けたら、この事件は解決なんですか？」

「俺たちの仕事は終わりだ。後は政府が何とかする、と信じている」

青野がアメリカに亡命して、どこかは知らないが、彼の祖国がP A C 4システムのスパイを行ったという事実を公表して、日米共同で経済的圧力を加えるのだろう。それはそれで、一つの解決といえた。

「もう一つの解決なんですけど、……」

「お前のことか？」

「もちろんです。でなければ、あたしはこんなことにつきあたりしません。それに、あまりお役に立てなかったと思うのですが」

「最初に言った通りだ。君の助言がなければ、捜査はもっと日数を消費していただろう。その間、ハンニバルたちの暗躍を許していたことになる。君の働きはもっと、評価してもいいと思う。それから、補導の件だが、後でデータを抹消してやる」

「絶対ですよ」

芽衣は念を押した。

デッキでたたずんでいると、日が暮れて海面は月明かりに照らされるようになった。都会で見るとより遙かに星がきれいだった。しかし、芽衣が気にしていたのは、携帯電話の電波強度だった。時折、アンテナマークが出ることもあるが、余り、長い時間点灯しなかった。

海上では、島嶼部や船舶を中継して電波を送り届けてくれるのだが、太平洋を通る航路ではときどき、電波の入りが悪い地点がある。フェリーには衛星アンテナがあり、陸上との通信が途絶えるわけではなかったが、携帯電話に慣れた芽衣にとっては不便を感じる場所ではあった。

小林と捜査員とは最初から無線機を使っていた。芽衣は不思議に思っていたが、この場になって、理由が分かった。電話機は目の前の相手でも一旦、交換機を通さなければならぬが、無線機はそんな必要がない。

芽衣は最初に兄からもらった、調査費用の五千ドルに手を付けていないのを思い出し、この事件が終わったら遊び倒そうと、海を見て考えていた。





(3)



### (3)

ふと、水平線上に、ちらと、光るものを見つけた。

よく見ると、月明かりにかすかに物体の影が見える。芽衣は慌てて、船室にいる小林を呼びに行った。

「小林さん！」

名前を呼んで、どんとドアをたたいた。

「何だよ？」

機嫌が悪そうだった。確かに緊張感を朝から維持し続けていたのだ、優しい返事を期待した方が間違いだった。

「このフェリーの右側の遠くに、何かがいます」

「漁船じゃないのか？」

小林は本気にしなかった。

「でも、……」

「わかった、ブリッジのレーダーで確認する。ついてこい」

小林は船室を出ると、廊下を早足に歩いた。午後八時になり、廊下や自販機の前にも客はまばらになっていた。廊下の端に着くと、彼は行き止まりにある扉のレバーに手を掛けギギッと押し開けた。関係者以外立ち入り禁止の区域であり、そこから先は内装も照明も旅客用区画とは違っていた。

配管やケーブルが見える形についていて、その雰囲気には芽衣は入りづらいものを感じていた。黄色と黒の塗装は自ずから、潜在意識に警戒心を起こさせる。そういった、模様で色取られた領域であった。

絨毯の敷かれていない階段を小林が先に立ち上がっていった。芽衣は転びそうになりながらバッグを押さえてついて行く。

「小林さん、慣れているんですか？」

「無駄口をたたくな」

「はい」

カンカン、カンという二人の靴音が響いた。

最上階はブリッジだった。三人の運行スタッフがいた。

「警視庁の小林と言います。右舷に不審な船影があるので、捜査のためご協力願います」

小林が一気に喋ると、船長は不審そうな顔で咎めた。

「何事ですか？」

「レーダー画面を確認します」

小林が身分証を掲示しながら、舵の横にあるレーダースクリーンをのぞき込んだ。夜

間は外が見やすいように中の照明は落とされていて、レーダー画面の光も漏れないように覆いがつけられている。芽衣は小林と顔をくっつけながらのぞき込んだ。

フェリーを中心として、数十キロの海上の状態が示されていた。芽衣には島影と船影の区別もつかない。

「映っているが小さいぞ、船長」

小林が警告した。

「そうですね」

彼も双眼鏡で右舷を見渡した。

レーダーには小型の船舶は映らないことがあるので、危険防止のために、反射器と呼ばれるレーダー電波を跳ね返す器具を取り付けることになっている。目で見えるのに、小さくしか映らないのは、故意に反射器が付けられていない可能性がある、と小林が芽衣に説明した。

訳の分かっていない芽衣は危機感だけをつのらせた。

「船長、フェリーの照明を全部点灯してくれ、それから、通信士は相手に呼びかけろ」

「わかりました。君、相手の船籍と船名を問い合わせしてくれ」

一人が電気パネルに走り、前方と後方デッキの照明スイッチを全部入れた。ガチャンとリレーの音が鳴り響き、一斉に明りが灯った。イルミネーションみたいだった。

——こちら、トロピカル・マンゴー、貴船の船籍と船名を教えてください。

航海士が何度も英語で呼びかけたが、全く無視されていた。

「おいおい、小型船だからと言って無線機を積んでいないのではあるまいな？」

小林が皮肉を言った。

「周波数を変えます」

航海士は無線機のパネルを操作して表示を切り替えた。

ガガッという音の間に人の声が聞こえた様な気がした。芽衣が小林の顔を見ると何か気づいたような雰囲気だった。

「よし、奴らは無線機を使っている。ただし、船舶と工作人員の間でだ。船長、来てくれ」

小林は船長と、芽衣をレーダーの周りに招いた。

「このスクリーンを見る限り、この不審船はこのフェリーと並行しながら近寄ってきている。こちらの船速は？」

「最大十八ノットですが、現在は巡航速度の十五ノットです。三十分くらいで接近可能です」

「これまでの例から言うと、二〇ミリ機関砲とロケット砲を使う可能性がある。逃げ切れるか？」

「無理です、海上保安庁に救助要請を出しましょう」

「駄目だ、間に合わない」

「不審船は小さいと言ってもそんなに小さくありません。こちらに飛び移るか、あるいは、ゴムボートで接近して飛び移るかしても、こちらの船速が十八ノットなら乗り移る

のは不可能でしょう」と、航海士。

「でも、乗客に万が一のことがあったら誰が責任を取るんです？」

船長だけが、徹底抗戦を否定した。彼の立場だったら船に傷を付けただけでも責任を取らされるのだ。

「では仮に、停船して乗り込まれた場合を考えよう」

「小林さん、最大船速なら今敵がいる、右舷からの乗船しか考えられませんが、停船してしまうと、攻撃が左右に分かれる可能性があります」

「だから？」

「捜査員の一名を左舷に回し、一人を、乗船しやすそうな前部デッキの入り口の守備、小林さんは青野さんの警護がいいと思います」

「ふん、甘いな、犯人はゴムボートでやってきて鉤付きの縄ばしごでコマンド部隊が乗り込んでくる。ゴムボートの見張りに一人いるから、戦力は武装兵三名だ。それを右舷でまとめて集中砲火を浴びせる」

「あの、青野さんは？」

「第二護送車に移しておけ、それから、俺に万が一の時にはお前が運転して赤坂までデリバリーしてくれ」

小林はデリバリーという言葉を選んで使った。まるでピザの宅配のようなニュアンスだ。

芽衣は一呼吸してから、青野の船室に行き、寝ていたが叩き起こして、自動車デッキの第二護送車に乗せてロックしておいた。ライフル弾は防ぐことが出来るはずだった。

ここまでの準備をして、小林は態勢を確認するために、ブリッジに戻った。フェリーの速度は十八ノットに増速されていた。近づいてくる不審船とも距離を取るように、船長が舵捌きで一定の間隔を保っていた。

段々と彼らもじれてきたのか武装した不審船はどんどんと、接近してきた。ブリッジの無線機に、——停戦せよ。と言う音声が響いた。

船長は小林を見た。

「何だよ、無線機も英語も通じるんじゃないか。停船するなよ」

「最大船速維持、十八ノット」と、船長が切り返す。

平和な駆け引きはそこまでだった。

フェリーが止まる気配を見せないでいると、今度は、不審船からぱぱん、という乾いた発射音がして、ブリッジの目の前を閃光がよぎった。

「二〇ミリ機関砲だ」

小林がつぶやいた。

船長が、小林の意志を確認した。彼は首を横に振った。  
「十八ノット維持します」  
舵を握る手が震えていた。

フェリーの右舷七十メートルに近づいてきた黒い不審船は芽衣の目から見ても大きかった。全長は三十メートルほどで、中央にブリッジがありその前に三連装機関砲が据え付けてあった。さっきの砲声はここからだと思われた。船上には十人ほどの、黒い服装の男が乗っていた。皆が手に手に自動小銃らしき、黒い銃身を光らせていた。  
フェリーに接近するためのゴムボートに船外機を付けて、四人が乗り込んでいた。

小林が予想した通りの展開で、ゴムボートには四人の武装兵が乗り込み、エンジンを掛けてフェリー右舷前方に近づいてきて、接触すると、鉤付きの縄ばしごを舷側に引っ掛けた。重武装にもかかわらず、身軽なこなしはただの海賊ではないことを窺わせていた。

「おい、お前は防弾ジャケットを着て、ブリッジに隠れている」  
「え？」

芽衣は急な展開におたおたするばかりだった。  
「それから、俺一人では防ぎきれないかも知れないから、武装船がさらに発砲したら、騎兵隊を呼んでやる。この無線機をお前に渡しておく。赤いボタンを押して高いところにいろ」  
「騎兵隊って、お馬さんに乗ってやってくる、あれですか？」  
「馬鹿、映画を見ないのか？ 最後の救助という意味だ」

そう言われ、芽衣は宮崎県警のロゴ入りのジャケットを着せられ、小林は捜査員二人を指揮して前部デッキ入り口を守るために下に下りていった。

船の舳先は波を蹴立てて進んでいく。ドアが開いてデッキからの風が通じると、十八ノットのものすごい風圧を感じた。それだけに、このスピードで乗り移ってくる敵の作員の熟練振りに鳥肌の立つ思いがする。

芽衣だけブリッジに残されて、何だか余計に不安になってきた。  
船長は黙って、舵を握りしめていた。小林の指示がなければどっちにも切れないのだ。  
「船長さん、あの武装船って最初から後を付けていたんですか？」  
「ごめんね、気がつかなかった」

これで、高速道路で事故を起こした第一班の四名、鉄道での囚役の三名そしてフェリー移動の四名が宮崎駅前から付けられていたことになる。ハンニバルが青野を監視していたのなら、警察に駆け込んだ時点で消そうとやっきになるのは判るが、このスパイ事件を公表されるのがそんなに困るのだろうか、と、疑問に思った。

実際には青野だって、ハンニバルの正体がハン・ジョンナムという名前らしいと言うことしか知らず、頭から否定することも出来たはずだ。太平洋を航行中のフェリーを停船させてまで青野を連れ去ろうなんて考えるのはまともじゃない。

「船長さん、前部デッキの照明を落としてください」

「え、いいんですか？」

「味方の援護です、構造が頭に入っている捜査員の方が有利になります」

芽衣はそれだけ指示して自分もタラップを下り、小林のいるところに近づいた。

小林は左手で拳銃を構えて、構造物の影に隠れていた。

芽衣は見つかってしまうと、反対の手で地面に押さえつけられた。

「なぜ来たんだ。伏せてろ」

「一人だけで防げるんですか？」

——ただの海賊ではなく、組織された兵士なら先頭の一人が被弾すれば後続のメンバーが援護、救助に入る。と小林が小声でつぶやいた。つまり、先頭の一人だけを狙うつもりらしかった。

そうしている間にも、鉤は揺れて、武装兵が一人、小銃を担いで上がってきた。まず、ゴーグルを付けた顔だけ出すとひょいと舷側を乗り越えて、半身でデッキに降り立った。

その瞬間、小林は中腰のまま拳銃を構えて、武装兵が背中の小銃を前に持ち直すやいなや、先手を取り、ドカドカとありったけの銃弾を撃ち込んだ。

バラバラと、伏せている芽衣の頭の上に、空葉莢が煙を噴きながら落ちてきた。生きた心地もしなかった。

武装兵は防弾ジャケットを使っていたようで、胴体には無傷だったが、足や首筋にかすったものでけがをしたらしくその場に倒れた。

だが、先頭の一人が撃たれたことで、後続の二名が、援護しようとデッキに飛び込み、小銃を乱射した。

パパパパン、と乾いた音が何度か芽衣の頭の上で交差した。

デッキにあるウィンチの影に隠れていた捜査員も、拳銃で応戦したが、撃ち始めたタイミングが遅い気がした。それに五連発リボルバーでは圧倒的に不利ですぐに銃声が途絶えてしまう。ドカドカと撃ち続けているのは、大型の自動拳銃を使っている小林だけだった。芽衣の頭の上に空葉莢の雨が降った。

近い距離で小林と武装工作員との間で銃撃戦が続いた。彼らは自動小銃を乱射していたがやがて柱の影の小林の姿に気づいたようで、照準が正確になってきた。

敵が一人を担いで縄ばしごに足を掛けて下りようとしたとき、もう一人が弾倉を入れ替えて猛烈な射撃を浴びせかけた。芽衣の周りにも跳弾がはじけ飛んできた。

「ぐっ」

と言う声がして、芽衣が小林を見ると彼は肩口を押さええてうずくまり、やがて、倒れ込んだ。

小林の銃弾で、武装兵も二人が倒れ、一人は重傷でうずくまっていた。どうやら、脱出に失敗したようだ。芽衣は小林を見上げた。

「小林さん、大丈夫ですか？」

「ああ、左ポケットだ、……」

小林はそう言ったきり倒れ込んだ。鎖骨下の太い血管を損傷したみたいで、血が噴き出すように出て、デッキ上に血だまりが出来ていた。

「小林さん！」

「ねえ、ねえ」

小林の体を支えていた、芽衣の手のひらにべっとりと血がついていて、やっと事態の深刻さを実感した。

「小林さん、死んでないですよ？」

芽衣が問いかけても返事はなかった。小林の額から血の気が引いて、土色に変わっていった。脈も呼吸もどンドンと小さくなっていく。

——左ポケットって何？

さっきの指示が気になった。芽衣が小林のジャケットの左胸ポケットを探ると、血まみれの封筒とスティック・メモリーが入っていた。

「何なんですかあ、小林さん！」

芽衣は半泣きで、さっき、もらった無線機の赤いボタンを押した。

——ガガッ、とどこかにつながった気がした。

——コバヤシ？ 被弾しているのか？ と、早口の英語で問い合わせてきた。

「撃たれました！」と怒鳴った。無線機からガガッという返事が聞こえてきたが、波の音が激しく聞き取れなくなった。

幸い無傷だった捜査員二人が芽衣の所にやってきた。武装兵から取り上げた小銃を持っていた。

「小林さんの具合は？」

「わかりません。脈が、……」

「すまない。わたしの発砲が遅れたのが原因だ」

「今更どっちだっていいです。まだ、武装船が残ってますよ。ゴムボートも」

芽衣は混乱の中、腹立ち紛れに捜査員に当たり散らした。

確かに武装船は、ゴムボートの兵士からの連絡で侵入が失敗したことを知り、最後の手段に出る様な雰囲気だった。船上の兵士がロケット弾を用意し、また二〇ミリ砲には新たな弾倉を装填していた。高速で激しく揺れる船上でガシャガシャと装填していた。今度狙われたら最後になるかも知れない。

芽衣は小林のネクタイをゆるめて、ハンカチで傷口を圧迫した。段々と出血が収まって来たのだが、芽衣の処置がよかったわけではなく、脈が弱くなったから出血量も減ってきただけのような感じだった。

武装船の上で別の兵士が数十メートルの距離でロケット弾を構えていたが、もう、そ



んなこと気にしていなかった。

——自分は小林のことを嫌いではなかったのかも知れないと、漠然と考えた。  
最初は恐喝により、言うがままに連れ回されていたのだが、最近では弟子と師匠みたいな関係になっていたし、そのことが嫌じゃなかった。

ふと、空を見上げると、星がきれいに感じた。  
どこからか、別の轟音が聞こえてきた。

「え？」

みんなが空を見回していた。  
轟音はいきなりドーンという大きな衝撃音になった。灰色の機体の飛行機だったが、かなり高度は低く、それが芽衣たちの目の前の武装船の上を飛んだとき、ブォーンという衝撃音を響かせ、次の瞬間、海水が巻き上がり水柱が長く高く残った。飛行機雲みたいだった。

飛行機が通り過ぎ、海面が元に戻ったとき、黒い板状の破片が飛び散り波に洗われているのが見えた。武装船は木っ端みじんになっていた。いい気味だが、どうやったのか芽衣にはトリックみたいなものは分からなかった。

飛行機が通り過ぎてから十分後、バツバツバツと空気を切り裂く音が響き、二機の大きな灰色をしたヘリコプターが接近してきた。

——大丈夫か？

英語で無線が入ってきた。

芽衣は、血まみれの手で無線機をつかんで、——彼は死にそうです、と怒鳴った。

ヘリコプターの一機はフェリーの周りの搜索と警戒に当たり、もう一機はフェリー上空にホバリングして、ロープを降ろして何人かの隊員が下りてきた。

「コバヤシは？」

一人の大柄な男が尋ねた。全身黒づくめの格好で、顔もマスクで隠していた。

「脈が弱いです。大丈夫でしょうか？」

芽衣がそう言うと男はかがんで、小林の容態を見て、ヘリコプターを振り向いて、右手で、くいと合図をした。ウィンチで担架が下りてきて、速やかに小林の身体を固定すると再びウィンチで上がっていった。

「艦内の病院で応急処置をした後で、陸地の病院に運びます」

「カンナイって？ あの、あなたは？」

「身分は明かせません。申し訳ないですが」

彼は先ほどの攻撃が、戦闘攻撃機による機銃掃射であることを教えてくれた。榴弾《りゅうだん》を毎分六千発の発射速度でぶっ放す。榴弾は船体を貫通して爆発する。それで武装船など木っ端みじんになったらしい。武器や弾薬の細かい名称は彼は言わなかった。多分、それで所属がわかってしまうのだろう。

他の隊員は、デッキにうずくまっていた武装兵たちもウィンチで回収し、十分もたたない間にきれいに痕跡を消して、また、空の上に消えていった。

小林がいなくなったことが芽衣には悲しかった。

(4)



(4)

芽衣は船室に戻り、血まみれになったブラウスを着替えて、さっき小林のポケットに入っていた封筒とスティック・メモリーを見た。

封筒の中身は、芽衣が以前に新宿で取られた供述調書だった。任務が終わったら返してくれると言っていたから、彼ももう死ぬと思って芽衣に渡したのかも知れなかった。そう思うとまた、涙が出てきた。

ノートパソコンに、スティック・メモリーを差し込むと、文書ファイルが入っていた。小林の遺書みたいだった。

全文が英語で書かれていた。

——これを見ると言うことは、任務を果たせなかった時と思います。

生き残った人で、ミスター・アオノの身柄を大使館に届けてください。先方の担当者は文化担当オフィサーのジョン・F・マッケイという人です。他の人には話ほしないこと。

なお、君の逮捕記録は最初から付けていません。心配なら添付している接続ソフトで警視庁データベースの七月二十五日の記録を見てください。供述調書はお返しします。

アーサー・C・コバヤシ

名前からも彼が日本人ではないことが判った。日本語の文字を読めなかったのも、口の利き方が乱暴だったのも、お箸が使えなかったのも、名前が変だったのも、多分訓練時間がなかったのだと想像した。

芽衣は供述調書をちぎってゴミ箱に捨てた。しばらく泣いていたが、こうもしてられないことに気づいた。

小林の使っていた無線機で、捜査員に怪我がないかだけ確かめて、早速動いてもらった。最優先事項であるバンの中にかくまっておいた青野の無事を確認しておかなければならなかった。

芽衣はブリッジに向かった。

「船長さん。ちょっといいですか？」

「何か？」

「このフェリーですが、時間通りに川崎に入れますよね？」

「いや、少し遅れるかも知れませんね。それに、海上保安庁と連絡を取りましたから」

「この事件を、報告しなければならないのは存じています」

芽衣はとなりにいた、県警の捜査員の方を見た。

「海上での事故だから海保庁の管轄というのはわかります。ですが、要人警護中なので、海上保安庁への対応は入港後にゆっくりとやってください」

彼も頼りなかったが船長の不安に拍車を掛けたようだった。

「そこで、提案なんですけど、最大船速とやらでこのまま川崎に向かってください。これ以上、洋上にとどまると、さらなる危険に巡り合わせる可能性があります」

芽衣は小林の様な脅し方をした。もう時間がないのだ。武装船が撃沈され、川崎港に敵の工作員の手が回るかも知れなかった。少なくとも武装船が本来の時刻に帰港するまでにこの海域を離脱しなければ危険だと思った。

「その際は、ちゃんと証言してくださいよ」

と、レバーに手を掛け「全速前進」にガチャリと入れた。ごごうん、と、エンジンの回転が上がり船は静かに加速を始めた。銃撃戦の後、一旦落ちていた船足は再び元の十八ノットに戻っていった。

客の中にも目撃者がいるかも知れない。でも、今日と明日は事情聴取する余裕はないはずだった。後からでも、乗船名簿を元に海上保安庁の捜査員が証言を集めにまわるだろう。そんなことより、一刻も早く危険な海域を脱出することの方が大事だし、船長がその辺りを理解してくれているのが有り難かった。

「青野さんの状態はどうだったんですか？」

芽衣は振り向いて聞いた。

「ええ、怯えていましたが無事でした。今は、船室に戻り一人が護衛についています」

「そうですか。着いてからのことなんですが、自動車は一台ですよね？」

「ええ、一台は高速道路で事故に遭いましたから」

「その自動車には、あなたたち二人が乗り込んで、赤坂に向かって頂けませんか？」

「はぁ、青野はどうするんです？」

「あたしが、電車で連れて行きます。都内であれば、尾行されない限り待ち伏せは不可能です」

「ふむ、確かに待ち合わせても迷うくらいですからねえ、でも、プロの尾行を甘く見ないで下さいよ」

「その間、自動車は大使館に向かわず、港区内のデパートやホテル周辺で停まったり、走ったりして欲しいんです。プロの尾行なら、そちらに神経を取られるでしょう」

「なるほど、我々も命がけですな」

「そのための防弾車両なんでしょう？」

「まあ」

彼の口調は重かった。芽衣とて他人に命懸けの任務を命令するなど、したくてやっているのではない。小林が命をかけてやろうとしていたからこそ、引き継いだけなのだ。

フェリーは十八ノットの速度で更に、東向きの海流にのり順調に洋上を快走した。  
芽衣は、ブリッジと食堂とを往復しながら、レーダー画面を監視し続けた。明け方少し、眠気を覚え、床の上に段ボールを敷いて寝ころんだら、そのまま眠りに落ちていた。気がついたときには船長が毛布を掛けてくれていた。

川崎市浮島のフェリー埠頭が見え始めると、甲板と自動車デッキが騒がしくなった。船長はすでにディーゼルエンジンの出力を下げて、ギアを切り、船は慣性だけで動いていた。接岸直前に外板と栈橋を兼用した出入り口を開けた。自動車のドライバーはそれぞれ、乗り込んで、時計を眺めていた。

「つきましたよ」

「わかってます」

芽衣は無線機の音声を確かめて、捜査員に、ゴーサインを出した。バンだけ、他の自動車で紛れて埠頭に出して、芽衣は青野を連れて、十分後に乗客に紛れてフェリー乗り場を後にするのだ。

「青野さん、用意はいいですか？」

「は、はい、でも大丈夫でしょうか？」

相変わらず小心者だった。小林も消されたと聞かされて更に猜疑心が強くなっているようだった。それに、バンに積んでいた、PAC4とPAC・NEOシステムの資料類を旅行鞆に詰め込んで持ち歩くことになり更に移動しにくくはなっていた。

芽衣もパソコンとここ五日間の着替えの入った旅行鞆を持っている。車がないのはつらかった。

フェリーが埠頭に接岸すると、自動車の車輪止めが外され、エンジン音が狭い空間の中に響き渡った。乗客も先を争うようにながやがやと待っている。自動車とは別の通路で外に出る。出来るだけ目立たないように、集団に紛れ込んだ。

「こっち」

芽衣は青野の袖を引っ張った。

「わかってます」

二十時間の船旅を終えて、陸地に足を付けることが出来た。





(5)



(5)

芽衣は青野を連れて、他の乗客と一緒に浮島から川崎駅前に出ているバスに乗った。船が着いたばかりで座れなかったが、外から見えない方が都合がいい。

午後六時前に、フェリーから下りたばかりのトラックと乗用車で右折レーンが塞がり、宮崎県警のバンもバスの前方で止まっているのが見えた。芽衣は後ろや左の歩道を気にしてきょろきょろしていたが、怪しげな人や車はいなかった。

もし、ハンニバルが武装船が逆襲にあったのを察知したとしても、それから動いたのでは遅いはずだ。それに、目の前で木っ端みじんになった武装船が太平洋の真ん中で、後から見つかるとも思えなかった。それくらいバラバラになり沈んでいったのだ。まさに、現代兵器の恐怖を物語るシーンだった。

小林が用意していた、高速道路を通るルートと、鉄道を使うルートは事前に察知されていた。

「あの、……」

とだけ隣の青野に呼びかけた。名前を出すことは危険と思ったのだ。青野は視線だけ芽衣の方向に向けた。

「店にいた女性なんですけど、彼女には船で来ることを言ったんですか？」

「いや、どうだったかな。一昨日の夜の営業でしばらく休業にすることは言いましたよ。だから、お盆休みをとることになったんです」

「ちなみに彼女は、宮崎の出身ですか？」

「さあ、実はわたしもあまり九州の地理に詳しくないですよ」

——おいおい、と芽衣は思った。

居酒屋の主人が地元情報に明るくなかったら、客の話題について行けない。

いずれにしても、昨日の午前中に宮崎を発つことを知っていたのは、彼女の他は小林と宮崎県警の一部の人間しかいないのだ。しかし、行動を読む人だったら、と、思うと、これまた、自信がなかった。

芽衣が小林にはめられたときも、まさか、新宿署に彼が現れるなんて思いも寄らなかったのだ。だから、ハンニバルが将棋の名人の様にこちらの動きを読んでいるなら、宮崎を出るときと東京に入るときが危険だと思った。

終点の川崎駅前で大勢の客が降りた。ここでも、芽衣は青野の袖を引っ張り、駅の構内を目指した。

時折、無線機で捜査員のバンを呼び、現在位置を確かめてみる。と、思ったほど進んでいない。午後六時を回り国道が混んでいるのと、彼らが都心の地理に詳しくないのが難

点だった。無線機のバッテリーも一昨日の昼から使い出して、小林が昨夜少しだけ、充電したきりで残量が心許なかった。

いつも使っている携帯電話も、肝心の捜査員の電話番号を知らないので使えなかった。もっとも、盗聴されているかもしれないので、無線機にせよ電話にせよあまり不用心には使えないのだ。

電車は頻繁に乗り換えた。

乗降客の多い、品川で東海道線から山手線に乗り換え、外回りで五反田、目黒、恵比寿、を通過して渋谷から地下鉄銀座線に乗り換えた。

青野は大きな荷物を背負い、上り下りするうちに息が切れ始めた。

「こっち」

と、さっきから芽衣はこの台詞ばかり繰り返した。袖をつかんで引っ張らないと、どこかにはぐれて行ってしまいそうだった。

銀座線を渋谷から五駅目の溜池山王で降りた。

電車を降りて自動改札を通り、最短距離となる十三番出口を目指した。地下鉄の階段をすたすたと、芽衣が先に駆け上がり、もう一度無線機で捜査員の位置を確認した。

「今どこですか？」

「国道十五号線、高輪の交差点表示が見えます。どうぞ」

——全然近づいていないじゃん。

「こちら、あと、……歩いて五分もかかりません、どうぞ」

「われわれが囹になります。単独で入ってください。どうぞ」

その直後、無線機越しにサイレンの鳴る音が飛び込んできた。おそらく、パトライトを点滅させて緊急車両扱いで派手に走るつもりの様だった。宮崎ナンバーの覆面パトカーがサイレンを鳴らしていれば、こちらに要人を乗せていると誰もが思うだろう。

芽衣は腕時計を見て、タイミングを計った。

「こっち」

青野の袖をつかんで地下鉄階段から駆け出した。目の前には大使館ビルと、手前に守衛詰め所の大きな建物があった。もう心配はいらない、世界で一番安全なビルだという意識もあった。

大きな荷物を抱えて、よたよたと走る青野だったが、その顔に少し希望の色が見えていた。

パンッ、という大きな破裂音が響いた。

「え？」

芽衣はあたりを見渡した。

手に黒光りのする金属を持ち、立ち去る男の姿が見えた。

振り返ると、青野の体が崩れ落ちた。

「うそ？」

芽衣は青野の上半身を支えたが、さすがに大人の体は重たくて、そのまま地面に横たわらせてしまった。——今までの、苦労は何だったんだ。という思いが沸き上がると、芽衣もその場に座り込んでしまいたくなった。

さっきの破裂音とともに、詰め所から大勢の警官が走り出てきたのに気づいた。拳銃らしきものを撃った男は走って逃げようとしたが、追いかけた一人から猛烈なタックルを受けて地面に投げ出され、続いて駆けつけた三人の警官に取り押さえられた。

気がつくやうに、芽衣と青野の周りをガードするように取り囲んでいた。

——何だか、役目を果たせなかったのに、みんながあたしを守っている。そんな気がしてきた。

ふと、見上げると、濃紺のスーツ姿の大柄な白人男性が立っているのが見えた。大使館の人かなと思って見つめていると、目が合ってしまった。

「あなたは、コバヤシの助手ですか？」

彼は流暢な日本語で問いかけた。助手と言えば助手には違いないが、全然、助手になっていないと思い、答えられなかった。

「黒澤芽衣さんですね？」

「え、はい」

芽衣は相手が自分の名前まで知っているのに驚いた。

「驚く必要はありません。コバヤシから全て報告を受けています」

「あの、ジョン・マッケイさんにお会いしたいのですが」

「わたしです。お待ちしております」

「え、あの、その、えーと、実は、……お詫びというか。お役目を果たせませんでした」

「そんなことはありませんよ。あなたは立派に使命を果たして、ミスター青野を届けてくれました。七時の記者会見にはばっちりです」

「はぁ？ 彼は撃たれて、ほら」

芽衣はひっくり返っている青野を指さした。

「ええ、弾は防弾ジャケットで止まっていますよ」

「うそ？」

芽衣が青野の上着をめくると、宮崎県警のロゴ入りの防弾ジャケットを着込んでいて、さっき撃たれた銃弾はその中程で止まっていた。青野は元々小心なところに、撃たれたと思って気を失ってしまったに違いない。

マッケイは部下に青野の介抱をする様指示して、担架に乗せ、中の医務室へと運ばせた。

「あの、マッケイさん。小林さんはどうなったんですか？」

芽衣は、あわよくば、と言う期待で質問した。

「海軍特殊部隊指揮官からの情報では、空母ジョージ・ワシントンの医務室に運ばれてきたとき、失血により心肺停止状態だったそうです。現在も意識不明の重体で、東京から医療スタッフを送り込んでいる状態です」

「危篤ってことですか？」

「コバヤシはわたしの大切な部下です。助けます」

彼は医師でもないのに、そんなことを言い切った。

「それから！」

「質問の多い、お嬢さんですね」

「七時の記者会見って何です？」

「国務省から、今回のスパイ事件を報じ、北の悪事をネタに、制裁をさぼっているロシアや中国の動きを促すのが目的です」

芽衣は、小林の動きにもおかしなものがあると感じていたが、この記者会見も同様だった。

「あの、この事件で、変な発表をすると恥をかきますよ」

「いつものことですよ」

「だから、嵌められているんですよ。悔しくないんですか？」

「どういうことですか？」

「つまり、ハンニバルはICチップのスパイをしていたのは事実ですが、彼自身北の人間かどうかは判りません。ですが、この大きな事件を公にしまうと、アメリカ国務省は北を非難して、記者会見までして経済制裁の呼びかけに走るでしょう。その結果として得をする組織があります」

「誰が得をするのかね？ まあ、立ち話も何ですから、中にどうぞ」

マッケイの執務室に通された芽衣は、しばらく一人になった。ソファに座り、テーブルの上のティーポットを眺めて、指でつついて気を紛らわせていた。中々、マッケイは戻ってくる気配がない。さっき言っていた七時の記者会見に掛かっているのだと芽衣は思った。

この部屋にもテレビがあったので、無断でつけてみた。

七時を十分ほど過ぎていたが、すでに、大きなニュースになっていたらしく、アナウンサーは同じ内容を何度も繰り返して話した。

——アメリカ大使館は、日本でスパイ活動をしていた北朝鮮国籍のキム・ヨンイブと名乗る男を政治亡命者として保護しました。彼の証言により日本国内での大がかりなスパイ活動の実態が明らかになった模様です。なお、アメリカ国防総省は弾道ミサイル防衛システムの機密情報が漏洩したことを重く見て、同国に対する制裁をよりいっそう強化する必要があることを表明しています。

ニュースは同時刻のワシントンからのレポートも中継していた。

芽衣はこのニュースを聞いて、憂鬱な表情をしてスイッチを切った。

ここ五日分の着替えとノートパソコンの入った旅行鞆を持ち、芽衣は立ち上がり勝手に扉の外に出て、側にいた警備員に、——帰ったと伝えてください。と、言い残して大使館を後にした。

久々に自宅に帰ると、兄貴がニュースを見ながらビールを飲んでいた。

「おう、お帰り、温泉には行ったのか？」

「そんな訳ないじゃん。……何のニュースなの？」

「相変わらず、大騒ぎするのが大好きな様だな。よくも飽きないものだ」

兄貴はそう言って、空になったコップにビールを注ごうとした。芽衣は一人でも、こんなニュースに流されない人がいるのに少し安心した。

「待って、あたしが注いであげる」

「ほお、珍しいな」

「いい女になったでしょ」

「馬鹿じゃないか」

芽衣は、兄貴の顔を眺めて笑った。





## 7. 研究室



## 7. 研究室



(1)



(1)

次の朝、目覚めが非常に悪かったが、やっぱり休むことは出来なかった。山本教授にシンポジウムの報告をしておかなければならなかったし、お盆休暇の時期になるので、事務員として教室の各メンバーの予定を聞いて回らなければならない。

——ああ、休みたい。

芽衣は呆けた顔で洗面所に行くと、健一が食卓で新聞を読んでいた。母は洗い物をしていた。起きたのがいつもより遅かった様だ。

「お兄ちゃん、お早よ」

「ふむ」

健一は簡単に挨拶を返した。

——芽衣、早く食事しなさい！ と、母の声がした。

久々のトーストだ。麻衣子の家に泊まっていたときは、ご飯と味噌汁だった。

「ねえ、昨日のことが記事に載ってるの？」

芽衣はトースターに食パンを放り込んでタイマーを入れた。

「スパイ事件か、一面と三面に出ている。宮崎県警のパトカーが都内まで乗り込んでいたらしいな。ははは、暇な奴らだ」

健一は軽く笑い飛ばした。芽衣は少しカチンと来たが、秘密なので黙っていた。

「どうしてみんな真剣に取り組まないのかな。お兄ちゃんみたいな人ばかりだと、日本が滅びちゃうかも」

「大げさなことを言うなよ」

芽衣がマグカップに紅茶を注ぐと、ほんわかと湯気が上がった。

昨日の七時のニュースには、番組途中からアメリカ大使館の情報として、外国人スパイの亡命騒ぎが入り、アナウンサーが何度も同じ情報を読み上げ、更に、時間延長をして通常番組プログラムが順延になっていた。母親は、九時からのドラマが見られなくなったことに大文句を言っていたし、健一は他のニュースがなくなってしまったことに文句を言っていた。

一昨日からの、小林や芽衣、そして、県警の命懸けの「青野稔」輸送作戦には誰も気づいていなかった。もっとも、一番怪しげな大使館オフィサーのジョン・マッケイの動きも気にはなったが、本当に青野の証言だけで、北の工作機関に圧力を掛けるのだろうか、心配だった。青野本人の身柄はアメリカの威信を掛けて守ってくれるだろうが、青野に絡んでいた女性や大日本エレクトロニクスの技師など、数名が行方不明のままであり、ことが明るみに出ると本当に殺されるのではないかと言う気がした。

チンと鳴ってトーストが飛び出した。芽衣はそれを手に取り、自分専用のラズベリージャムを塗ってかじりついた。芽衣が留守にしている間にジャムが少し減っているのに気づいたが、大人げないので黙っていた。健一の口元を見ると、ジャムが少しついていた。

「ああ、お前、今日は俺と一緒に出勤するのか？」

「え、うん」

「シンポジウムのパンフレットを渡しておいてやる。金属原子へのイオン・スパッタリングの計算機シミュレーションというのを聞いたことにしろ。感想は適当でいい」

「何それ？」

「分からないなりに、受け答えしておけ。そっちの方は山本先生も期待してはいない」

「そっち？」

「お前が休んでいる間にも、事態は進展しているんだ。続きは大学で説明しよう」

「事態って？ そのニュースで解決したんじゃないのかな」

「馬鹿、スパイなんてどうでもいい。こっちの問題は大日本エレクトロニクスに、材料が入らなくなったことだ」

「ふうん」

食べ終わると、着替えてから歯を磨き、リップを塗ってバッグにノートパソコンを入れ、玄関に出た。

大学の研究室も、しばらく見ないうちにすっかりとお盆休みの雰囲気になりつつあった。芽衣もアルバイトなどしていなければ、知らない間にこの時期を過ごして、気がついたら秋になるはずだった。

東京に実家がある学生にはあまり関係がないが、地方から出てきている場合は帰省する人が多い。そう言うわけで、健一の部屋の向かいにある学生の大部屋では、この時期に仕事をかたづけてしまおうと、年末のような忙しさを醸し出していた。

芽衣はいつも通りに、仕事に入り雑巾掛けしていると、九時過ぎに山本教授が出勤してきた。こちらも何となくいそいそとしていた。

「やあ、お久しぶり。向こうはどうだったね？」

「お早うございます。……シンポジウムはちゃんと行ってきました」

芽衣は愛想笑いを浮かべてそう答えた。

「そうかい。まあ、楽しんで参加できるのは学生のうちだけだ。大学院生になれば講演者側に回ることも多いから、今のうちに勉強しておいてね」

「はい」

「それから、十五、十六日の学生たちのスケジュール表をまとめておいてくれ。何かあったらいけないから」

「ここもお休みなんですか？」



「いや、研究室は年中無休だよ。僕は孫が遊びに来るから休むけどね」

「はは、では各研究テーマごとに聞いて参ります」

「うん、後でコピーを田端君と黒澤君にも回しておいてね」

「かしこまりました」

学生の大部屋に入るとき、芽衣は少し躊躇した。休みをもらって宮崎に行く前に、変なうわさが流されていたからだ。健一がうわさを打ち消すと言っていたが、勝手に一人歩きすることが多いので、ほとぼりを冷ます以外に打つ手がないのだ。

恐る恐る、ドアノブを回して扉を開けると、男ばかりでがやがやと楽しそうにやっていた。

芽衣が一人一人、予定を聞いて回った感じでは、もう、あのうわさは忘れ去られていたようだった。少し気になり、うわさをばらまいていた張本人である倉島佳代の机を見ると、今日は来ている様子なかった。——あれ、もう休みを取ったのかな？ と疑問に思って、彼女の指導をしている東海林昌夫に聞いてみた。

「あの、東海林さん。倉島さんはお休みですか？」

東海林は端末に向かって手を休めて振り向き、ああ、と短く答えた。

「昨日、ちょっと指示したらさ」

「また、いじめたんですか？」

「人聞きの悪いことを言わないでくれよ。あいつに言っておいた、自由電子のシミュレーションとマクスウェル方程式の解との整合性のチェックをやってなかったんで、問い詰めたんだよ。小一時間だけだな」

「それは嫌がらせだと思いますよ」

「そしたら、あいつは、やったけどアパートに置いてきたと言い張るんだ」

「じゃあ、取りに帰ったんですか？」

「いいや、やってるわけじゃないか。それが見え見えだったから問い詰めたら、じゃあ、見てくれと言うんで、見せてみろって俺もついて行ったんだ」

「暇ですねえ」

「あいつのアパートって近所だと思ったんだよな。そしたら、こっちって言い出して、ドンドン進んでいくんだ。途中で汚いアパートがあった」

「え、東海林さん彼女のアパートに上がり込んだんですか？」

「冗談じゃないよ。アパートの前でしばらく迷ってるとしたら。今度は、ここじゃないですって、更に歩き出したんだ」

「へえ」

「そのうちにね、自分の住んでいるところはこの先の三十階建ての高層マンションの最上階で、百平米の部屋に、床はフローリング、風呂は大理石、エアコンに衛星放送完備、サービス満点とか変なこと言い出してな」

「何かのコマーシャルですか？」

「知らないよ。いつまでたってもそんな建物なんか見えてこないし、歩いたのは巣鴨のあ

たりだったかなあ」

「え、そんなところまで歩いていったんですか？」

「しょうがないじゃないか。山手線の高架下をくぐったときに、すうっとあいつの姿が消えたんだよ。びっくりしたね」

「失踪？」

「まあ、その日は諦めてだな、今日の朝、あいつの実家が山梨じゃん？　電話をしたら本人が出てきて、びっくりしたのなんのって」

「ええ？　あの人、山梨まで歩いて帰ったんですか？」

「わかんないけど、まあ、あいつには少し虚言癖があるな。信用できない」

こんな人の指導を受けているから、性格が歪んでくるんだと思ったが、芽衣の悪いうわさがなくなったのは、彼女の言うことが信用されなくなったのが原因と言うことだった。芽衣にとってはその方がよかったが、少しかわいそうな気がした。

「じゃあ、倉島さんは二十日くらいまで、お休みでいいですか？」

「駄目だよ。でも、君に言ってもしょうがないな。先生には休みと言うことだけ報告しておいてくれたまえ」

「しょうがないですね」

芽衣は、聞き取ったスケジュールをまとめて一覧表にしようと、この部屋を出ようとしたが、東海林の端末画面をみて彼がPAC・NEOシステムのシミュレーションをテーマにしていることを思い出した。

「東海林さんって、大日本エレクトロニクスに何度も出入りしているんですよね？」

「ああ、研究の話か。ちょっとはね」

「宮崎工場に、一人で研究している人がいたんですけど。ご存じですか」

「さあ、一人で出来るもんかね」

「以前、習志野工場にいた方なんですけど」

「ひょっとして林崎担当課長のことかい？」

「ええ」

「どうだろう。あの人は全体工程を調整するコーディネーターみたいなことをしていたから、細かいことは知らないだろうが、そのかわり、どんなことでも知っていると思うな」

「どういう意味ですか？」

「例えば、交番のお巡りさんの様に、町のことなら地域の細かい道路まで知っている。でも、そこに建っている家屋の坪数や庭の広さには無関心だ。不動産屋にはかなわない」

「ICチップが町ですか？」

「そう。細かい回路の知識はないが、どの部分がどんな役割でどういう構造かは熟知しているタイプの技術者かな」

「じゃあ、林崎さんがそのICチップの載ったボードを持っていたとしたら？」

「ICそのものは作れないと思うけど、あの人の立場ならサンプル品を持ってたし、ボード自体は専門の会社に、機能だけ指示すれば注文可能だよ」

「そうなんですか」

——これで、林崎技師の社員寮のパソコンにICチップの載った基盤があったのも不

自然ではなくなった。彼は左遷された後も、密かに開発を続けていたのだ。でも、基盤を作る会社に注文するにはお金がかかる。その費用は青野か誰かが出していたと考えられた。

「何だよ。あの人がそんなもの持っていたのか？」

「え、いや。オークションに出したらいくらくらいかな、なんて、あはは」

芽衣は笑ってごまかしておいた。

「おいおい、工場の外に持ち出したのが知れたら、大変なことになるぞ。日米安保条約に基づく秘密保持協定というのがあり、厳しく罰せられることになっている。俺たちも誓約書にサインさせられたんだ」

「へえ」

芽衣が感心した顔でいると、東海林は机の引き出しから、古くなり黄色く変色した誓約書のコピーを出してきた。三年前の日付で、当時大学院にいたと思われる他の学生の名前とともに、彼の名前が書いてあった。

「これを守らなかったらどうなるんですか？」

「一応、刑事罰の対象になるらしい」

でも、今まで適用されたことはないらしかった。

「このボードをパソコンに差し込んで、何かいいことあるんですか？」

「そうだな、シミュレーションが早くすむ。実物をつかわなくていいからな」

「実物？」

「うん、本物のPAC・NEOシステムは、このICチップを百二十八個並列につないで使うんだ。ここに、レーダーシステムからの信号を入力し、計算結果をミサイルへ送り出す。研究ではダミーだけど、専用コンピュータを使うなんて大変だ。だから、パソコンで実験できるようにしたんだ」

「あの、このボードを持ち出して使ったとして、外部から探知されるんですか？」

「パソコンってことかい。ネットから侵入されれば丸わかりだよ」

「今まで、探知されなかったのはなぜですか？」

「さあ、誰か持ち出したのかい？ 調べる人がいないだけだろう」

「そうですか」

東海林は気軽にそんな話を教えてくれ、芽衣は気が抜ける思いがしたのと同時に、やはり背後に誰かが動いている様な気がした。



(2)



## (2)

二日間のお休みのはずだったが、大学においては結構ずるずると伸びるもので、通常通りの活動に戻ったのは八月二十五日だった。この日は午前中に学生と教官全員の前で、珍しく山本教授の訓辞があり、ボヤッとしているものには学位を出さないとまで言わしめた。

そんな中、ピリピリとした雰囲気、学生たちは研究生活に戻ったが、三時間もたたないうちに、いつものがやがやした空気が戻ってきた。

倉島佳代もいつも通り、東海林に怒鳴られてしょんぼりしていた。

昼休み、芽衣が食堂でカレーうどんを食べていると、携帯電話に宮崎の麻衣子から掛かってきた。彼女は地元の進学塾で夏期特別講習の講師アルバイトをしていたが、客である高校生の夏休みがもうすぐ終わるので、こっちの仕事も今日で終わるらしかった。

「芽衣ちゃんに会いたいな」と、麻衣子は言った。

「どうしたのよ？ 塾の講師を続けるんじゃないの？」

「だって、高校生は来週から二学期じゃない。午後五時から十時までの講師なんて、わたしは車がないから出来ないよ。お父さんに迎えに来てもらうのも気の毒だし」

「そうねえ、何か麻衣子ってば、訛ってない？」

「嫌なこと言わないでよ。訛ってないわよ。……もう東京に帰りたい」

彼女はそんなことを言い出した。東京に帰ると言っても、彼女が上京したのは入学式の一週間前のことだから、東京で暮らしたのはほんの四ヶ月だけのことだ。

「でも、大学がはじまるのは十月からだよ。暇だよ、多分」

「ねえ、どこかに行こうよ、遊園地とか」

「だから、一日くらいならいいけど、一ヶ月もいると絶対暇だってば、あたしが言うんだから間違いないよ」

芽衣は、こういう言い方は誰かに似ているな、と、思いながら断言した。

「じゃあ、ハンバーガーショップでアルバイトしようかな？」

「ハンバーガーだったら宮崎にもあるじゃない」

「意地悪！」

麻衣子は怒って切ってしまった。

彼女にしては珍しいなど、芽衣は思った。芽衣に会いたいと言っていたのは本気だったのかなど、少しだけ勘ぐった。

電話を切ってバッグに戻し、食器のトレイを返して教室に戻ろうとして、携帯電話の着信ありのランプが点いているのに気づいた。——あれ、麻衣子がもう一度掛けてきたのかな？　と思い、画面を見ると小林からの着信だった。

芽衣はどきどきしていた。目の前で大げがされて、ひょっとしたらとも思っていたのだ。そのまま、折り返して掛けてみた。

「もしもし、小林さんですか？」

「違います」

「でも、この番号は？」

「わたしは大使館のジョン・マッケイです。小林のことで連絡しようと思って、彼の携帯電話から掛けたのです」

彼の携帯電話をマッケイが持っているということに、芽衣は不吉なことを想像した。

「あの、電話機本体があるということは、小林さんは助かったのですか？」

「ええ、電話機は海の底ですが、番号はそのままで再度交換したのです。本人は三日前に移動できるようになったので、ヘリコプターで洋上の医務室から陸上の病院に移りました。あなたにだけお知らせしておきます」

「どこに入院したんですか？　会えますか？」

「横浜にある赤十字の病院です。救急病棟の三階の病室です。面会時間は午後三時から八時までです」

「そうですか。……でも、どうして知らせてくれたんですか？」

「ふふ、わたしも野暮な男ではありませんからね」

「やだ。変なこと言わないで下さい」

芽衣は慌てて電話を切った。顔が赤くなっていないか確かめて仕事に戻った。

「お兄ちゃんいるかな？」

芽衣が健一の部屋をロックしてドアを開けようとしたら、残念ながら鍵が掛かっていた。どこかに出掛けているようだった。腹立ち紛れにドアを蹴飛ばすと、通りがかった学生が何事かと声を掛けた。

「君、黒澤先生に用かい？」

誰も見ていないと思ったから蹴飛ばしたのに、急に声を掛けられびっくりした。

「は、い」

「昼休みが終わる前に田端先生のところにいらしてたよ」

「そうですか。ありがとうございます」

この研究室の四年生で、田端先生の指導学生だった。

せっかく教えてくれたのなら、行かないと具合が悪いと思い、そのまま階段を上がった。廊下で丁度、山本教授と出会った。偶然にも田端先生の部屋に行くところらしかった。「君も来るかい？　前の件だよ」

「はい」

何だか嫌な予感がしたが、一緒に部屋に入った。応接用のソファとその前に置かれたホワイトボードに数字が書き込まれ、すでに、田端先生と健一が何か議論をしていたようだった。ここ数日で何か調査をしていたようで、机の上にもキングファイルに綴じ込



まれた紙の資料が積み上げられていた。

山本教授がソファに座り、芽衣は田端先生の机の事務用いすを引っ張ってきて座った。

「さて、どんな具合だね？」

「はい、前回、七月末に大日本エレクトロニクスの武田部長が来訪した後、半導体の材料を臨時に別の金属メーカーから調達しました。これは山本先生の口利きによるものです」

「いや、僕と言うより、内閣官房の後藤君の力添えだろうね」

と、謙遜とも顔の広さを自慢するとも取れる返事をした。

「今回、こんなことになった直接の原因なのですが、大日本エレクトロニクスが購入予定であった大日本マテリアル製ガリウム・ヒ素化合物ウェハーを納期直前に他のメーカーに横取りされたことにあります」

「本当に取ったのではないのだろうね？」

田端の説明に、山本教授は皮肉を言った。正確には横取りなどすれば窃盗罪になる。

「ああ、言葉足らずでした。大日本マテリアルは契約を一方的に解除し、大日本エレクトロニクスに違約金を支払い、それより高い値段で別の商社に売却していました。最終的な向け先は北朝鮮北東部キルジュンの自由工業団地にあるロシアの電子機器メーカー、ウラジオ・ポストーク社の材料部門です」

「なんだい、自由工業団地って？」

「一九九〇年代に北朝鮮が開発をした工業団地で、税制面で優遇する条件で外国に工業用地を提供したものです。ケソンとキルジュンに造成されました。実際には政情不安などから韓国から数社が投資しただけでしたが、北京オリンピック以降にこのロシアのメーカーが進出しています」

「なるほどね、それで、僕が口をきいて芝崎セミコンへの品物を大日本に回してあげたわけだが、一時的な措置なのか、今後も続くのかそのあたりを見極めたいと思う」

教授がそう言って一同を見渡すと、田端助教授は笑みをこぼして資料を広げた。

——北京オリンピックの時期を頂点にして、中国の材料消費は増大の一途をたどり、それ以降は上海万博があったものの、量としては横ばいから下降気味をたどっている。鉄鋼製品が主要であるが、レアメタルの消費量もこれに比例していた。

レアメタルに限定して分析すると、主要な産出国は中国とロシアであり、世界的な価格高騰はこれらの先端製品生産量の増加に比例するかのようにつながっていた。

これらの資料を一気に説明した。

芽衣はいまいち、よく分からないという顔で、座っていた。

「レアメタルの消費量が、北京オリンピック以降は減少傾向にあるのに、価格だけは依然として上昇傾向にあります。ここに、作為的なものを感じるのです」

「ふうむ。これらの材料は投機的な要素も含まれるね？」

教授は一点指摘した。投機とは値上がりを見込んで買い占める人による影響だ。

「はい、ロンドンとニューヨークに取引所がありますが、実際にデータを見ると、供給量がコントロールされている様に感じるのです」

「でも、どこでコントロールするんだい？」

「レアメタルは多数ありますが、鉱山から採掘し、精錬所で金属に加工することは変わりません。取引は金属の塊の段階で行われますが、どうも、鉱山から精錬所に渡る段階で何らかの操作が行われている様な気がするんです」

「根拠は？」

「ネットワークシミュレーションです」

田端はそう淡々と答えた。タンタルやタングステンなどの希少金属のことだが、実際のブツの流れを解析せずに、総量をコンピュータシミュレーションしていた。

さらに、現在ロシアと中国からの産出分で消費国への供給が飽和状態に近いのを、別の産出地による供給ルートの追加で、価格がうまく操作されていると結論づけた。

山本教授は健一の方を見て、意見を求めた。

「ええ、その通りです。シミュレーションはわたしが学生を使ってプログラミングしました」

「ふむ、そのシミュレーションと実際の現象とは合うのかね？」

「田端先生の調査結果では」

と、健一は前置きした。いつも保身を計る男であり、一応、田端助教授の顔を立てる振りをしておいて、いざというときの言い訳を用意するやり方だ。芽衣は向こうを向いた。

健一の説明では、さっき話した、ロシアの電子機器メーカーであるウラジオ・ポストーク社の材料部門がこの自由工業団地で活動し、レアメタルの価格操作をしているということだった。

「待ちたまえ。数年前からこの国には経済制裁が、強弱はあれども実施されている。材料を輸入できないし、積み出しもできないはずだが？」

「ええ、確かにレアメタルの鉱石を輸入などすれば、アメリカ海軍の臨検に会い入港すら出来ないと思います。ですが、この国にはあまり有名ではないですが、大きな鉱脈があるんです」

「まさか、戦前からあったものではないだろうね？」

山本教授は皮肉気に尋ねた。

「そのまさかなんです。クムガン山にタンタルやタングステン、インジウムをはじめとする鉱山が散在します。EUやアメリカなども目を付けてはいたようなんですが、経済制裁の建前があるので、どことも、中国を経由してしか購入出来ませんでした。しかし、ロシアがこの工業団地に精錬所を作ってから、直接、しかも陸上輸送で製品をウラジオストックにある工場に納入しています」

「待ちなさい、そんなにいいものがあるなら、どうして、日本向けのレアメタルを横取り何かしたんだい？」

「おそらく、これはわたしの予想ですが、その製品を横取りすることにより最終的に米軍へ納入するコンピュータの納品が遅れました。これにより、米軍の生命線を握っているんだぞと言う意思表示をしたとしか思えないのです」

山本教授はぼかんと口を開けて、すぐに健一の言わんとすることに気づいた。  
「おいおい、だとしたら、僕が妨害したみたいじゃないか？」  
「すみません。ご賢察の通りです」  
「ふむ」

三人は押し黙ってしまった。  
「あの、そのウラジオ・ポストーク社というのは、ロシア政府関係者なんですか？」  
芽衣が沈黙を破り質問した。健一が田端助教授の方をちらっとみてから、彼がうなずくのを確認した。  
「一応、民間企業だ。しかし、政府による何らかの後押しがあるものと考えられる。わかったか？」  
「でも、政府ぐるみのことだったら、アメリカ政府がもっと怒ってないですか？」  
「それもそうだねえ」  
山本教授はまたため息をついた。



(3)



### (3)

会議のせいで午後の事務仕事はほとんどなくなってしまい、芽衣は午後三時になりアルバイトの時間が終わった。ロッカーからバッグを取り出してブラウスとスカートのまま大学を出て電車に乗った。あまり、制服のように見えないスカートなので、着替えなかった。

普段はまっすぐ家に帰るのだが、昼休みに小林の入院先を聞いてから、会いたかったのだ。

桜木町で電車を降りて、バスに乗り換え二十分ほどで病院の建物が見えた。港が近くに見えると、宮崎からフェリーで移動したときのことを思い出し、訳もなく涙がにじんできた。自分は小林が撃たれたとき、地面に伏せていて直接光景を見たわけでもないのに、彼の苦しそうな顔が目浮かんでくるのだ。

停留所は病院の前だった。

正面玄関から入り案内板に従って、電話で聞いていた三階に行ったら、看護師から五階に移動したと言われた。

——救急病棟は二十四時間監視のいる人のためのベッドなんです。容態が安定したので外科病棟に移っていただきました、と、看護師は言った。

芽衣は少しだけ安心した。

病室に行くと、小林は暇そうに窓から外を眺めていた。六人部屋の病室で、ベッドは全て埋まっていた。

「こーんにちは！」

精一杯笑顔を作り小林に声を掛けた。

小林は声につられて振り向いたが、にこりともしなかった。

「あの、あれから大丈夫だったんですか？」

「ふん、見ての通りだ」

「重傷とお聞きしたんですけど、歩けるんですね」

「皮肉か？」

「そんなことないですよ」

芽衣は愛想よく振る舞ったが、相手の余りの機嫌の悪さに、何を言ってもいいか分からなくなった。

「ここにいることを誰から聞いたんだ？」

「あの、大使館の人から。でも、小林さんの携帯電話の番号からでしたよ」

「まあいい、ちょっと、食堂まで行こう。そっちだ」

小林は病室から出て、廊下の端にある食堂に芽衣を連れて行った。食堂とは言っても、病院食を摂るだけのただのテーブルと椅子があるだけの部屋だった。他に誰もいないことを確かめてから、小林は椅子に座り、銃撃戦の後のことを芽衣に聞いた。彼も何も知らされていない様な感じを受けた。

芽衣は身振り手振りで、川崎のフェリー埠頭に着いてからのことを説明した。やはり、大使館前でもう一度、青野が銃撃されたことは涙なしには語れなかった。

「ご苦労様だったな」

「いいえ」

小林の機嫌が悪いので、芽衣は上目遣いに返事をした。正直言うと機嫌が悪い男性の相手をするなど経験がなかった。これまでは、適当に無視しても生きてこられたし、その必要がなかった。

「大使館からは誰が連絡したんだ？」

「えっと、確か、……ジョン・マッケイという人からでした。ご存知ですか」

「よく知っている。何か言っていたか？」

「特に、ないです。この病院と面会時間だけでした」

芽衣は話をそらせて、傷の具合を聞いてみた。彼はあの銃撃で、弾丸を二発肩から胸に受けていて、救助に来てくれた空母の医務室付属の手術室で、弾丸の摘出と、損傷した血管の縫合を受けたと言った。もっとも、その間は彼も意識がなく後から主治医から聞いただけだという。

失血による心肺停止時間が長く少し記憶障害も残っているみたいだと、やや自嘲気味に語った。

「俺の身分は明かせないが、元は情報分析官だったんだ。ロシア語担当のな。傷が治っても元の仕事には戻れないかも知れない」

彼の不機嫌の理由はそれだったと芽衣は悟った。

「でも、少しくらいのものなら、出来ることがあるじゃないですか。右手は治るんでしょう？」

「今は骨を金具で固定している。半年したらもう一度手術して取り出す」

「まあ、それがすんだらいいこともありますよ」

「……あのとき、俺から先に発砲してやられたんだ。間抜けもいいところだ。証拠が残らなかったからいいけど、これで青野が殺されていたら失脚間違いなしだ」

小林は、また、あのときの話を蒸し返した。芽衣が聞いてもいないのに、勝手にフラッシュバックすると言うことはよほど、心の傷になっているに違いない。

「もし、首になっても、あたしがアルバイト先を探しますから」

「馬鹿。子供が気を遣うんじゃない」

「ひっどーい」



不機嫌そうだった彼の態度も、芽衣がふざけているうちに段々と和らいできたように思えた。

でも、芽衣が不自然に思ったのは、小林がこの事件に関する情報を握っていないことだった。本当に記憶障害なのかと、心配したほどだったが、銃撃されるまでのことは芽衣より正確に記憶されており問題はないように見える。大使館から連絡をくれたジョン・マッケイという男が多分、小林の上司で彼を本気で首にする気であるのかも知れないと、少し心配になってきた。

帰り際、芽衣は小林に、自分が力になるからくじけないで下さいと、告げた。

家に帰ったら、すでに八時を過ぎていた。

行くときは気が急いでいたせいもあり、横浜から乗り換えてまで行くことに何ら抵抗はなかったが、帰り道はその逆で、埋め立て地のど真ん中のバス停で便数の少ないバスを待っていると、宮崎で麻衣子のことを笑っていたのも申し訳なく思えた。きっとこんな感じで寂しく待つしかないのであろう。

更に横浜駅に出てからも、結構乗り換えが多いのだ。先日、命をねらわれながら川崎から赤坂まで誘導した青野が、拳銃の音だけで倒れ込んでしまったのも気持ちは分かる。

そんな思いで、家の玄関をくぐると、いつものテレビの音と家族の喋る声がして、少しだけほっとした。

「ただいま」

芽衣が台所に行くと、母はすでに洗い物をしていた。

「みんな、もう食べたの？」

「今日は、健一も早かったからねえ。芽衣も早く食べて片付けてちょうだい」

「はい」

芽衣が鍋を開けると、煮込みハンバーグが入っていた。母にしては珍しい料理だった。

「ごちそうだね！」

「生意気言うんじゃないの。ただのハンバーグをソースで煮込んだだけよ。夏場だし健一もストレス痩せしたって言うから」

「お兄ちゃんのリクエストだったのか」

同じ兄妹でも、昔から待遇が違っていた。

父がまだ帰っていないので、二個残っていたのだが、そのうちの一個は少し浸食されていた。明らかにフォークの先で周囲を削り落としたあとがある。きっと、兄貴がもう一個取ろうとして、二個しかないのを遠慮して半個分だけ取ったに違いない。

芽衣がお皿に盛りつけて、テーブルにつくと、健一はビールを飲みながらテレビを見ていた。

「お兄ちゃん、毎日同じニュースばかり見て、よく飽きないわね」

芽衣が嫌みを言いながら、どっこいしょと座ると、健一はじろりとにらんだ。

「同じニュースでも、喋る内容は毎日変わるんだ。馬鹿め」

芽衣は、面白そうに笑いながらフォークでハンバーグを切って一切れ口に放り込んだ。

ソースがしみこんで胃の中に肉のエキスが染みこむようだった。これなら、もう一個欲しくなるのも無理はない。

「お前、今日の会議で口走ったことだが」

「何だっけ？」

午後からは小林のことで頭がいっぱいで覚えていなかった。

「ウラジオ・ポストーク社にロシア政府が関与しているのではないか、と言った分だ」

「ああ、でも、関与してたらアメリカ政府が黙ってはいないんでしょ？」

「アメリカの情報力はすごいが、彼らも万能ではない。例えば、うちのおかずがハンバーグと言うことも知らないだろう」

「当たり前じゃない」

「でも、肉屋の親父は知っている。ミンチ肉百グラム (E 四人分だ)」

「じゃあ、町内の住民のことじゃないと、いちいち関心を持って調べたりしないと言うわけね」

「このスパイ事件を暴き出した能力を買って、もう少し調べてみないか？ 山本先生の名誉挽回も出来るし、そうなると、お前の卒業研究の時に非常に有利になる」

「何だかいやらしいわね、そういうの」

「何なら、予算をもう少しつけてもいいぞ」

「ハウマッチ？」

「本当にやる気があるのか？」

「ギャラ次第かも」

芽衣は口をもぐもぐさせながら答えた。この間もらった六十万円には手を付けずに、事件が解決したら、麻衣子でも誘って、どこかに大名旅行に行こうと思っていた。

健一はその場では値段を出さなかった。

「明日、田端さんとも相談してみよう。あっちの予算も回してもらわないと不公平だ」

「何よ、研究室はみんな仲良く使っているんじゃないの？」

「馬鹿を言うな、研究費は発表論文数に比例しているんだ」

と、芽衣とは無関係な文句を言った。

食べ終わると、自分で食器を流し台に持って行き、洗ってから水切りかごの中に入れておいた。冷蔵庫を開けて、缶ジュースを取り出して、芽衣もテレビの前に座った。

「あ、そうだ」

芽衣が急に思いついたように声を上げた。

「何だよ？」

「東海林さんたちが、PAC・NEOシステムのパソコン用ボードを使ってるじゃない。あれを外部からコントロールって出来ないかな？」

「何をする気だ？」

「宮崎の林崎技師の家にも、あのボードがあったのよ。多分、外部に出回ってると思うよ」

芽衣がそう言うと、健一も嫌な顔をした。また、山本教授の失態になるからだ。教授の失態は助手である健一らがなんとかカバーしなければならない。彼は芽衣の方を見て、にっこりほほえんだ。

「お前、それもなんとかしてくれないか？ これも予算つきだ」

「人手もつけて欲しいな」

「そうだなあ、助手として、倉島はどうだ？」

「いやよ、あんな人」

「じゃあ、東海林にでも頼もうか」



## 8. 罾《わな》



## 8. 罾《わな》





(1)



## (1)

九月になり、高校がはじまると塾の講師をしていた麻衣子は段々と暇になってきたらしく、芽衣に頻りに電話をしてくるようになった。軍資金も貯まったしどこかに遊びに行こうという、お誘いである。大学は十月からはじまるので、芽衣としてもどこかに遊びに行きたいという思いは一緒だったが、何ぶん、あれこれと用事が立て込んでいて忙しかった。

九月五日に、芽衣の携帯電話に小林から電話が掛かった。

「もしもし、あれ、小林さんですか？」

「ああ、今日退院したんだ。会えないか」

そんなことを言われて少し嬉しくもあり、でもすぐに飛びつくのも軽く見られるかなど、気を回したりして返事できなかった。

「あの、小林さんて本当は警視庁の刑事さんじゃないんですね」

今となっては、もうどうでもいいことを聞いてみたりした。

「刑事だよ」

「あはは、……」

芽衣はなんと返事していか分からなくなった。

「公務中の負傷だったから、しばらく休みが取れるんだ」

彼は白々しい嘘をついていると思ったが、まだ怪我も治っていないはずなのに、頼ってこられると、やっぱり嬉しかった。

「今どこにいらっしゃるんですか？」

「羽田空港のバスターミナルだ。病院を抜け出したとこだ」

「ええ？ まじですか。怒られるんじゃないですか？」

「誰が怒るんだい。患者がいいと言ったらそれでいいんだ。それで、この間の捜査の続きだが、君に手伝ってもらいたい」

「あの、羽田空港って言うことは、どこかに行くんですか？」

「情報提供者と会うことになっている。それに、宮崎の鑑識に行って林崎のパソコンの調査結果をもらわねばならない」

「え？」

芽衣は何度も聞き返した。まるで、これから飛行機に乗って宮崎まで行くという風にか聞こえないし、傷口が塞がっていない小林が果たして飛行機に乗れるのかという疑問と、なぜ、自分がそこまで協力的にならなければならないのかという問題に突き当たる。

でも、やはり小林の力になれることにわくわくする気持ちが勝っていた。

出勤前の健一に、ICチップのボードの調査のために宮崎県警に行きたいと、承諾を求めた。

「おいおい、朝からそんなこと言うなよ」

と、健一は渋った。

「でも、しなくていいのかな？」

「まあ、やってもらった方が助かるけど、メールで出来ないのか？」

「駄目よ、ただでさえ機密漏洩が厳しく問われているんだから」

芽衣は、この問題が山本教授の失態から起こったもので、それをカバーするためにみんなが動き回っているのだと主張した。十五分くらいの間、健一はああだこうだと、芽衣を説得したが、話の種がつきてしまった。

「わかった。行っていいけど、報告の電話をちゃんと入れろよ。予算は先週渡した商品券を使っていい」

新たな調査費として、一万ドルに相当する百二十万円を預かっていた。

「ありがとう。最初にもらった六十万円は、これとは別に自由にしているの？」

「いいけど、無駄遣いするなよ」

健一は気持ちよく送り出してくれた。芽衣は旅行鞆にしばらく向こうで過ごすための、着替えと洋服を詰め込み、バッグにはノートパソコンを入れた。

横浜の病院と違い、羽田空港へは山手線浜松町で乗り換えて、モノレールに乗って三十分ほどだ。でも、芽衣は飛行機は初めてだった。高校の修学旅行は列車で信州だったし、中学も列車で広島原爆祈念公園だった。羽田空港へは、小学校の遠足で見学に来たことがあるが、乗ったのは初めてなので、チェックインカウンターから先の部分は未知の領域だった。

芽衣は携帯電話で小林の居場所を聞き、そこに移動した。

「悪かったな」

「いえ」

小林はカッターシャツにパンツ、紺のジャケットに安そうなネクタイをしていた。荷物は大きめの茶封筒だけだった。

「あの、随分と軽装なんですね？」

「備品がないんだよ。金を持っているか？」

彼はそう言い、芽衣から金を巻き上げて、もう少しよさげなスーツと、ビジネスバッグを空港の売店で買い求めた。芽衣は残りを気にしていた。

「武器も欲しいが、日本では入手不可能だな」

「県警で借りたらいかがですか？」

「まあいい、行ってから考えよう」

芽衣は初めての飛行機にわくわくしながら、小林が手続きをした搭乗券を手にして、カウンターに行き搭乗手続きを済ませた。旅行カバンは預けてしまったので、荷物はバッグだけだ。芽衣は小林を誘って、空港内のハンバーガーショップに誘った。

芽衣が適当に、チーズの入ったものと、トマトも入ったものを選んで、アイスコーヒーとコーラのセットを買ってきた。ポテトもちゃんといっている。

テーブルについて、小林は大きい方のハンバーガーを口にした。芽衣はそれを楽しそうに眺めた。

「それで、宮崎ではどこに行くんです」

「宮崎市内のジャパニア倶楽部ホテルを取ってある。そこをしばらく活動拠点にするつもりだ。君もいてくれ」

「でも、あたしがいると、ほら、あたしまだ、未婚女性じゃないですか？ 友達を誘って滞在してもいいですか？」

「この話を知られては困る」

「同じ大学の女の子だから大丈夫です」

小林が時間だといひ、先頭に立ち、検札機の前に立っているお姉さんに搭乗券を渡し、羽田発宮崎行きに乗り込んだ。

芽衣がわくわくしながら、中に乗り込もうとすると、飴をもらった。中を見ると、予想していたよりも小さかった。いわゆるジャンボジェットではなく、中型ジェットだ。富士山が見えるかなと期待して窓際に座らせてもらった。

乗り心地は芽衣が想像していたより悪かった。滑走路での加速はジェットコースターみたいだし、窓の外風景も、すぐに雲を突ききり上空に出てしまおうし、上空だと太陽と雲しか見えなかった。

「期待していたのか？」

小林が馬鹿にした目で聞いた。

「ええ、とつても」

「雲が多い日は、何も見えない」

小林はそう言って、キャビンアテンダントからもらったコーヒーを一口飲んだ。

「あの、小林さんは、なぜ休暇中に捜査などなさるんですか？」

「仕事人間なのさ」

「ひょっとして、失脚したんですか？」

芽衣が、詮索すると小林は怖い目でにらみつけた。

「子供のくせに生意気なことを言うな」

「今回のスポンサーは、その子供である、あたしですよ」

芽衣も負けていない。

「ふん、ジョン・マッケイは俺に帰国するよう命じてきた。まだ、終わっていないのにな」

「え、……… どうして？」

「彼は官僚的だが、馬鹿ではない。何か事情があるんだろう。しかし、俺は俺で、ミッションを途中で終えて、出来ませんでした、すみません、などと言う報告をする気はない」

「へえ、でも、そんなことする義務があるんですか？」

「お役所のようなことを言うな」

「はぁ」

「よく考えろ、命じられたからと言って投げ出した実績など何の役にも立たないが、成功した実績は首になってから生きてくるんだ。一生同じ会社に勤めるのなら、どっちでもいいことだが、転職を前提に考えるんなら、君もそうすべきだ」

「なるほど、いいこと言いますねえ」

もらった飴を口の中でなめながら、喋っていると、飛行機は着陸態勢に入るアナウンスを流した。一時間半の空の旅が終わってしまい、芽衣としては少し名残惜しかったが、でも、これ以上の時間は乗れないなど思った。

宮崎空港に着いて、リムジンバスに乗り大淀川近くにあるジャパンエアー倶楽部ホテルに行く途中で芽衣は麻衣子に連絡しようと、電話を取り出して電源を入れたが、小林にその手を押さえられてしまった。

「え、何するんですか？」

「悪いが、誰にも知らせないで欲しい。情報が漏れれば漏れるほど失敗の確率は高くなっていくんだ。わかるだろう」

小林は芽衣の顔にくっつきそうなくらいに口を近づけてささやいた。以前なら突き飛ばしていたかも知れないが、耳元に彼の息が掛かると嬉しく感じるくらいに自分が変化していた。

「あの、じゃあ、一緒に泊まるんですか？」

「もちろん部屋は別にする」

「そうなんです」

「でも、誤解はするなよ。どちらかが襲撃されても生き残れるように、そうするんだ」

少しだけ期待してしまった芽衣だが、現実は厳しそうだと思った。

ホテルに着いてからすぐに、小林はフロントに行き警視庁の名前を使って、二部屋とって、荷物を運んだ。小林の方は大した荷物はなかったが、芽衣はノートパソコンを充電すべくコンセントに接続してから、洋服をハンガーに掛けておいた。

部屋に通されているプラグにLANケーブルをつないでインターネットにつながるように設定をいじっていると、電話が鳴り、小林に呼び出された。

(2)





## (2)

宮崎県警本部の鑑識課に、この間、逮捕した林崎技師の部屋から押収したパソコンやファイル、ICチップの類の調査結果を聞きに行く必要があったのだ。小林の話によると、東京の警視庁捜査一課の長岡警部補に届いたのは、報告書一枚だったらしい。怒る気持ちは分からないでもないが、林崎も偽物と分かっていたし、本当に有用な情報など得られなかったに違いない。

芽衣はホテルに露天風呂がなかったのを不満に思いながら、ロビーに出てソファに腰掛けて小林を待っていた。今日は紺のジャケットに白のブラウス、紺のスカートに黒のパンプスという、やや、フォーマル気味の格好で出てきていた。小林が空港で買った紺にストライプのスーツしか持っていないのは知っていたので、あわせたのだ。

「おい、タクシーで行こう」

小林が芽衣を見つけて声を掛けた。

「歩いた方がいいんじゃないですか？ ただだし」

「時間ももったいないぜ。来い」

彼はフロントに行き、タクシーを呼ぼうとしたが、少し迷って外出するとだけ言い、キーを預けた。

「あれ？」

「ただだから歩くんじゃない。痕跡を残さないためだ」

結局歩くことにした。十五分ほどの距離だったが、傷口の塞がっていない小林には少しつらいだろうと思った。

県警本部は宮崎県庁のある通りの近くだ。林崎の住所から言うと日南警察署の管轄だが、実質のスパイ容疑だったので、小林の指揮の下で県警本部が動いたのだ。押収したパソコンは鑑識課が解析していたらしかった。

小林が芽衣を連れて、捜査課を覗くと、田所という刑事が出てきた。

「小林さん、もういいんですか？」

「ああ、何ともない。彼女は知っているね」

「ええ、あのときはどうも」

と、彼は頭を下げた。芽衣はフェリーで青野の護送に当たっていた刑事の顔を思い出し、名前も聞いてなかったことに気がついた。

「こちらこそ」

芽衣は何だか恥ずかしくなった。こんな年上の人であることを失念して、偉そうに無線で指示していたのだ。

「それで、林崎の取り調べはどうなっている？」

「ええ、至って普通の人間です。例の預金通帳への青野からの入金も、昔の借金を返してもらったの一点張りなんです。でも、ですね」

「あの、脱税容疑なんかで大丈夫だったんでしょうか？」

芽衣は心配になり口を挟んだ。

「ええ、本当に無実の人間だったらとっくに喋っているんですよ。それが、二週間以上も耐えているなんて、筋金入りですよ」

彼は、違法捜査であることを臭わせつつも、彼がプロの工作人員であることを前提に話している感じだった。

「三年以前より古い記録は何か見つかりましたか？」

「それがねえ、彼には親しい人がいないんです。だから、スタッフが入れ替わったのかもしれないんですが、離婚した奥さんは面談を拒否しているし、会社関係もいまいちはっきりした証言がないんです」

「そんな馬鹿な？」

「いや、人間の証明って意外と難しいんですよ」

「確かにそう言う面はある。だが、彼が本物の林崎でも偽物でもどっちでもいいんだ。ICチップの情報を漏洩した人間であるかどうかだ」

「押収したブツですが、鑑識で分析しました。これから行きますか？」

「当然だ」

小林は田所をうながして、エレベータに乗った。

林崎の部屋にあったパソコンと周辺機器は一通り調査を終えて、ビニル袋を掛けられて、鑑識課の隅のテーブルに積み上げられていた。

田所は鑑識課員の男を紹介した。

「鑑識課の沢口です。遠いところをわざわざすみません」

「いえ、長岡に送って頂いた鑑定結果をちらっと見たんですが、ファイルの名前だけです」

「すみません。報告書にするとあれくらいのことしか書けないんです。まあ、おかけ下さい」

彼は三人に椅子をすすめた。

「メールのデータは小林さんの仰有るとおり、二年前から青野や他の女性との間で行われていますが、電話の続きであったり、あるいは、肝心なことを電話で行っていたと思われ、これだけでは、推測の域を出ないんです」

「それで、東京には余計なものは送らなかった。そうだね？」

「はい。それで、推測できたことですが、口頭で申し上げます」

——彼の解析結果も、芽衣と同様に、林崎が二年前からこのパソコンを使って、青野

とメールのやりとりを行い、回路図の断片らしきものをデータ送信していたと言うものだった。

女性のうち、佐伯美穂と小野千尋は、青野を通して知り合っていて、深い関係にあったと思われた。一点おかしいのが、過去のメールのうち、百通に一通の割合で海外から転送されたメールを林崎が受け取っていた。

田所はそう説明した。

「あの、海外からの転送メールって日付はいつですか？」

「記録では六月三十日から以降です。行方不明の情報と時期は重なるんですが、何の証拠にもなりません」

「では、青野さんが、林崎技師の周りの女性たちを取り仕切っていたというわけですね」

「それも、推測でしかないのです。逆に佐伯美穂が青野をコントロールしていたとしても、この話は成り立つんです。小野千尋でも一緒です」

「じゃあ、その女性の身元なんかは確認済みなんですか？」

芽衣が聞くと、彼はそれは刑事部の仕事だという顔で田所を見た。

「はい、佐伯美穂は市内の大学生です。賃貸マンションに住んでいたことまでは確かめたのですが、この事件のあと、行方が分からなくなっています」

「親元は？」

「不思議なことに、入学以来一度も帰っていないと言うんです。搜索願を出してもらいました。もう一人の、小野千尋ですが、こちらは宮崎郡内に居住していたようですが、こちらも一人暮らしで身よりはいませんでした。近所の人話では二ヶ月前から行方不明です。何だか林崎と同様に、周りに本人だと証明してくれる人間がいないので、困っているんです」

田所は困った顔で芽衣を見たが、そんなことを言われても困ってしまう。

「では、青野さんの残したパソコンからは何か出ましたか？」

「ええ、こちらは一度消去された様ですが、解析は可能でした。海外と英語でやりとりしています。やはり、スパイだったと言うとおりに、技術情報のリクエストと林崎からのファイルの入手です。海外の相手は複数ですが、彼をコントロールしていたのはハンニバルというコードネームと、ハン・ジョンナムという名前を使っています」

これは、芽衣が分析した林崎のパソコンと同じだった。

「小林さん。北朝鮮の作業員でしょうか？」

田所が聞いた。

「ふむ、その名前が朝鮮半島系の名前の英語表示だと言いたいのだろう。あまり、物事を単純に考えない方がいいと思うぞ」

「しかし、弾道ミサイル防衛システムへのスパイなんでしょう？」

「だから、その技術自体は世界中引く手あまたなんだよ。最悪の場合テロリストだってあり得ると言っているんだ。確かに北朝鮮作業員が犯人なら、あとの処理は非常にわかりやすい。今の経済制裁を一步進めるという外交手段だけでいいんだからな」

芽衣は横で、二人のやりとりを聞いていたが、段々と、行方不明になっている二人の女性と、本物の林崎の身の上が気の毒になってきた。ここで、残されたパソコンの解析なんかしていても何も出てこない様な気がしてきた。

小林は青野の店の二階と、林崎の単身赴任寮の部屋の、他の遺留品について鑑識の沢口を問い詰めた。

「ええ、指紋などは出てきているようです。本人の他に、女性と思われるもの。それから、毛髪、衣服の繊維、生理用品、着替えの下着が本人以外のもの。多数ありますが、これだけでは誰のものかは分かりませんでした」

芽衣と小林は同時にため息をついた。

——これ以上調べても無駄だ。

林崎ですら、最後の一ヶ月間が本人だったのか、誰かがすり替わっていたのかすら、この人の出入りの多い会社では分からなかったのだ。分かるのは少なくとも最後の一ヶ月前までは、青野と接触してICチップの情報を流し続けていたことだ。しかも、二年にわたってだ。

(3)



### (3)

宮崎県警本部を出た、芽衣と小林はしばらく時計を見ながらぶらぶらしていたが、小林が先に話を始めた。

これから、誰かを呼び出していると言う。芽衣はいつの間に、と、思ったが、説明を聞いた。

「情報屋のじいさんなんだが、実を言うと、よく知らないんだ」

「え？ それって情報の価値ゼロなのでは？」

「大使館にジョン・マッケイというのがいただろう。彼の知り合いなんだ。だから腕は確かだと思う」

「え？ 今回はマッケイさんには何も知らせずに動いているのではなかったですか」

「そうだよ、だから、マッケイの振りをして呼び出したんだ。どちらも訛りが似ているからね」

「へえ、生まれはどちらなんですか？」

「秘密だ」

小林は簡単には口を割らなかった。芽衣はここまで付き合わせておいて水臭いと思ったが、下手に聞き出して後から命を狙われてもおかしくなさそうだと、思いとどまった。

情報屋のじいさん、と、小林が呼ぶ男性が現れたのはホテルのラウンジだった。芽衣はまだ未成年だったし、たとえ二十歳になったとしてもこんなところに来ることはないだろうと思った。それでなくても洋酒とカクテルしか置いてないし、いささか手持ちぶさただった。

芽衣がオレンジジュースに刺さったストローを吸い込んでいるときに現れたのは、六十代後半の小綺麗な、しかも、派手なシルクのシャツを着込んだ浅黒い男だった。老人と言うには、まだ少し若い感じがしたし、中年と呼ぶには成熟しすぎていた。

地元のおじさんかと、推測したが、彼は小林に英語で話し掛けた。

芽衣は英語がそれほど得意ではない。高校に英会話クラスがあったので、そこで習っただけであり、アメリカ人同士が話すのを横から聞き取ったり、あるいは楽しそうだから話に割って入ったりするほどの英語力ではない。

しかし、彼と小林の会話は聞き取ることが出来た。流暢な英語だったが、アメリカ英語ではなさそうだった。

「紹介しよう、香港のピーター・ヤンさんだ。こちらは、わたしの雇い主のミス・クロサワです」

小林がゆっくりとした英語で芽衣をヤンに、ヤンを芽衣に紹介した。

「ミスター・ヤン、あなたはイギリス人ですか？」

芽衣は興味深げにたどたどしい英語で尋ねた。

「香港生まれの中国人です」

彼はそう言って、にっこりと笑った。見かけは派手目の中国人だったが、女性に対する態度は西洋人そのままだ。

小林はウェイターを呼び、自分のグラスのお代わりと、ヤンに注文を聞きスコッチを頼んだ。芽衣は頼まなかった。そんなにジュースばかり飲めるものではない。

「ヤンさん、それで情報屋としてのあなたに仕事を依頼したいのですが」

小林が本題に入った。

「待って下さい。小林さん。わたしは今回、マッケイ大佐の依頼と思ってこうして来たのです。あなたの雇い主がこのお嬢さんと言いましたね。どういうことですか？」

ヤンは少し態度が曖昧になっていた。

小林の情報では、ヤンは元イギリス情報部の情報屋で、東アジアで活動していて、現役引退後はフリーの情報屋として金で動いている。マッケイは三年前に東京に赴任したときから、彼を必要ときだけ雇っていた。情報屋という職業柄、誰の下でも働くと言うわけにも行かず、万が一にも利害関係が対立する相手に身元がばれたら命を失うこともあり、だから、雇い主については敏感だったのだ。

今回、ジョン・マッケイはこの問題から真っ先に手を引いてしまっている以上、小林は彼を単独で雇わなければならないし、雇ったことをマッケイに知られるわけにも行かなかった。

「その通りです。今回の仕事のスポンサーはこのお嬢さんです。作戦はわたし。それであなたには手足となって情報収集、および、工作に当たってもらいたいのです」

「なんですって。冗談もほどほどにして下さい」

ヤンは、ウェイターが持ってきたスコッチに手もつけず、席を蹴りそうな気配だった。芽衣は相手が小林以上に海千山千の曲者であることを心配していた。素直に引き受けてくれないのは、単に仕事料を釣り上げようとしているだけなのか、本当にやる気がないのか、さらには、やったら危険が及ぶと懸念しているのかを見極めなければならない。さもないと、こちらの依頼内容をよそに漏らされると、マッケイにまで秘密にしてここにまで来た理由がなくなってしまう。

「ヤンさん、まずは仕事内容と金額の話から入りませんか？」

小林は芽衣を引っ掛けたときとはまるで異なり、紳士的な交渉を始めた。

——あたしのときは、どうしてあんな強引なことをしたんだろう？ と、芽衣は少し不満になった。



「ミスター小林、あなたは最初から嘘をついている。話には応じられない」

ヤンは頑なだった。芽衣には理由がぴんと来た。小林が電話でヤンを呼び出したときに、完璧にジョン・マッケイを装ったに違いなかった。完璧なマッケイの訛りと声色、話し方。それをヤンはプロの情報屋でありながら見破れなかったのだ。騙されたことより、プライドを傷つけられたことに怒っている、と、芽衣は感じた。

「あの、ヤンさんはベテランの情報部員だと伺っています。今回是非、お力をお借りしたいのです」

芽衣は無難な言い方でフォローした。女性から頼んでみる方がいい場合も、時としてはあるし、さっきも、ヤンは芽衣に紳士的だった。

「正直申し上げると、あなた方のやっていることが素人のお遊びに思えてならないのですよ。そんなことに首をつっこんで命を失う。末代までの恥です」

それでもヤンはきっぱりと断った。

更に、ヤンは自分が素人ではないと言わんばかりに、あらかじめ、小林と芽衣の経歴をきちんと調べていた。小林がロス生まれの日系アメリカ人で国防省情報部で長年ジョン・マッケイの右腕を務め、現在はワシントンオフィスに席を与えられて出世コースに乗っている情報担当将校であること。芽衣の経歴は女子高時代のものから調べられていた。ほぼ、完璧な仕事ぶりだった。

「では、この話は聞かなかったことにしておきましょう」

ヤンは悠々と、グラスを手に取りぐいっと飲み干した。

「もう、一杯いかがですか？」

「では、お言葉に甘えて、でも、気は変わりませんよ」

しかし、小林はヤンが勝利の美酒に酔いしれるのを許すような男ではないと、芽衣は思っていた。何となく悪い予感がする。目的のために手段を選ばない主義ではないと本人は言っているが、それも、時と場合によると芽衣は経験的に知っていた。

ウェ이터がスコッチのお代わりを、ヤンの前に置いて一礼して下がっていった。芽衣はオレンジジュースをごくりと飲んだ。

小林は上着の内ポケットを探り、茶色の封筒を取り出した。芽衣はそれを見て、——お、来たね来たね、と期待した。

「何です、これは」

ヤンは目の前に出された封筒を見て、ポケットから老眼鏡を取り出した。

「ワン・シャオ・フーという学生を御存知ですか？ カリフォルニアの大学の留学生です」

ヤンは封筒の中の三枚の写真を見て顔が青くなった。小林の質問には答えなかった。「彼は麻薬所持で逮捕され、先週刑務所に入りました。二枚目の写真は彼と同じ房に入っ

ているダンディーな男です」

小林は淡々と説明した。芽衣が興味深く写真をのぞき込むと、かわいらしい東洋人の男の子と、ダンディーとは言い難い、頭がはげて赤ら顔をした見るからに汚い中年男がいた。

これを見てヤンの青い顔は、真っ赤になった。怒り心頭になったのは見て取るように分かった。

「お前、シャオ・フーに何をしたんだ。彼は麻薬などする子じゃないぞ、えん罪だ、はめられたんだ。まさかお前じゃないだろうな！」

ヤンは汚い英語でまくし立てた。

「警察はえん罪と知っていて逮捕することはありません。いや、あってはならないことです。ですが、起こってしまったことは仕方がありません。後は彼が無事に出所する日を待つのみです」

小林がそう言うと、ヤンはため息をついて地面に座り込んだ。

「取引に応じよう。ただし、シャオ・フーを即時釈放することが条件だ」

「おいおい、勘違いしてもらっては困りますよ。わたしは情報将校、逮捕したのは警察です。いくらわたしでも彼を釈放する権限はありません」

「おい、調子に乗るな。俺に何をしろと言うんだ？」

「簡単なことです。ウラジオ・ポストーク社の雇っているハンニバルというエージェントに会い、警告を発してもらいたいです」

「ふん、何かと思えばそんなことか。ハンニバルは使いっ走りだ。実質の雇い主はウラジオストックにいる」

ヤンは細かい事情を知っているようだった。

「では、我々が、その雇い主と会見できるよう、あんたが商社員を装って、商談をセットアップしてきてもらいたい。着手と同時に、シャオ・フーの身柄を他の囚人から隔離し、任務完了を確認したら司法省にいる友人に頼んで彼を解放する」

「いいだろう。約束を破ったときにはお前たちの命はないからな、それから、二度とこういう真似をするなよ。俺の友人たちに対してもだ」

「いいとも。今回はヤンさんが言うことを聞いてくれないと思ったから、少し無理をしたんですよ」

小林が手をさしのべ、握手を求めたが、ヤンは拒否した。

芽衣は、このかわいらしい男の子が誰なのか知らなかったが、ヤンの関係者であることは想像が付いた。えん罪で刑務所にまで入れたらしいが、相変わらずやることがえぐいと思った。

後で小林から聞いた話では、少年はヤンの別れた奥さんが連れて出た娘の長男で、たった一人の血のつながった孫らしかった。留学してカリフォルニアに住んでいるのも本場で、小林が現地警察を動かして引っ張ったのも本当らしかった。ちなみにあちらの刑務所では、少年が中年男たちにレイプされるのはざらにあることで、イギリス情報部の仕事をしてきたヤンならそういう事情も知っており、なおさら心配を募らせたらしかった。

これを聞いたとき、芽衣はやっぱり小林が血も涙もない男だと思った。

「では、いくつか教えてもらいたいことがあるんですよ」

「ふん、今更、教えるだと？」

「ウラジオ・ポストーク社は北朝鮮のキルジュンに材料部門の子会社を設立していますね、さらに、レアメタル市場に製品を流している。親会社はモスクワに本社を持ち、ウラジオストックに電子機器工場がある。これ以上の情報です」

「その会社のCEO、最高経営責任者はプチャーチン大統領の一族だ。番頭はトレンコフという男。プチャーチンがKGBにいた当時の右腕だった奴だ。ちょうど、あんたとジョン・マッケイとの関係に似ているな」

「現在各国が行っている経済制裁をウラジオ・ポストークはどうやってぐりぬけているんだ？」

「ふん、おたくのマッケイに聞いたらいいだろう。制裁に積極的なのは利害関係のない日本だけだ。海上封鎖をしたところで、ロシアとはトラック輸送でつながっているし、中国、韓国とは鉄道でつながっている。まあ、これは物理的な手段であんたの質問の答えにはなっていない。このレアメタル部門には海外からの投資資金が入っている。十億ドル単位の金が動いている。その中にはアメリカ人もいて、背後には投資ファンドがある。投資ファンドに金を出している奴らの中には、与野党を問わず有力議員が入っている。CIAですら手が出せないのはそう言う理由だ。民主主義万歳だな」

「おいおい、マッケイ大佐まで手を引いたのはそう言うわけかい？」

「ミスター小林、わたしの前でその件は、口にしない方がいい。それでもマッケイの友人なんだ」

「因みに、投資資金はアメリカだけなのか？」

「まさか、レアメタル産出国は公式にはロシアと中国だけだ。他にも宝の山があるとなると誰でも儲けたくなるだろう。中国にもいるし、イギリス下院議員にも加わっているのがある」

「なるほど、それで、今回、北朝鮮とおぼしき工作員が弾道弾防衛ミサイル機密を盗んで売り飛ばした後に合衆国に亡命した。この工作で何人も人が行方不明になっている」

「その件については知らない」

「工作員のメール相手にハンニバルというのが入っている」

小林が指摘すると、ヤンは知らないという顔で天井を向いた。手を頭の上で組んであくびをした。

「ほほう、CIAの連中も嵌められたんだな」

「やはり、そうか」

小林も目の前のグラスをぐいっと飲み干して、ウェイターにもう一杯注文した。芽衣はウーロン茶だ。ジョン・マッケイは正確にはCIAではないが、彼もあの事件をステレオタイプな北朝鮮工作員の亡命劇として片付けてしまっていた。もっとも、この事件を深く掘り下げれば、いずれは、あの鉱山会社に投資している、議員たちと衝突することになり、政権の運営も頭の隅に置いておかなければならない彼の立場からすれば、知っていて知らない振りをしたのかも知れなかった。

ヤンは、小林の顔色を見て少し高い酒を注文した。二人ともグラスに注いだものをそのまま飲んでいる。芽衣はラウンジなどに来たことがなかったので、ウィスキーをどんな風に飲むものかは知らなかったが、それにしても飲み過ぎだと思った。こちらは、さいぜんからウーロン茶でお茶を濁している。

「具体的な指示を出してもらおう」

ヤンは、やっと仕事の話に入った。

「トレンコフという男と、どのくらい親しいんだ？」

「ベルリンの壁が崩れたときからだだが、敵役が多かったな。でも、会って話せないこともないぜ」

「彼と話がしたいんだ。どこかで会えないか？」

「ふむ、それは可能だと思うが、……」

ヤンは言葉を濁した。

「何か問題があるのか？」

「お前さんに死なれると少し厄介だ」

小林と芽衣は吹き出して笑ってしまった。この老人は、孫を人質に取られていることを本当に心配していたのだ。笑ったことは謝ったが、どこでもいいと答えた。

「いいだろう。ここに呼んでやる。日本の企業が金に糸目をつけずにレアメタルを買い取るという商談を持ちかける。でも、後は知らないぜ」

「それでいい」

「あの？」

芽衣も、バッグの中から封筒を取り出した。

ヤンは、またかと言う、渋い表情をした。

「わたしの孫は一人だけです。お嬢さん」

彼は皮肉を言った。

「いや、恐喝じゃないんです。この中のスティック・メモリーをですね、相手の使っているパソコンに突っ込んで、認識したら引き抜いて欲しいんです。後は捨ててください」

「ウイルスでも入っているのか？」

「まあ、そうです。でも、大日本エレクトロニクスのレーダー関連製品のカタログで偽装しているので、気づかれないかもしれません」

「その自信があるのなら、奴の目の前で入れてやるよ。進呈してもいいんだろう？」

「そうですねえ、どのみち最後はばれるようになってますから」

「よし、話はそれだけだな」

「あの」

「まだ、何か？」

「ギャラの話が済んでないのですが」

「ふん、人質まで取られて、ギャラもないだろう。ない方が後で殺しやすい」

ヤンにそう言われて、芽衣はぶるっと震えた。





(4)





## (4)

仕事を引き受けたヤンはその足で、ホテルを出てしまった。このまま空港に向かい、第三国経由で、ハンニバルを雇っていたという男に会うつもりだ。芽衣と小林はこのまま、夕日を眺めながら、ホテルのラウンジでぼんやりしていた。

ヤンに渡したスティック・メモリーには、カタログに偽装してウイルスが仕組んであった。先週に、東海林に頼んで作ってもらったPAC・NEOシステムのICチップを積んだ基盤を見つけ出すプログラムが入っている。仕組まれたらネットワーク内に入っている基盤を積んだパソコンや端末のネットワークアドレスを送信して、外部からのコントロールを受け付けるようになっているのだ。具体的には、ハンニバルを雇っていた男が流出させたPAC・NEO基盤を積んだパソコンを外部から乗っ取るウイルスになる。

どのくらい基盤が出回っているのか、そして、ハンニバルからどのくらいウイルスが拡散していくかが気に掛かるところだ。倉庫に積みっぱなしならそれに越したことはないのだが、行方知れずでは報告のしようがない。芽衣は難しい顔で時間つぶしをすることになった。

「おい、散歩しないか？」

小林が珍しく、芽衣を誘った。

「散歩って、小林さん、もう傷は痛まないんですか？」

「何ともないさ、ホテルの前に川があるじゃないか」

「大淀川ですね」

「詳しいな。知っているのか？」

「いやだ、友達がこっちにいて、この間しばらく泊めてもらったじゃないですか。大淀川に橘公園の街路樹が素敵ですよ」

何となく、小林とは長いつきあいのような感じがしていたが、よくよく考えると、芽衣とは彼が捜査のためにやってきた、山本教授の部屋で出会ったのが初めてで、そのときからも一月ほどしか経っていない。そして、いつも、小林から呼び出して強引に芽衣を連れ回すパターンが多かった。

——散歩に行かないか？ などと、同意を求める聞き方など、初めてだった。もっとも、おい、とは前から言われていたのだが。

芽衣は喜んで、——行きますと答え、バッグを肩に掛けた。

ホテルから外に出ると、まだ、蒸し暑くて芽衣は上着のジャケットを取り、手で持つ

て歩いた。川岸にまで出ると、海からか山からか分からないが、涼しそうな風が吹いていた。いや、実際には暑いのに変わりはないのだが、雰囲気だけ醸し出している。

「何だか初めてのデートじゃないですか？」

芽衣がおどけて言った。

「ああ、どこか、……そのベンチで座ろうか」

「はい」

芽衣は、いそいそとハンカチを広げた。小林は知らん顔だ。

——ホテル内は盗聴されるかも知れないからな。

小林はつぶやいた。

——え？

信じられない、と、言わんばかりの顔で芽衣も小声で聞き返した。聞こえてはいたが、もう少し雰囲気を出して欲しかった気がした。

「じいさんがトレンコフに会えばハンニバルは消されるだろう」

小林がボソッと芽衣に話した。目は川面の方を向いたままだった。

「消すって？ どうして分かるんですか？」

「トレンコフには会ったことがないが、プチャーチン大統領の右腕として長年信用されていたのなら、手下のスタッフが亡命して、更に、その真の目的が相手に見透かされたとなつては、証拠を残さずに撤退するだろう。必ずと言っていい」

「じゃあ、右腕同士の戦いになるんですね。カッコいい」

「真面目に聞け」

「すみません。プチャーチン大統領って悪者なんですか？」

「根はいい人だと思うよ。自分に都合の悪い奴を消すだけで悪意はないと思う」

——それって、十分悪人じゃん、と思った。

「そう言う意味じゃなくて、仮にこっちが騙された振りをしていれば、ハンニバルもトレンコフさんにも害はない訳ですよ」

「そうだよ。でも、そうなると、俺とジョン・マッケイが騙されたことになり、こっちが干されてしまう。マッケイ氏はうまく手を引いたつもりでいるが、相手がトレンコフだと知っていたら手は引かなかっただろう。彼はいい部下を持って幸せだった」

「それって、あたしのことですか？」

「俺のことだ。まあ、成功したら君も入れてやってもいいぞ」

「じゃあ、トレンコフさんに会って、彼を殺すんですか？ それとも、お得意の恐喝ですか？」

「皮肉を言うなよ。恐喝のネタがないんだ。何か考えてくれ。さもなくば強行手段を用いる」

小林はそんなことを言い出し、芽衣は川崎に向かうフェリーの上で、彼が最初に上がってきた先頭の兵士にありったけの銃弾を浴びせかけたのを思い出した。

「いつも、あんな撃ち方するんですか？」

純粋な疑問だった。

「そうだよ」

「情報部員って言うから、もっと洗練されたものかと思いました」

「だって、死んだときに弾倉に弾が残っていたら恥ずかしいじゃないか」

彼には彼なりの美学があるようだった、が、芽衣には理解できない。

「あの、小林さんて、……奥さんはいらっしゃるんですか？」

なぜだか、聞くときに少しだけ胸がときどきした。

「いるよ」

「どんな人なんですか？」

小林が結婚していることに、ショックを受けつつ、どんなひとなのかも、すごく気になった。

「俺なんかにもったいないくらい素敵な女性だ」

彼はにこりともせず、そう言った。芽衣は打ちのめされた様な気がした。日本人の男性でここまで奥さんをよく言う人はいないと思ったし、最近の小林の表情のわずかな違いから感情まで読み取れるようになっただけに、余計にショックだった。

「恐喝のネタですか」

芽衣は思っていることと、違うことを口にした。

「そう、じいさんが何か情報を持ってきてくれるかも知れないが、トレンコフにはプチャーチンの個人的信用という強い後ろ盾がある。君やじいさんの様な生半可な材料では、脅しにもならないだろう」

「あたし、嵌められたのが、小林さんでよかったなと思ってるんです」

——小林と出会えてよかった、と言う意味だ。

芽衣がそう言うと、小林は少し怖い顔になった。

「あのときは、最短時間で山本教授の胸元に入り込むために、あんな手段を使った。君には申し訳ないことをしたと思っている。この事件が解決したら、俺は別の国に行くことになる。あまり俺の記憶を残さないでもらいたい」

「そんなの、ずるいです」

——小林さんのことで胸がいっぱいなのに。

「大日本エレクトロニクスの情報をつかんだ後も、君を利用し続けたのは、ひとえに君が優秀だったからだ。他の感情はない」

小林にそう言われ、芽衣は泣きそうになったが、不思議とこらえることが出来た。かっこいい人の前で、出来るだけかっこいい女を演じたい。そんな感情があったのかも知れない。



## 9. ネゴシエーション



## 9. ネゴシエーション





(1)



## (1)

九月六日、芽衣と小林はホテルの別々の部屋に泊まり、食事の時間もタイミングをずらせ、会うときには、近くの大淀川の公園に限定していた。人に見られない様、盗聴されない様に小林が細心の注意を払っていたのだ。

芽衣としては不本意だったが、小林とは緊急の連絡だけ取れるようにして、一人でぶらぶらと宮崎の町を歩き回っていた。

友人の大西麻衣子とは毎日メールで連絡を取り合い、彼女が塾の講師を辞めて、暇になっていることを知ったのだが、小林からは会うことを禁止されていた。つまらないおしゃべりで情報が筒抜けになる、と言われてしまったのだ。

ぶるる、とバッグの中の携帯電話が振動して、小林からの連絡が入った。

「俺だ、これから県警に行ってくる」

「じゃあ、あたしも行きますよ。一応相棒だし」

「いや、少し不法行為をするので君は来ない方がいい」

「今更、水くさいですよ。それに、違法って何をするんですか？」

「港で密輸業者が摘発されたそうだ。押収物品の検査をする前に俺が検査をする。帳簿に載った後だと、責任を取らされる奴が出るからな」

小林は意味ありげなことを言った。芽衣は、小林がトレンコフという男に強硬手段を取ると言ったことを思い出した。武器か麻薬に決まっている。

一瞬止めに行こうかと思ったが、すぐに思いとどまった。小林はプロの情報部員だし、彼の足を引っ張るだけの女にはなりたくない、彼に最後の手段を使わせないように何か有効な手だてを考える必要があった。

芽衣は近くの公衆電話から大学の研究室に電話を掛けた。頼れるのは兄貴しかいない。

「あ、お兄ちゃん？ この間のプログラムなんだけど」

「お前か、今どこにいるんだ？」

「言えないのよ」

「まあいい。学生に監視させているけど、特に変化はないな。でも、これはあれだぞ」

「何よ？」

「相手のパソコンに仕込んでも、すぐに反応が出る性質のものではない。じわじわっただな、……」

「何だっていいのよ！ 相手につけいる糸口になればいいんだから」

「相手って誰なんだよ。IPアドレスで指定せよ、と言いたい」

「もういい」

そう言って、自分から掛けた電話だったが、切ってしまった。確かに兄貴の言うとおりに、このウイルスは相手のパソコンの中に入ってから、PAC・NEOシステムの入ったパソコンと通信して初めてインターネット上に情報をばらまいてくれるのだ。いつ、通信するか分からなかったし、他の端末からは独立して通信はしてくれないかも知れない、そして、PAC・NEO自体が作動していないかも知れなかった。

芽衣は、川沿いの公園のベンチに腰掛けて、バッグから旅行地図を取り出して広げた。宮崎のページを何度も開いたせいか、折り目がついている。付録についている日本全図を開いて眺めた。ここには、日本列島と中国大陸の東アジア部が記載されていた。

——ウラジオストックって北朝鮮と近いんだ、と、改めて思った。

夕方になり、芽衣がホテルのロビーで缶コーヒーを飲んでしていると、小林が帰ってきた。持っていたカバンが少し膨らみ、取っ手がたわんで重そうに見える。どう見ても大型拳銃のように思えて仕方がなかった。

ピーター・ヤンからの連絡はまだ来ない。

小林との交渉を終えた後、ピーター・ヤンはその足で香港に取って返していた。恐喝まがいに動かされることに腹を立ててもいたが、孫のワン・シャオ・フーの身がよほど心配だった様で、その日のうちに複数のエージェントを動員して彼自身がウラジオストックに飛んでいった。

トレンコフとの交渉がうまく行き、小林との「商談」の約束を取り付けてくれた。

その連絡があったのは、芽衣が待ちくたびれて緊張の糸も切れかけた九月十日だった。五日間ホテルと、近所の公園を往復して、誰とも話をせずにいたので、少し壊れかけている気がした。

ヤンからのメールを受けた小林が教えてくれた。

「本当ですか？」

「多分な、トレンコフは明日、東京経由で宮崎空港に来る」

「経由？」

「ウラジオストックからの直行便がないからだろう。途中どこを通るのかは知らないが、ヤンも一緒にいると言っている」

「へえ」

「お前のウイルスは何か動きがあったか？」

「どうでしょう？」

芽衣が自分のノートパソコンで、PAC・NEOウイルス管理画面を開くと、今日の昼頃から、ウラジオストックで動作を開始していた、はや、ハバロフスクにも感染している。時間が経てば経つほど広がっていくはずだが、広がりすぎて見つかると思われ

てしまうおそれがあるので、時間との勝負だった。

「小林さん、トレンコフですよ、多分」

「単純だな」

小林は芽衣の頭の上に手を置きながらそう言った。

「てへ」と舌を出した。

「多分、ヤンが何か罠を仕掛けてくれたんだろうな。こんなに簡単に引っ掛かったりしないだろう」

「罠？」

「ああ、あんなスティック・メモリーなど、怪しげなことこの上ない。そんな怪しいものを職場のパソコンに差し込んで後から何か事件が起これば、ヤンが怪しまれるし、後で命をねらわれる業界でもある」

「へえ」



(2)





## (2)

「商談」の場所はヤンから指定してきた。小林は自分たちとは別の一室を用意していたが、やはり、トレンコフが警戒していたらしかった。空港についたその足で、小林に連絡し、ホテルのレストランでランチミーティングの形式を取りたいという要望だった。

「ヤンさん、断れませんか？」

と、小林が電話口で話していたが、ヤンは最初の会合でもあるし、怪しまれますよと返事をした様だった。小林は渋々了承し芽衣に、十二時から予約を取る様指示した。

——トレンコフ氏のことについては少し驚くかも知れません。

ヤンはそう言って笑ったそうだ。そして、「商談」の少し前に会うことになった。

十一時五十分、ホテルの車寄せに、空港から来たタクシーが止まりドアが開くとヤンが先に降り、もう一人をおろすために自らドアに手をそえた。

小林と芽衣はホテル入り口に立って彼らを待っており、タクシーから降りたヤンにトレンコフを紹介された。

「ミスター・トレンコフ、こちらが大日本エレクトロニクス資材部の小林さん、それから、同じく黒澤さんです」

ヤンが二人をトレンコフに紹介した。小林は名刺を出して自己紹介し、芽衣も慣れない手つきで名刺を出してお辞儀した。名刺はあらかじめ小林が用意してくれていた英語表示のものだった。

小林は別に驚いてはいなかったようだが、芽衣はトレンコフが予想とは異なり、アジア系であることに意表を突かれる思いだった。元KGBという肩書きに、金髪の白人というステレオタイプなイメージを抱いていたのだ。

「こちらは、ウラジミール・トレンコフさんです。ウラジオ・ポストーク・カンパニーのウラジオストック支社長をなさっております」

「よろしくおねがいします」

簡単な自己紹介が終わり、ヤンはトレンコフを待たせて、二人をロビーの柱の影に連れて行った。

「ヤンさん、どうなさいましたか？」

芽衣は不審な顔で小林に続いた。ヤンは大理石模様の円柱の影に入ると、小林に注文をつけた。

「小林さん。この商談に入る前に、あなたの担保が欲しいのです」

「わたしが信用できないとでも言うのですか？」

「いいえ、あなたが信用できなければ、わざわざロシアなどに行ったりしませんでしたよ。それにわたしも微力ながらワシントンにチャンネルを持っています。孫を助けるのにあなたの力を借りることは絶対条件ではなかった」

「でも、時間がなかった。その間にひどい目に遭わされてしまう、そう考えたのでしょうか？」

「それもあります。しかし、あなたを信用してこの作戦の成り行きを見守りたいと言うのが本音でした」

「では、問題ないでしょう」

「いいえ、あなたは信用しますが、仮に商談成立せずにあなた方やわたしが殺された場合、孫の居場所すらわからなくなります。事前に何らかの保証が欲しいのですよ」

「そこまでお考えでしたか、……」

ヤンは懇願するような目で小林を見つめた。芽衣もその気持ちはわかった。あのフェリーの上で小林が遺書のようなスティック・メモリーを渡してくれなければ、彼が退院するまで警視庁へのハッキングに血眼になっていたに違いない。

小林は右手を自分の内ポケットに入れ、見覚えのあるスティック・メモリーを取り出して、ヤンに手渡した。

「ヤンさん。これを渡しておきます。遺書めいた書類ですが、暗号の命令書がマッケイ宛に書かれています。あなたのお孫さんを最優先で助けるよう指示しています。これをメールに添付してマッケイに送って下さい」

「ありがとう、小林さん」

ヤンは礼を言った後、今回わかったことだと、小林にメモを渡した。小林は芽衣にも見せ、その後燃やして灰皿の中に放り込んだ。

さすがに時間が掛かっただけのことはあり、調べるべきことは調べていた。

——トレンコフの本名は、ウラジミール・イワノビッチ・トレンコフ。出身はモスクワで、祖父の代に朝鮮半島から移住していた半島三世だった。家族内ではハン・ジョンナムの名前を使っている。

トレンコフの父親が共産党に入党し東アジアでの海外工作に手を染めていて、プチャーチンがKGB若手将校だったとき知り合い、彼を指導していた。父親が亡くなった後は、プチャーチンの推挙で海外工作部に入り、以来二十年KGBが解体されるまで関係は続いていた。

現在、トレンコフはハン・ジョンナムとして北朝鮮で労働党人民保安院内務部長を騙って工作員組織を築いている。この事件において使っているハンニバルと言う名は、彼が地元工作員を使うときのコードネームで、北朝鮮当局にも彼がロシア人と言うことは今のところ知られていない。

芽衣はトレンコフのしたたかさに舌を巻く思いだった。少なくとも自分の様な小娘が太刀打ち出来る様な男ではない。そして、青野らをはじめとする北朝鮮工作員をハン・ジョンナムの名前で使っているということは、この事件で行方不明になった人間がどこ

に連れ去られたのか、彼自身が白状しなければ全く糸口すらつかめないことになる。

「お待ちせしました。トレンコフさん。どうぞこちらへ」

ホテルのフレンチレストランだった。

十二時五分、芽衣たちは顔をそろえて、レストランの席に着いた。

未成年者なので、アペリティフと言われても、オレンジジュースしか飲めないが、料理は楽しみにしていた。

「さて、今回の商談は、大日本エレクトロニクスが、大量のレアメタルを買い占めたいと言うことでしたな？」

トレンコフはあくまで新興企業の重役を装い、アクセントのない英語で話した。

「はい、具体的にはタンタルとイットリウムです。最近需要が高い割に、精錬所メーカーからの納品すら横取りされてしまい、納期通りに入ってくないのが問題視されていてね、まずこれを何とかしようと言うのが、始まりです」と小林。

「価格さえ維持していただければ、大日本エレクトロニクスさんがお使いの量は供給できると思います、しかし、……」

「それは有り難い！」

トレンコフが何か続けようとするのを、小林が大げさに喜んで打ち消してしまった。芽衣もそれに合わせて揉み手をして、にっこりした。商談に何か条件をつけようとしたみたいだ。

ウェーターが前菜を運んできた。ホタテの蒸し物に、美味しそうなソースがかかっていた。彼はフランス語めいた言葉で説明したが、芽衣にはよくわからない。口に合えばそれでいいのだ。

芽衣は横にいる小林を見たら、フォークとナイフは左右きちんと使っていた。洋風マナーに左利きは関係ないみたいだった。

芽衣もフォークでホタテを押さえて、ナイフで一口分切り取り口に運んだ。新鮮なホタテの甘い香りが口の中に広がった。ソースが舌に染みこむ様に、こくがあってまろやかだった。

——こんなことしている場合じゃない。

「トレンコフさん。食事しながら聞いてください」

「ええ、ジョークなら大歓迎ですよ」

「悪い冗談で申し訳ないです。以前、当社の調達していた半導体原料が、納期直前に他社に横取りされたことがありました。材料メーカーがうちより十倍も高い値段をつけた、海外のメーカーに出してしまったのですよ。業界では有名ではないですか？」

「ほお、海千山千ですな。どういうオチがつくんです」

「オチをつけてもいいですか？」

「ええ、もちろん」

「犯人は、あなたが支社長をおつとめのウラジオ・ポストーク社でした」

「何かの間違いでしょう。うちは材料部門を持っています」

彼はすっとぼけていた。

「ええ、北朝鮮のクムガン山鉦山地区で採掘し、お宅のキルジュンの工場で精錬し、トラックでウラジオストックに運ぶ。あるいは、直接、顧客へ発送している」

「何を言っているんだ。不愉快だ」

「そう、御社は豊富な埋蔵量を誇る材料部門を抱えながら、なお、市場でも買い漁っているんです。冗談にしては悪ふざけが過ぎます」

ウェーターがワインを注ぎに来て、一瞬会話が途絶えた。

「まあ、当社の手違いで御社の調達の邪魔をしたと仰有るなら謝罪します」

「ご理解いただき、ありがとうございます。それから、……」

「まだ、何か？」

「ここからが、本番です。実は当社の技術者、と、その周辺の女性が行方不明になっているんです」

「行方不明ですって？ それは日本の警察の仕事でしょう？」

「本来ならそうですが、トレンコフさんもお存じなんでしょう？」

「いいえ」

芽衣は前菜を食べ終わってナイフとフォークを揃えて皿の手前に置いた。

「当社の技術者、林崎繁和と申しますが、三年前からそちらの работникである青野さん、キム・ヨンイプさんのことですが、接触がありPAC・NEOの情報を漏らしていたようです。しかし、七月から彼の消息がわからなくなりました。現在警察で身柄を拘束されているのは、林崎とは別人の男です」

「ほお、フレンチの余興にしては少しおどろおどろしい話ですな。少しは手加減願いますよ」

芽衣が横を見ると、小林は目配せした。

証拠を何もつかんでいないのに、交渉になどならない。料理を食べた後、人気のないところで実力行使する。と目で語っていた。

芽衣はうつむいてしまった。

——自分はなんと無力なんだろう。

小林が当たり障りのない会話をしながら場を持たせていると、ウェーターが皿を下げてメインディッシュを持ってきた。地元で取れた大きなスズキのムニエルだ。芽衣はごくりとつばを飲み込んだ。ほこほこした白身の上に乗った、黒いキャビア付きのソースがとても美味しそうだ。

芽衣が手を滑らせて、横にあったデザート用スプーンを落としてしまった。

「あ、ごめんなさい」

と、足下に頭をつっこんで探したが、小林に背中をたたかれた。

「不作法をするな。ウェイターが新しいのを持ってきてくれる」

「すみません」

足下にあった、自分のノートパソコンの存在を思い出した。まだ、ウイルスはそんなに感染していないと思ったが、はったりをかますには一箇所でも十分だった。芽衣は横の空いたスペースにパソコンを置いて画面を開いた。

「おい、そんなこと後にしろ」

「待って下さい、少しだけ」

芽衣はスイッチを入れて、無線カードがインターネットにつながるのを待った。

「ほほう、何か面白いデモンストレーションでもあるのですか？」

トレンコフが嫌みを言った。

「あなたの所に、対空レーダーの取扱説明書全二十五巻のファイルを入れたスティック・メモリーを持って行った男がいませんでしたか？」

と、ヤンが芽衣を助けるような口ぶりでトレンコフに聞いた。

芽衣は、——あれ、ヤンが直接持って行ったのではなかったのか、と疑問に思った。

「それがなんだと言うんだ？」

トレンコフは少し動揺していた。

「あれには、ウイルスが仕込んであったんですよ。きっと」

「きっと？ 何を言い出すんだ。ミスター・ヤン！ 確かに対空レーダーの情報はもらったことがあるが、自分の息子が持ってきたんだ。中央からもらったと言ってな。変な言いがかりはやめてもらおう！」

——へえ、ヤンさんは、トレンコフの息子に罠をかけたんだ、と、芽衣は事態を理解した。孫を人質に取られたおじいさんのやることは違うねえと、感心した。

芽衣のパソコンが起動し、PAC・NEOシステム管理ソフトの画面が開いた。芽衣はその中のウラジオストックの一点を指定して、そこの端末パソコンの画面を開いた。

「トレンコフさん。この画面に見覚えはないですか？」

「さあね」

「よく見て下さい。あなたの普段お使いになるパソコンのデスクトップです」

「あ」

「どうです？」

「どうやったんだ？」

「だから、ウイルスですよ。PAC・NEOシステムの入ったパソコンを管理するためのソフトなんです。ふふ」

芽衣は画面を閉じて、地図画面に切り替えた。

極東だけかと思った感染エリアだったが、運良くモスクワ郊外の基地も一個感染していた。

「息子さんは今モスクワに行ってらっしゃるんですかねえ？」

「そ、そんなことは秘密だ。これがなんだと言うんだ」

トレンコフは明らかに狼狽していた。

「モスクワをクリックしたらこの基地のパソコンにつながるんです。PAC・NEOは高空を飛ぶ爆撃機や戦闘機、低軌道の衛星にも反応します。対空ミサイルのミサイルロック信号をかけてみましょうか？」

芽衣はレーダー画面を開いて目標をクリックしてリターンキーを押そうとした。

トレンコフは芽衣の右手を押さえて、動きを止めた。——トレンコフはPAC・NEOシステムの威力を熟知している、と芽衣が感じるに十分な反応だった。

「待て、そんなことをしても単なる事故にしかならないぞ。テロリストになりたいのか？」

「あら、そんなことを心配していらしたのですね。このシステムが出回る地域のロシア空軍の飛行が今後出来なくなるんです。プチャーチン大統領はあなたのことをなんと思いいになるかしら？」

「貴様、……恐喝する気か！」

「トレンコフさんが息子さんと一緒にこのウイルスを拡散させ、空軍を出動不能にさせ、プチャーチン大統領の失脚を狙う。次期大統領はあなた方です。ご協力しますわよ。などと、大統領に思われたら、……」

トレンコフの顔は真っ赤になっていたが、この一言で真っ青になった。

「待て、出回ったPAC・NEOの回収に協力してくれないか？」

「回収？ あなたが納入したシステムの性能保持期限が切れたら、まっとうな品物を納めることですね、でも、それまで黙っていることには協力してあげてもいいですよ」

「条件は？」

「まず、PAC・NEOを第三国に売らないこと」

小林がうなずいた。

「先ほどの、大日本エレクトロニクスへの材料の納入。価格は国際相場通り」

「いいだろう」

「それから、消えた林崎技師と江藤真由美、佐伯美穂、小野千尋、及び、青野の愛人、太田早紀子の身柄の保護と即時帰国が条件です。人権問題は最優先願います」

「おいおい、誘拐までは俺のやったことじゃない」

「でも、林崎さんのことはご存じなんでしょう？」

「彼らは、自分の意思でモスクワに来たんだ」

「では、あなたもご自身の意思で東京にいらっしゃいますか？」

トレンコフは渋い顔になった。

「わかったよ。もうこれ以上はたくさんだ。来るんじゃない」

彼は、グラスのワインを飲み干してため息をついた。

「そんなことはありませんわ。レアメタルの商談もまとまったし、PAC・NEOのウイルスも駆除出来るし、このことを大統領に報告したら勲章がもらえますわ」

芽衣は追い打ちをかけるように、トレンコフに微笑みかけた。

## 10. その後





## 10. その後



(1)



(1)

九月十三日、芽衣は小林から食事に誘われた。

トレンコフが帰った後、誠実に対処してくれ、事件は解決しつつあったのと、ヤンは、ロスで孫と再会でき、それぞれにハッピーエンドを迎えることが出来た。今日の午前中、行方不明になっていた女性たちがサハリン経由で成田に送還されることになったと連絡があった。小林は警視庁の長岡警部補に送還になる林崎たちの保護をお願いして以後の作業は日本側でやることになった。

「小林さん、和食なんてどうですか？」

芽衣がいたずらっぽく誘うと、小林は嫌そうな顔をした。

「せっかく、日本に三ヶ月もいて、お箸くらいは使えるようになって帰って下さい」

「ふん、日本でしか役に立たないものなど、今後二度と使わない」

小林は文句を言ったが、せっかくの宮崎旅行でもあるし、何か美味しいものが食べたいと芽衣が主張するとついに折れた。

「ステーキをおごってやる」

「わぁ、すてき」

芽衣は喜んでついて行った。

二人が入ったのは宮崎駅近くのステーキハウスだった。中は木造の落ち着いた雰囲気、デートにもよさげなお店だった。小林は店主が焼いてくれるカウンターの席に座った。

「座れよ」と小林は芽衣にも席をすすめてくれた。

芽衣はご機嫌の顔で、どっこいしょと座った。

小林は芽衣に宮崎牛フィレステーキ二百五十グラムでいいか、確認して注文した。

「僕はレアで」

「かしこまりました。お飲み物は？」

「いや、いいよ」

——へえ、珍しいなと思った。

芽衣も、せっかくの高級肉を食べるチャンスなので小林の真似をしてレアを頼んだ。

「ね、小林さん。やっぱりお肉はレアが美味しいんですか？」

彼がアメリカ人というわけではないが、気の利いた答えを期待していた。

「さあな、好みでいいんじゃないか？」

「でも、レアだっておっしゃったじゃないですか」

「それは、……今回の事件の肝だっただろう、レアメタルが。ふふ」

「なーんだ。しょうもない。でも、どうして今回、ウラジオ・ポストーク社はPAC4に目をつけたんですか？」

「さあな。新しい企業で短期に利益を上げて大統領に還元する必要があるんじゃないか。今のところ金のなる木らしいな」

おそらく、ウイルスをしかけられたことを大統領に知られたくないトレンコフによって、自主的にICチップが回収されると予想していた。小林ももはや問題にしていなかった。芽衣もこれ以上はこの件に触れなかった。

芽衣は出てきた、コンソメスープを飲んだ。何時間も掛けて煮込んだ野菜のエキスと肉のうまみが胃の中に広がるようだった。ご機嫌で前菜を食べていると、目の前で肉が鉄板の上に置かれ、ジューという音とともに、調味料のワインが振りかけられ炎が上がった。

——うおう。

これをマスターが、熱々のまま、切り分けて二人の前に持ってきてくれた。

芽衣が口の中に肉を放り込むと、香ばしい脂が、舌の上にとろけてきた。

「あふあふ」

「落ち着いて食え」

「ふみまへん」

お腹が一杯になったところで、芽衣は小林に今後の予定を聞いた。

「あの、今晚お部屋に泊まりに行ってもいいですか？」

「馬鹿、俺は夕方の飛行機で東京に入る」

「嘘！ あたしもついていきます」

「いいよ。大使館に報告して、そのままワシントンに帰らなければならない」

「あたしも！」

「馬鹿、仕事だ。NATO軍とロシア軍の間の調整役が必要になったんだ。今回は君の出る幕じゃない」

ウラジオ・ポストーク社からロシア空軍に納入した対空レーダーのコンピュータの中にPAC・NEOシステムのICチップが搭載されたものがあり、ウイルスによる誤動作の危険性があるため、戦闘状態になる前に隠密裡に情報部員が動き回って、事態の沈静化を図るらしかった。

芽衣は悲しくなりうつむいてコーヒーカップを眺めた。

小林の仕事が、トレンコフが自社のレーダーシステムを売り込むために、あちこちのレーダー基地にサイバーテロを掛けていたことがあり、それを穏便に済ませることが、今回の目的だそうだった。

「もう、お役ご免なんですわね」  
「そういうなよ。最初は恐喝されて嫌々ついてきてたじゃないか」  
「でも、……」  
「君は学生だ。一般教養の単位を落とすと卒業に苦勞するだけでなく、社会に出てからもっと苦勞するからな」  
「そうなんですか？」  
「ハンニバルの生まれ故郷は知っているか？」  
「トレンコフのことですか？」  
「馬鹿、世界史上最高の指揮官だ」  
「知りません」  
「世界史を知らずして世界を語る事なかれだ。勉強しておきなさい」  
「もしかして、トレンコフの正体を早くから見破っていたんですか？」  
「いや、この間の商談の時に初めて知った。だが、ハンニバルの名前を使う割に、やり方が全然洗練されていないことが気になってはいた」  
「そうだったんですか。あたしの読みは甘かったんですね」  
「君なりにベストを尽くしたじゃないか。おかげでこれを使わなくてすんだ」  
小林は左手を出して引き金を引く真似をした。  
「もう！」

ステーキハウスを出た後、話す間もなくタクシーで宮崎空港に向かった。ここで、東京までのチケットを買うと、小林はこの間芽衣から借りた金のうち残った分を返してくれた。

「色々ありがとうございます。感謝する」  
「いいですよ。別に。大学からもらったものだし」  
としか、言えなかった。  
「君の協力に感謝しているんだ、現金は後から送金するよ」  
「じゃあ、領収書を送りますから連絡先を教えてください！」  
「悪いな。そっちは国家機密なんだ」

そう言って、すまなそうに笑った。芽衣は何か言おうと思ったが、喋ろうとすると息が苦しくなるような気がし、唇の両端に力をいれて無理矢理にっこりと微笑んだ。

本当に夕方の便で小林は羽田行きの飛行機に乗ってしまった。

搭乗口で芽衣は見えなくなるまで見送ったのだが、最後に彼が振り向いて手を上げたとき、その場に崩れ落ちて涙が止まらなくなった。

——大丈夫？

芽衣がうずくまっていると、航空会社のグランドアテンダントが声を掛けてくれた。

——はい、何でもありません。大丈夫です。

立ち上がり、滑走路の見えるフロアに出て、彼の乗った機体を見ていた。

やがて、ジャパンエア航空の中型ジェットは、導入路を通して滑走路に出て、ぐんと

加速して離陸してしまった。

急に寂しくなってきた。

芽衣はバッグから携帯電話を取り出し、久々に友人の麻衣子に掛けてみた。通路の窓に腰掛けて落ち着いた。

「あら、久しぶり」

電話口からいつもと変わらない日常そのものの声がした。

「ね、麻衣子、あたし、今、宮崎にいるのよ」

嘘っぽかったが、空港からなら自然に思えるだろう。

「え、本当？」

「せっかく宮崎に来たんだから、何か食べに行こうよ」

「えー、芽衣ちゃんそればっかだよ」

「じゃあさ、麻衣子がバイトに行っているハンバーガーショップでもいいよ」

「バイトなんて行ってないよ。でも、いいよ、すぐ行くね」

麻衣子を呼び出した後で、芽衣は東京の兄貴にも作戦報告の電話を入れ、麻衣子と待ち合わせた市内に出るために、空港リムジンに乗り込んだ。了





---

キルヒホッフの法則

---

著 黒川 文

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---